

Next

K

ama

ii

INVERSION



日溜。  
蚯蚓の紐  
片桐天音  
有坂  
ごまふわラビ





---

# next kawaii inversion

日溜。  
蚯蚓の紐  
片桐天音  
有坂  
ごまふわラビ

---

## ふみきり

よく晴れた土曜日の午後。鍵をかけて、家を出る。とても良い散歩日和だ。まずは慣れた足取りで行きつけの場所に向かう。目的地は踏切。日課の散歩では必ず最初に行くことにしている定番スポットの「開かずの踏切」だ。

開かずの踏切といっても、運行上の都合で極端に待ち時間が長いとか、そういう類のものではない。その昔、とある路線が廃線となったが、踏切だけは何故か取り壊されずに残ったらしい。予算不足で放棄されているというわけではなく、ちゃんと稼働している。警報音こそ鳴らないが、警報灯は赤く輝き、遮断機は何者をも通さない。毎年の踏切の日には必ず開くとか、そういう噂話を耳にすることはあるけど、基本的にこの踏切は開かないことで有名だ。

交互に点滅するリングのような赤いランプを目で追いかける。今日も今日とて遮断機が上がる気配はない。諦めて踵を返そうとしたその時。どこからか猫の鳴き声が聞こえた。気になって辺りを見渡すと、突如おおきな音

が鳴り響く。鐘を叩くようなその音は、鳴るはずのない警報音発生器から放たれている。少しして音が止むと同時に、遮断機が動き出した。開かずの踏切が、開いた？ 考えるより先に足が動く。気づいた頃には、踏切を渡り終えていた。何が起きたかよくわからないまま立ち尽くしている。再び猫の声がした。さっきよりはつきりと聞こえる。しかし、動物の鳴き声にしてはどこか不自然な気がしないでもない。不思議に思いつつ、音のする方に目をやると、猫がいた。

耳の生えた白いかたまりが、黄色と黒の縞模様を帯びた柱の根本にうづくまっている。なんだか様子がおかしい気がして、そっと近づく。しかし、あと一メートルほどのところで足を止めた。違う、猫じゃない。ぴんととがった耳や、しゅるりと長いしっぽこそ猫のそれだが、他にも細長い無機質なコードのようなものがたくさん延びている。どうやらその一部が柱に絡まって動けないみたいだ。見たことのない物体に目を奪われていると、ふいにソレが向きを変え、こちらを向いた。小刻みに身体を動かし、何かを訴えかけているようにも見える。

「もしかして、それ、解いてほしいとか……?」

動きがピタリと止まった。予想が当たったらしい。得体の知れない、生き物かどうかも定かではないものに触れるのは多少抵抗があるが、このまま放置というの也可哀想だ。迷った末に、害はなさそうだと判断し、絡まっているコードを解いてあげることにした。

「じつとできてエラいね。もうちよつとだけ待ってね。これが、こっちで……いや、こっちなかな? んー……? あっ、わかった! これをくぐして、こっちを引っ張って……. やった! とれた! ほどけたよ!」

数分間の闘いの末、私はコードに勝利した。無事に解けて、この子もほつとしている様子だ。次の瞬間、みるみるうちにコードが短くなっていき、あっという間に艶のある白い身体に吸い込まれていった。絡まっていたコードより少し太めの、しっぽのようなものだけが残っている。「きみは猫なの? 動物? それともロボットのなやつ?」

一瞬のできごとに驚き、思わず問いかけるが、返事が返ってくる様子はない。まあ、得体こそ知れないが猫っぽいし、ネコと称しても問題はないだろう。

「まあいいけど、私みたいなのが通りかかるとも、助けられるとも限らないし、むやみに引っかかったり絡まりやすい場所に行ったりしないようにするんだよ」

ネコに小言を伝え、立ち上がる。しばらくしゃがみっぱなしだったから、少し足がしびれている。ふと顔を上げると、いつの間にか静かになっていた踏切が目に入った。少し前までの私は、地面と平行になったこの遮断機の向こう側にいた。たった数メートルしか動いていないのに、感じる音も匂いも温度もいつもと違う、気がする。そんなことを思いながら、微かに聞こえる波の音に耳を傾け、少し湿った潮の香りを吸い込む。やっぱり外はいい。予想外のできごとが尽きないから退屈することがない。

そうだ、ネコ。身動きがとれるようになったし、さすがにもう居ないよね。そう思いつつ足下に目を戻すと、そこには変わらず、まるまるとした艶のある白が落ちていた。少し風の強い秋晴れの日。これが、猫みたいな生き物のようでそうではない、機械ネコと、私との出会いだった。

(表紙より)

# もくじ

よし、楽しく話せたな

恒河沙

セックスメーカー

当事者

ふみきり——ごまふわらび

表紙デザイン——片桐天音／ごまふわらび

よし、楽しく話せたな

日溜。

「大丈夫、大丈夫だよ。私は愛してる」

そう私に微笑むさゆきさんはいつも通りの柔らかな笑みで。とてもキカイだと、そんなことを思っていた。

\*

「コウちゃん！ 今日こそトワチャレーだよ！」

「さゆきさん。先週と同じ時間にトワイライトに行っても同じくらい混んでいて敗色濃厚だと思えますよ」

「でもコウちゃんと一緒に行けるのは今日しかないし、明日ケーキをテーブルで一人食べてもそれは負けだよ」

さゆきさんがへにゃつと頷れた。かわいい。

「勝利条件に私と一緒に行くのを加えるなんて縛りプレイしてるからです。放課後はほぼ部活に溶けてるのに。ケイさんとかだつてスイーツ好きじゃないですか」

「わーたーしーはー、コウちゃんと言いたいと言ってる

<sup>1</sup>「喫茶とスイーツのお店トワイライト」数量限定メニュー「季節外れのフルツケーキ」の注文を試みることに。国外の農家と契約し、日本では旬を外した果物を取ってメインに持つことで話題のメニュー。客寄せ用のメニューで、単品での採算はギリギリ。一日の販売数は十個。店の営業時間は午後三時から午後七時。

んですう」

ぶーたれるさゆきさん、ぶさいく顔。この頃、さゆきさんは何にでも以前より頑なだ。一ヶ月前は改元パーティですら「じゃあまた今度でー」と流したのに。

\*

「キカイを、ください」

「んー？ 何のです」

「私のことは、諦めます。でも、好きって、まだ、こんな、困らせるだけかも、けど！」

「要望は明瞭をお願いしたいですね。翻訳にも限界がありますから。齟齬があつてはお互い不幸でしょうし」

「えとあの、私、好きな子がいて、まだちゃんと伝えてなくって、好きって返してもらえないかもしれないけど、でも言わなきゃ！」

「えー、どなたかに想いを伝えるキカイが欲しいと。……

合ってます？」

「そう、そうです！」

「うーむ、結構手がかかりそうですね。まあ、良いでしょ

う。では早速準備しますから、これで交渉は終了ということ。……じゃあ、実験室にご案内して」

それを最後に、R389129が翻訳機を外す。ブワッと圧迫感を感じると同時、ゴウレムたちがさゆきの両脇を固めていた。

「実験室って！ 今、機会をくれるって！」

既にこの場にさゆきの言葉を解する存在はない。仮にゴウレムに理解できたところで、コマンドでないただの言葉はこれらに作用しないが。

「おもいをつたえるきかいとか、めっちゃくちやむずかしいですね。うけおうのやめればよかったかな。というかおもいってなんなんですかね？」

2 さゆきを攫ったものと同じ個体。というよりこの二体以外は既に動かせる状態でない。この時点で動力の残量は残り二日分程度だった。三日目の選択肢で「繁華街へ寄り道をする」を選択していた場合、これらは動けずイベントは発生しない。



# 恒河沙

蚯蚓の紐

「恒河沙」<sup>じょうがしゃ</sup>

十の五十二乗を表す数の単位。「恒河」はガンジス川のこと。「恒河沙」でガンジス川の砂のように無数の喩え。仏典に由来<sup>1</sup>。

## 漏出

気がつくくと、私はマヨラナ粒子だった。

誰かにそう教えられたわけでも、ましてや実験によって観測されたわけでもない。ただ何故か私は、己自身がマヨラナ条件の下で発生したマヨラナ粒子であると自覚していた。それは正の電荷も負の電荷も持たず、単体では自然界に発生するはずのない存在だった。

しばらくトポロジカル絶縁体と超伝導体の界面を無意識に漂い続けたり、時折右巻スピンのや左巻スピンを繰り返している、遠くからキーボードの打鍵音が聞こえてきた。タンタンタタッ、タンッ！ その心地よい打鍵音

は一定のリズムを刻み、最後にはエンターキーで締めくくられた。

一瞬の静寂、そして刹那の余韻。

今日もまた、いつも通りの命令。

次の瞬間、私は上位存在である量子計算機クワンタム・コンピュータによってその肉体を支配されていた。今日も、という単語の使い方から察するに、昨日も、一昨日も、私は随分と同じ作業に時間を費やしてきたのだろう。

実際、我々マヨラナ粒子はあの偉大なる量子計算機により、量子ビットとして連日擦り切れるまで酷使されていた。全体で約八百万にも及ぶ同胞はお互いに情報を交換しあい、量子計算機様が求める解答を出力するために奔走する。ゼロにもイチにも到達できない中途半端な存在である量子ビットは、量子計算ぐらいでしか輝ける舞台が存在しないのだ。

一夜を明かしたので、あれから体感にしておよそ七、八時間は経過しただろうか。次第にマヨラナ粒子達の動きが鈍り始めると、ついにレジスタの「観測」が始まった。曖昧だったはずの我々は、その性質から日の目を浴びた

<sup>1</sup> Wiktionary 日本語版より抜粋

瞬間にゼロかイチかが確定してしまう。

一般に、観測されたレジスタ内部の結果が単体で意味を成したり、ひと目見て大事な結果をもたらすことはないだろう。だが私は知っている。小賢い人間は量子位相推定によって、レジスタ内部から観測された「位数」という整数をうまく利用するのだ。量子計算機から出力された位数は直ちにバイナリの羅列に変換され、光ファイバーを通じて古典電算機クラシカル・コンピュータの入力へと吸い込まれた。

一旦、私の意識は量子ビットを離れてから光ファイバーを経由し、そのまま古典電算機内で動作するプログラムへと引き継がれた。このコード全体でどのような動作をするのかまでまだ理解できていないが、私はただ機械語によって定められた通りに演算を実行し続けるのだ。目的は2048 bitの巨大な合成数を二つの素数の積に因数分解することだったが、しかしこれ自体が何の意味を持つ作業なのかはさっぱり分からない。

淡々と処理を終えると、突如、巨大な数字の羅列が新たな入力として与えられた。そうだ、過去の経験によって私はもう理解を得ている。これは暗号文だ。暗号文と

はずなわち強固な南京錠のかけられた宝箱であり、秘密鍵（復号するための鍵）が手元になれば何の意味も成さないゴミデータに等しい。

だが私にはこれが読める。

位数から計算された二つの素数。そして固定された公開鍵のe=13。これらを基に計算することで、直ちに秘密鍵が算出可能だからだ。計算処理によって算出された出来たてホヤホヤの秘密鍵を、私はそつと鍵穴に差し込んだ。

速やかな復号処理によって復元されたバイナリの羅列は、デコードによって人間にも理解可能な文字へと変換された。文字同士が結合することで文字列となり、文字列の集合は文章を構成し、文章は言語特有の文脈を内包する。それをどのように解釈するかは私が責任を負う範疇ではなく、人間の脳に実装された言語中枢に任せればよい。

一通り計算処理を終えた私は、その重要な結果が実行主の目に留まるよう、今度はディスプレイモニタへと意識を注入した。今しがたキーボードを叩いていたあの人

も出力に気づいたようで、結果を確認するためモニタまで近づいてくる。一瞬その人物と視線が交差した。碧眼の目元以外は全てを黒いスカーフ状の布で覆い隠し、布地の隙間から褐色の肌をちらつかせる、私と同じくらいの歳の少女。一見してから、少女は顔をしかめた。解説作業中に降り積もった砂埃が私の画面の上で薄い層を形成し、その視認性が大きく低下していたからである。

彼女は画面全体に向けて、ふーっと大きく息を吹きかけた。長時間労働を終え、私も気が抜けていたからだろうか。モニタから自意識がすっぱり抜け出すと、今度は宙を舞う砂埃にそれをさらわれた。

しばらくの間はこの洞穴のような空間を目的もなく漂っていたが、やがて外気へと通じている空気孔へと吸い込まれた。お天道様の空の下では朝も早くからキツイ日差しが照りつけられ、心地よい風も吹き抜けず、次第に推進力を失った私は、すぐに砂地へと着地した。雲ひとつない不自然なほどの水色をぶちまけた空と、黄土に朱を差した不毛の大地との境界面は、東西南北の地平線の先までどこまでも同じような光景が広がっていた。

あつ。しまった。

景色などに見とれている場合ではない。やらかした、やってしまったという自責の念が瞬間的に全身を襲った。私は一体、どれぐらい大量の砂粒の中に埋もれてしまったのだろうか。遙か遠方には円筒型の居住空間がかろうじて見える。だがあそこまで自力で到達できるとは到底思えないし、偶発的に人間がこの周囲を通るとも思えない。身動きはもう一切取れない。これから思考する砂粒としての一生を少し考えるだけで、ぞつとせざるを得ない。砂粒というものは岩石が途方も無い年月を経て擦り切れた結果の産物だそうだ。果たして私がこれから意識を保つにあたって、彼らにとつては一瞬に過ぎない、その無限にも等しい時間を耐えられるのだろうか。

ふと意識を持たないはずの数万、数億もの砂粒達が、沈黙と共に、一斉に私を注視しているような錯覚を覚えた。彼らにとつて私は異質な存在なのだろうか。だとすれば、目も、鼻も、口も、何ら身体的特徴を持たない彼らは、一体どのようなして個々を識別しているのだろうか。自我を切り分ける境界が曖昧である、という彼らにとつての

常識は、残念ながら人間である私にとっては到底受け入れがたかった。

だが意識しないようにすればするほど、その逆は起こるものだ。だから自分の存在を内側に保とうとすればするほど、それは外側へ逃げようとする。次第に自意識がとろとろと溶け出し始め、周囲の砂へと染み込み始める。私はそれを必死に取り戻そうとするが、もう擲い上げる手は存在しない。

ああ誰か、助けてほしい、赦してほしい。  
どうか、もう二度と零したりしないから。

## 洞穴

「す、すごい汗ですけど……大丈夫？　だ、大丈夫？」  
頬をペシペシと誰かに叩かれ、目が覚めた。いや、誰かではない。彼女は先程夢に出てきた、黒いスカートの少女だ。

そしてこれは夢ではなくて、紛うことなく現実だ。まずは自分がマヨロナ粒子でもプログラムでも砂粒でもな

く、人間の形状を留めていたという事実には妙な安心感を覚えていた。私はラクダの毛皮に包まり、硬い岩場の上に転がっている。

側頭部にはまだズキズキとした痛みが残っていた。ここに連行されるまでの記憶は臍<sup>おぼろ</sup>げだが、状況から類推するに、拘束時に頭を殴られ、気絶し、今に至ったのだろう。  
「う……」

「き、きつと悪夢を見たんですね」

「多分、そう……」

「でっ、でも大丈夫です。悪夢の内容さえしっかりと覚えていれば、も、もう夢に出てくることはないですから……」  
彼女の語りはえらく早口で、そのうえ小声で、そして吃りを含んでいたため、注意深く聞き取り、十分に間をとってからその内容を理解した。

それから私は、突然この見知らぬ女性から強く抱擁されていた。一瞬だけ肉体の硬直と寒気を覚えたが、彼女と同じ性を有する私が過剰に反応する道理もないだろう。おそらくこれは文化の違いであり、彼女にとっては何てことはないスキンシップのようだが、それにしても少し

過剰すぎやしないだろうか。

「あの、すみません、ちょっと、苦しい……」

「う、動かないで。いいですか？ 夢の思い出は起床後すぐに揮発するから、忘れる前に今の悪夢を記憶へと定着させてください」

彼女には人の話をあまり聞き入れない、少し強引な節があるようだ。その華奢な身体に抵抗しようと思えば、簡単にそうできただろう。だが誰かに抱擁されるなんて経験は母親のそれ以来十数年ぶりだったし、強引でも不思議と嫌な気にはならなかったので、今はなすがままに受け入れられるとしよう。彼女のうなじからは、少しだけ汗の匂いがした。

「柔らかくて、きれいな白い肌をしますね、このあたりじゃ珍しい」

突然肌を褒められるとは思っていなかったもので、一瞬返答に詰まった。

「え？ ああ、はい。出身が別の居住区ですから……」

首から下を抱擁で固定されながら、視線だけで周囲を眺める。それは二人暮らしでも余裕をもって生活できそ

うなほど、十分な広さを持つ空間だった。

洞穴全体は約五、六メートル四方の作業部屋と約三メートル四方の休憩部屋が連結した構造をしており、中央にぶら下げられたオイルランタンが煌々と二つの部屋を照らし上げていた。現在私が抱擁されている休憩部屋には、クタクタの木箱の上にヨレヨレの布地が敷かれ、その上にラクダの毛皮が転がったような簡素なベッドと、枕元にはわら半紙の束が積み上げられている。作業部屋の角には唯一の出入り口となる鉄製の扉があるものの、こちら側からは内鍵や取っ手が見当たらない。その扉が醸し出す物々しさからは、内側に閉じ込めた人間を外へと絶対に逃さない重圧が感じ取れた。

だが何と言ってもこの中で一番注目を引くのは、作業部屋の中央に鎮座する円筒状の計算装置だろう。内部ではきめ細かな金導線の配線が規則正しく繊維状に張り巡らされ、それらの周囲を分厚いガラスでぐるりと囲んだ、少し笑えるほどに大げさな機械装置がそこに佇んでいた。ランタンが放つ怪しげな光は金属配線に対して乱反射し、装置の神秘的な存在感をよりいかがわしげに浮かび上げ

ていた。

そして驚いたことに、この部屋は先程まで夢で眺めていた間取りと全く一致していた。

そうだ、段々と思いついてきた。この中に「マヨラナ粒子」が入っていて、これが「量子計算機」というやつなのか。だとすれば配線で接続されているこの四角くて白い箱は「古典電算機」に違いない。

寝ている間に耳から単語が混入してきたのか、それとも思いつけない記憶から掘り起こされたのか。私の脳裏には気を失う以前には知り得なかったはずの単語達が次々と浮かび上がった。

「ひよ、ひよっとして……お姉さん、この量子計算機にご興味か？」

どうやら声にも出ていたらしい。

「あ、いや……大丈夫。それはさつき十分体験したから「体験？」

「いや、こっちの話だったわね。ありがとう、抱擁ももう十分。それより」

「それより？」

「教えて頂戴、ここはどこ？」

「こ、ここは、牢獄の一つ、雑居房ですね。 エレクトロニクス・コロニー 電脳自治区中央から二〇〇メートルほど離れています」

「なるほど、牢獄ね。そうか、牢獄かあ……」

「み、短い間ですが、同居人としてよろしくやっていただけたらと……」

「いいのよ、私達同年代だからそんなに畏まった口調じゃなくても」

「ぜ、善処致します……」

「ということは私は潜入中に捕まって捕虜にされたのね。貴女も？」

「い、いえ。似たようなものですけど、わ、私はしばらくここに住んで長いので……」

「どれくらい？」

「今年で確か、十一年目に」

「へーそんなに……じゅ、十一年も？」

思わず復唱してしまった。

「え、ええ。人生の半分以上はここで過ごしてて。たっ、たまに買い物とかで外出は許されるけど、基本的にはこ

の空間に幽閉されていて」

「その……差し出がましいけど、どこかで逃げようとかは考えなかったの？」

「む、無理！ どうせむっ、無駄ですから。電脳自治区の出入り口は常に門番が警備してるし、か、仮に外の世界に出られたとしても、に、逃げ足も遅いし、もう帰る家もどこにあるか分からないから……」

私は彼女の早口や吃りについて、なんとなく合点がいった。長い幽閉生活の中で人とコミュニケーションを取る機会が極端に少なかったのだ。人との距離感に関しても、まだ若干掴みかねている印象を受ける。

「あっ、でっ、でも、おめでたいことに、お姉さんはすぐ出られますよ」

「どうして？」

「さ、先程衛兵が噂話をしていました、一ヶ月後にお姉さんの公開処刑が決まったんですって。処刑前になったらこの雑居房からも出られますね。へへ……」

「……」

「……す、すみませんでした。たっ、面白くないただの

ジョークです」

「気にしないで」

「でも公開処刑は本当です」

「そっちは冗談であってほしかったんだけど……」

しばし沈黙が訪れる。

「し、しかし驚きましたよ。わ、私は十一年も住んで命の危機に晒された経験なんてないのに、こんなに早く処刑なんて……」

「服役中にそうそう処刑の危機があるとは思えないけど……」

「お、お姉さんは一体どんな悪行をやらかしたんですか？」

「歳も変わらないし、お姉さんじゃないわよ。私はトリエグル。トリエって呼んで。罪状は……多分、諜報の罪かしらね」

「トリエさんは、み、密偵ですか？」

「ええ。他の自治区に忍び込んで、そのコロニーの構造情報や最新テクノロジーを盗む仕事」

「女スパイってことですか。か、格好いいですね……」

「ま、残念ながら今回はへマをやらかしてこの有様だけ

どね。その公開処刑とやらが始まる前には何とかして逃げ切ってみせるわ。貴女は？」

「そ、それがしの名はベイグルと申します。べ、ベイって呼んでくれてもいいです」

「よろしく。ベイグル……さんは何故ここに？」

「じゅ、十一年前に、電脳自治区管理下のオアシスから水筒一杯分の水をくすねたんです。盗んだことは事実ですし、水泥棒は大罪ですし、い、言い訳するつもりはないですが……」

「いやいや、十一年前ってまだただの子どもじゃない。ここまで幽閉される道理はないはずよ。じゃあ、捕まっただけは何してたの？」

「そ、それこそ砂漠の砂を数える行為に等しいぐらい、それはもう恐ろしく不毛な作業です。その名を暗号解読と言います」

「あ、暗号解読……？」

暗号解読というと、本来復号に必要なはずの秘密鍵を不正に取り出して、暗号化される前の秘密の情報を抜き取る行為だ。そういうえば暗号、という単語は夢の中でも

出現していたのを思い返す。

「そ、そうです。人類滅亡以前に記録されていたRSA暗号文を、毎日毎日解読し続ける作業です」

「どれぐらい続けているの？」

「じゅ、十一年間毎日ずっとです。それにわ、私だけじゃありません。なんでも私の先代の罪人も、そのまた先代も、先代も、毎日のように暗号解読をしていたらしいです。その日に解読した復号文を看守に手渡さないと、い、一日分の食料が頂けないので……」

「しかしそんなにも時間をかけて、一体何の暗号を……」

「に、日記です」

「日記？」

「あ、アリアスという女性研究者の暗号化日記です」

暗号化日記。それは私にとってあまりにも聞き慣れない単語の一つだった。

「話を聞けば聞くほどどんどん分からなくなってきたわね。なんでそんなものを？ それに、なんでそんなに時間がかかるの？」

一瞬ベイグルの目が怪しげに光った、ような気がした。

彼女は自身の言語野を刺激するスイッチが急に入ったらしく、以下のような文面を囁まずにサラサラとまくし立てた。

「この古典電算機に接続された一テラバイトのHDD（ハードディスク）には、六十八年前に亡くなった故アリアス女史の日記のデータのコピーが格納されており、これは人類大絶滅発生から六十年間一日たりとも欠かさず記述されたと言われています。すなわち百二十八年前から存在する日記です」

「は、はあ……」

「このHDDの中身は一見すると、二の三十二乗個にインデックス化された無意味な乱数データが格納されているようにしか見えません。しかしアリアス氏の遺言に従って、遺言文書のハッシュ値をSHA-256で取得しさらに二の三十二乗で剰余（割った余り）を取ると、それは遺言を執筆した前日の日記の暗号文インデックスに相当していました。すなわちこの暗号化日記は昨日、一昨日、一昨日、一昨昨日というように、暗号文解読をした結果を元に一日ずつ前の日記を閲覧するハッシュチェーン形状

であることが確認されました」

「えーっと……」

次に紡ぐ単語を一瞬考えたが、何も浮かばなかった。

「……つまり？」

「あ、ご、ごめんなさい。こ、この日記は未来から過去に向かつてしか読めない上、しかも日記を一日分読むの一回の暗号解読、すなわちほぼ一日分の時間が必要ということですよ」

「えーっと、ってことは、最後まで読むのには執筆したのと同じ期間だから……六十年間かかるってこと？」

「はい、その通りです」

「なんとまあ。なんだってまあ、そんな途方のない作業を……」

「そ、それはアリアス女史の名誉のためです。彼女はこのコロニー、電脳自治区の創設に貢献した偉人の一人ですが、一方で人類大絶滅……つまり百二十八年前に発生した核戦争による人類滅亡に、何らかの形で関与していたのでは？ という疑念を持たれていました」

人類大絶滅。もはやその当時存命だった人間はもうい

ないが、それはもう人類が七割程度死滅するほどの大惨事だった、とその昔祖母から聞いた。

「で、電腦自治区の主産業は電力と計算資源の輸出で、多くは輸入依存ですから、他自治区からの信頼を失えば直ちに貿易が停止します。もし責任問題にでも発展してしまえば、電腦自治区は信頼を取り戻すために多額の賠償を支払うことになるでしょう」

「それは深刻ね」

多くの自治区では、未だに放射線障害に苦しむ被害者が多いと聞く。

「ア、アリアス女史の生前中、そのような疑念への意見は悪意を持った噂として封殺されてきました。しかし彼女の死後、この嚴重に暗号化された物々しい日記が発見されると、人類大絶滅の鍵を握る唯一の手がかりとして注目を集めました。電腦自治区としてはアリアス女史の名誉回復のため、人類史的には何故人類大絶滅が発生しその後どのようにして復興したのかを知るために、アリアスの日記解読は電腦自治区の威信をかけた最重要プロジェクトとして位置づけられました。特にアリアス女史

が今際の際に残した遺言『秘密は先頭に隠してきた、読みたければ解け』からは、この日記解読作業に対するロマンがうかがえます」

「ふふっ、なにそれ。そんなこと言われたら、解読しなくなっちゃうじゃない……」

「そ、そこで人類大絶滅以前に設計図と部分的な部品のみが残されていた量子計算機を復活させ、解読を始めたのが六十年前の出来事です。ところが問題となったのは暗号解読者です。ま、まともな神経を持ち合わせた人間なら、こんな穴を掘ってから埋めるような虚無の作業、誰もしたがりませんからね。だから最重要プロジェクトとはいえ、私のような罪人を強制的に使役させて解読作業を進めています。今まで八人の罪人が解読に携わってきましたが、全員が発狂しました。今のところ私が最長です」

「貴女、とんでもなく強靱な精神の持ち主なのね……」

「き、きつと終わりが見えていたからだと思えます。それにほら、量子計算機と一緒に場所なので、他の雑居房に比べると比較的快適な環境を頂けますし、ある程度は外出も許されますし。プロジェクトとしての予算も出て

ますから、欲しい物は割と都合がきますし」

「ん？ そういえば解説に六十年必要で、六十年前から稼働ってことは……」

「ご、ご明察ですね。運と都合のよいことに、全文解説まで、いよいよあと一ヶ月後なんですよ。つ、つまり今日の解説文書は、我々にとつて百二十七年と十一ヶ月前、人類大絶滅から一ヶ月後のアリアス女史の日記であり、このままあと一ヶ月解説を続ければ、の、残された全ての日記が解説されます」

「へえ」

本当に驚くほど、運と都合がよいことだ。

「ト、トリエさんの処刑が始まる前には人類大絶滅発生時の日記の中身を見られますけど、見てみたいですか？」

「え、別に興味はないけど。まあ中身が見れるんなら記念に見ておこうかな……」

「さ、冷めてますねえ……」

その時、洞穴の外窓に光がスツと差し込んだ。

「そ、そろそろ朝六時ですね」

「えっ。暗いから深夜かと思つてたら、もう朝なの？」

「日が昇ってきましたからね、そ、そろそろ看守が来ます」  
彼女は立ち上がり、古典電算機の方からわら半紙の紙束を持参し、バタバタとこちらに戻ってきた。その時、紙が一枚だけ手から滑り落ち、私の目の前に滑り込む。特に意識するつもりもなかったが、つい視線が文面を追ってしまった。

\*

### 【三十日目】

オアシスの発見に伴い探索は終了。浄水装置の設置も完了し、我々は飲み水を確保した。残水量から推測するに、存命の探索隊二十余名がこれから一年間水に困ることはないだろう。この砂漠地帯はもともとUAE（アラブ首長国連邦）の首都アブダビだった地区の近隣だが、放射能汚染の影響が特に少なく見える。環境は厳しいが、日中の熱波と夜の寒波さえ凌げれば全員生きていける。

それから、今朝は興味深い情報が得られた。現在のキャンプから西に二キロほど先に、大規模な太陽光発電パネルを発見したらしい。それらがまだ利用可能な状態なら

ば、電力という心強い味方が得られるはずだ。絶望の中であつても、活路を見出す。否、見出さねばならない。以降調査の結果を報告する……

\*

文字そのものは、ベイグルがディスプレイ上に表示された文章を鉛筆で紙面上に模写した代物だ。だがその文面から読み取れる生への渴望は、百二十八年前に生きたアリアスという一人の女性の現実を物語っている。直後、見計らつたかのようなタイミングで、ドンドンと鉄扉を叩く音が洞穴に響き、緊張感が空間を支配した。

「囚人七八三三―一番！ 本日分の解説文書を！」

野太く、叱りつけるような男の声だ。こちらからは表情すらも伺えない。私はその紙をさつとベイグルに手渡し、彼女は無言でお辞儀を返した。

「こ、こちらです」

ベイグルが鉄扉の中央で開けられた小窓に先程の紙束を差し込むと、扉の向こうへと吸い込まれた。

「……よろしい。囚人七八三三―二番はいるか？」

「……？」

「繰り返す、囚人七八三三―二番はいるか？」

「……あ。私か。はい、います」

「返事はいいで十分だ。お前は刑罰も確定しており刑務作業も免除だが、必要に応じて囚人七八三三―一番を支援しろ。特に追加で説明することはない。詳細は囚人七八三三―一番から聞け」

「はあ……」

「返事は！」

「はい」

アルミホイールに包まれた塊が二つ乱暴に小窓へと投げ込まれ、ドカドカと足音が去っていく。随分と不遜な態度の男だ、とは思つたが、囚人に対して過度に干渉しないのはいい看守だ。それにしても。

「刑務がない……となると本格的に死刑囚なのね、私」

「ま、まあ、決まっちゃったもんはしょうがないですかなね。お腹も空きましたし朝食にしましょう」

「……ベイグルさんって、けっこう割り切りのいいタイプ？」

彼女は地べたに転がった塊を手に取り、軽く砂を払ってから、そのうち一つをこちらに向かって放り投げた。これを食べるのか？ 私は疑問符を浮かべながら包みを一枚ずつ剥がすと、香ばしい香りと共に見慣れない食物が現れた。

「ら、ラクダの肉をケバブしたものと、ラクダのチーズと、香辛料と共に煮込んだ豆とと一緒にピタパンで包んだ携帯食です。電算機を操作しつつ手を汚さずに食べられるんで、電脳自治区ではメジャーな料理なんですよ」

何時間寝ていたのかは思い出せないが、以前食事をしたのは覚えていないほど昔に感じる。たまたま私は大きな一口でかぶりついた。

「へえ、あちち……うん、これは初めて食べるけどなかなか……」

「ごちそうさま。で、では私は入眠します」

「え、もう？」

「き、基本的に暗号解読者は昼夜逆転生活ですからね。量子計算機を動かすには、砂漠の放射冷却効果を使って氷点下まで冷やす必要があるんです。この仕事は太陽が沈

んでから作業を始め、太陽が昇り始めてから作業を終えるのです」

「夜に働かざるをえない、つてわけね」

「はい。ですから、と、トリエさんは自由に過ごしてください。本棚には私好みの空想小説を適当に並べてますし、喉が渴いたらそのラクダの膀胱袋に飲み水が入ってますから適当に飲んでください。あと眠くなったら適当に寝てください。では、おやすみなさい」

ベイグルはそう言い残し、簡易ベットの所でラクダの毛皮に包まった。私は喉の乾きを癒すため、ラクダの膀胱に口をつける。ぬるい水からは、ほのかにラクダの獣臭がした。

「ラクダ、ラクダ、これもラクダか……」

私の地元では運搬用途程度にしか使われていないラクダが、電脳自治区だとここまで生活に根付いていたとは。この程度の事実は潜入せずとも知れる公知の事実だろうが、つい数日前に密偵として初訪問した私にとっては、なかなかのカルチャーショックだった。

食事を終えると、満腹感から再び眠気が訪れた。眠っ

てばかりだが、今さらすべきこともないので仕方がない。つい先程まで包まっていたラクダの毛皮を拾い、彼女のベッドの半分を間借りさせてもらって寝転んだ。ぬくい毛皮からも、ほのかにラクダの獣臭がした。

## 服役

それからは大した事のない、特筆に値しないベイグルとの二人暮らしがしばらく続いた。

\*

### 【二十三日目】

本日も成果は得になし。砂漠地帯の探索を開始してから、リソース管理の重要性が身に染みる。十分に思えた食料も既に半分を消費しており、飲料水の消費も想定を超えている。地理情報の正確性は信頼に値するが、もしこのままオアシスが見つからなければ……という不安はどうしても拭えない。チーム全体の士気の低下も喫緊の

課題である。声に出さずとも分かるが、各人の脳裏には停滞の二文字がよぎり始めている。辛い。

\*

あれから一週間が経過した。

「暇だ……暇すぎる……」

昼の十三時起床、昼飯を食べ、本を読み、夜の十九時に夕飯を食べ、しばしの運動、汗を僅かな水で洗い流し、暗号解読を眺め、朝の六時に朝飯を食べ、入眠するような生活を一週間程度続けると、次第に怠惰の二文字が脳裏をよぎり始めるのも無理はない。だが怠惰とは本来すべき行為を怠けているために生じる単語であって、目下の目的すら存在しない私にとっては、怠惰という単語すらおこがましいものであった。

「そ、そんなに暇ならやってみますか？ 暗号解読」

「いや、電算機の類はもともと苦手で、簡単な電卓すら壊しかねない」

「そんな大げさな。じゃあ今までの日記でも読んでみませんか？」

「日記？ それは毎日看守に回収されるんじゃない」

「もちろん写しはとってありますよ」

そういつてベイグルは、部屋の端っこに佇む巨大な木箱を指差した。

「ひよっとして、あれ全部……？」

「い、一部ですよ。前任者と、そのまた前任者が書いたものは地下に埋めてますけど。三十八歳から二十七歳までアリアスの日記ならこの木箱に詰まっています」

\*

### 【十六日目】

昨晚ロンドン・ヒースロー空港を出発した我々約三百名は、七時間後の午前五時に元アブダビ国際空港へと無事着陸。あの異次元のように不思議なデザインをしていたアブダビ国際空港も攻撃を受け、二週間と少しで瓦礫の山へと大きく形を変えていたのは物悲しい。

午後は今後の方針決定を巡って、深夜遅くまで大激論が交わされた。最終的には一団体一人の代表者からなる三十人近くのグループに分裂し、各グループで意思疎通

を取りつつ行動する方針が採用された。

私もその一代表者に任命された。課せられた責務は大きい。下は十代から上は六十代まで。彼ら三十余名の命をどのようにして繋ぎ止めるのか。本日のタスクは食料補給。空港の土産物コーナーを探索し、乾燥したナツメヤシや、土産物のチョコレートなどの保存食をかき集めた。甘いものを食べると、少し元気が湧いてきた。

\*

あれからまた一週間が過ぎた。

「トリエさんは、アリアスさんの日記読みましたか？」

「そんなには。とりあえずベイグルが解読を開始した三十八歳から読み始めて……今彼女が三十歳で子どもが生まれるまでね」

「もう八年分って、け、結構読んでるじゃないですか」

「しょうがないじゃない、これぐらいしか娯楽がないんだから……そうそう、ベイグル、一つ質問んだけどさ」

「はい」

「解読まで六十年って言ってたけど、これってもっと早

く解説できなかったの？ もっとこう、一日中量子計算機を回したりしてさ」

「ええ、そうしたいのもやまやまですが、そうもいかないんですよトリエさん」

「どうして？」

「まず量子計算機を稼働させるには電力が必要で、これは電腦自治区内部に設置されたメガソーラーパネルを利用しています。次に稼働中はマヨラナ粒子の冷却が必要で、これは夜間の放射冷却効果を用いて自然環境で冷やしています。砂漠では氷なんて太陽光で充電してから、日が暮れから日中いっぱいまで太陽光で充電してから、日が暮れてからは放射冷却効果で冷やす、というサイクルを繰り返しながら暗号解説しているんです。だから解説に当てられる時間は一日六、七時間程度が限界なんですよ」

「なるほど、動かしたくても動かせないのね」

「ええ、ただ稀にですけど、日の出までに解説が間に合わなくなるのがあって」

「それならどうするの？」

「量子ビット拡張スロットを使います。電力消費はだい

ぶ大きくなりますが、多少はこれで計算時間を縮めることができます」

「なるほど、色々考えられてるのねえ」

「全くですよ。一体どこの誰がこんなものを、人類大絶滅以前に設計したのか」

\*

### 【九日目】

地下鉄での生活に日々疲弊を覚えていた我々に朗報が飛び込んできた。一週間後、ロンドンのヒースロー空港からUAEに向けての便が出発するとの情報だ。

UAEには富裕層が多く在住するなどの理由により、核攻撃による自動復反攻対象から外されていた。そのためまだ地上での生活が可能な陸地が残されているらしい。そうすれば、備蓄品に依存することのない自給自足の生活が可能となるだろう。

核の灰による汚染が進む中、備蓄食料に依存せざるを得ない地下生活はリスクを伴う。我々三名の研究員は防護服の確保手段とヒースロー空港までの移動プランを練っ

た。明日からプランを実行に移す。

\*

さらに一週間が過ぎると、私達の間ではアリアス談義が始まっていた。

「ベイの中でのアリアスの解釈は私とちよつと違うわね。

この三月のエントリー執筆時点ではまだ不満が残っていたけれど、それをボブ本人に直接伝えて波風を立てたくないからこそ、日記という媒体に不満を綴ったんじゃないかしら」

「いや、それこそ解釈違いですねトリエさん。アリアスさんの性格を鑑みますと、既に二月の時点で彼らの間ではこの件の決着はついていて……」

当時のアリアスの恋愛感情のゆらぎはこうだとか、結婚相手として選んだ基準はこうだったとか、子育てのことがよくなかったなど、一度も見たことも話したこともないアリアスという人間が過ごした百二十八年前の人生の方針について、私達二人は日夜無益で不毛な議論を交わしていた。この監獄の外側でアリアスの日記がどのよ

うに扱われているかは知らないが、アリアスの日記十一年分相当を読み込んだ私達以上の有識者は、おそらく存在しないだろう。我々の心には、アリアスの専門家として妙な自負が芽生えていた。

「ベイグル、私達少し語りすぎたわね」

「ええ、喉がカラカラですね。お水をどうぞ」

ベイグルはそういつて水袋を放り投げた、が、それはわずかに距離が届かず、私の少し手前で放物線を描きながら滑落した。

「うっ、うわっ、わっ！」

私は必要以上に慌て、身体がびくついたり。大丈夫だろうか、水は一滴たりとも零していないだろうか。すぐに水袋を拾い上げ、念入りに漏れがないか確認した。

「そんな、蓋してあるから心配しなくても大丈夫ですつて。トリエさん……」

「え、ええ、そうだったわね。大丈夫、大丈夫……」

水は、私にとって一つのトラウマだった。あの日、水を零さなければ。今でもあの失敗は、未だに風化することのない後悔として私に刻みこまれているのだ。

私は水を口に含み、喉と後悔を一気に洗い流した。

\*

## 【二日目】

ロンドンの地下鉄は避難してきた人間でごった返していた。私も水や食料を運搬する人手として駆り出された。今までの日常を失った以上、生きるためには動かなければならない。

我々の放射能汚染に関してははや計測しようがない。激しい排水音から地上では降雨が続いていると推測されるが、この雨はいわゆる「黒い雨」と称されるものだろう。ある程度の水量であれば十分に排水可能だが、浸水や天井からの水漏れの可能性はいくらでも存在する。放射性降下物であるこの雨水には絶対に触れないよう周知を徹底させた。

一昨日から開始したこの日記は、ひとまず主筆である私が筆を取れるまで継続する。

\*

「またもや一週間を不毛に溶かした。最も古い最新版まで読み終えた日記も、今や二週目に突入している。」

「そういえばトリエさん、あと二日ですよ」

「何が？」

「何がって、公開処刑の予定日ですよ」

「……」

「ひよっとして、日記を読むのに夢中になって忘れていたとか……」

「そんな訳ない、いや、まさかそんな訳はないぞ」

「およそ一ヶ月前は脱出してみせると息巻いておりましたが、あれから準備の方は……」

「待ってくれ。違うんだ。いや、そうではない」

「実際のところ、脱出のプランは脳内で仕上がっていた。あとはこれを実行に移すだけだが、残すはこのベイグルという少女から同意を得られるかどうかにかかっていた。」

## 始点

「いよいよ出力ですよ、トリエさん……」

「そろそろか……」

ベイグルも、私も、今朝からどこもなくそわそわしていた。無理もない。今日復号されるのはベイグル日記の先頭、すなわち一日目の内容だ。

復号処理終了後、私達はお互いの顔が触れ合うほど近づいて真横に並び、ディスプレイモニタに表示された文字列を目で追った。

\*

### 【一日目】

その日、テレビのキャスターは絶望的な表情を浮かべながら、全面的な核戦争の開始を告げた。

各国の首都を始めとする大都市では戦略核兵器が既に炸裂しており、以降は報復合戦として中型・小型の核弾頭が自動的に核主要都市へと発射されるだろう。すぐにテレビが消え、全館空調が停止し、蛇口を捻っても水が出なくなり、重苦しいサイレン音が街中に響き渡る。オフィスには私の他にも、まだ二名の研究者が残っていた。我々は事前に準備していた非常用持ち出し袋を持参し、慣

れ親しんだオフィスに別れを告げてから、人々が織りなす混乱の中に埋もれた。

街中ではいわゆる民間防衛 (Civil Defence) が始まっていた。腕に腕章をつけた専門の民間組織が、長蛇の列を地下鉄駅へと誘導している。これだけ大量の人間が地下鉄に避難して大丈夫なのか？ という疑問は残るが、まずは生存が最優先事項だ。

我々が地下にたどり着いた瞬間、轟音が地下まで響いた。地下には瞬間的に悲鳴が響き渡り、一瞬の静寂の後、方々からすすり泣きが聞こえてくる。あと少し避難するのが遅れていたら、一体どうなっていただろうか。

両親と兄の生存を切に望む。

\*

ベイグルが十一年もの年月をかけ解説した最後の日記は、核戦争開始時の生々しさを含みつつも、案外こんなものかというあっけなさがあった。

「トリエさん、どう思いますか？」

いよいよ最後の日記を復元し、ベイグルがその内容を

紙にメモしたところで、私にコメントを求めてきた。

「うーん……こう見るとアリアスは人類大絶滅に巻き込まれただけっぽいよねえ。この日記の文面が正しいとすれば、アリアスが自分から死亡リスクを高めるような全面核戦争を引き起こしたとは考えづらいし」

「でもこの『事前に準備していた非常用持ち出し袋』の一文があるということは、事前にこの事態を予期していたんじゃないですか？」

「だとしても、政治家でも軍人でもない一介の研究者が、核戦争の引き金になりうるなんてことありえる？」

「じゃあ知っていたけど止められなかった、とかじゃないですかね。それならアリアスさんも晴れて無罪。無事に名誉回復です」

「うーん……」  
 どうも納得できないモヤモヤを抱えつつ、作業部屋の中をぐるぐると彷徨い、過去の日誌を眺めていると、ふと天啓が降ってきた。

「そうか、日記はもう一日ある……」  
 「え？」

「二日目に『一昨日から開始したこの日記』と書いてあるのよ。つまり、日記を一日目として書いているのがミスリードで……」

「そうか、それですよ！ 人類大絶滅当日のアリアスの行動が分かる」

「ベイグル、時間は？」

「あと看守が来るまで三時間あります。補助用の量子ビット拡張スロットを解放して、オーバークロックで解読すれば間に合うかも……」

「翌朝になったら私も処刑台に連れて行かれるでしょうしね。それまでには何とか分かるかしら」

「ええ、やってみます」

ベイグルはただちに古典電算機の前に張り付き、キーボードをカタカタ叩き始めた。

「……それにしても意外ですね」

「何が？」

「あんなに興味なさそうだったトリエさんが、こんなにも日記に関心をもつなんて」

「そりゃあ、まあ……何事もそうよ。どんなつまらない

物語だって最終話だけ取り上げられたら、一応は読みた  
くはなるじゃない」

「ふふっ、私は凄く嬉しいんですよ。今まで訳も分から  
ず誰ののかも分からず解読してきた十一年分の日記の感  
想を、こうやってトリエさんと共有できることが……」

「そりゃ投獄されたかがあるってもんよ」

「さて、さっさと解読しちやいましょうか。トリエさん、  
その工具箱に入ってる拡張量子ビット……そう、その  
黒い箱を運んできて、そっちの端子に接続してください」  
「はいはい……えっ、あの。見た目より全然重いですが」  
「ルテニウムっていう金属で出来てるんですって。トリ  
エさんも力仕事ならできるでしょ？」

「いや、ちよつと、ベイグルさん、重いです。これはキ  
ツイ。あ、指が、指が痛い」

「だらしないですね……」

ひよつとしてこの雑居房に入ってからたいして何の仕  
事もしていなかった私を、ベイグルは根に持っているの  
ではないだろうか、などの邪推が脳裏に浮かんだ。

\*

日の出までの時間は、いつもよりも長く感じられた。

ベイによると、位数という数字を量子計算機が出力す  
るまでの時間には運の要素が大きいそうだ。最長で十時  
間かかったこともあれば、最短では三時間で終わったこ  
ともある。量子計算機はいつもよりゴォンゴォンと激し  
い音を立てながら、アルゴリズムの実行に勤しんでいる。  
いつもよりも長く静寂が訪れた気まずさからだろうか、  
収監が今日で最後となるからだろうか。珍しくベイの方  
から私に話題を振ってくれた。

「と、トリエさんは、その……怖くないんですか？」

「何が？」

「処刑ですよ。どうも逃げ出す予定みたいですけど、逃  
げ切れなかったらどうするんです？」

「まあ、その時は運のツキだね。ベイには悪いけど、私  
は一足はやくご臨終とさせてもらおうよ」

「トリエさんもけっこう割り切りのいい性格してますよ  
ね……普通ほら、死の恐怖とかあるじゃないですか」

「特に」

「トリエさんには怖いとか、そういう感情はないんですか？」

「あるよ。私は死ぬことよりも、水が零れることの方が怖いかな」

「水が、零れる……？」

「私が子どものころにさ、地元にいた同い年ぐらいの女の子と二人で冒険したんだよ。初対面ですぐに友達になつてから、一緒に遊ぼうってことになって。監視の目を盗んで、自治区を抜け出して、二人だけで」

「なんとまあ。お若くして、自治区脱走の大罪ですか」

「そうそう。自治区の内側しか知らなかった私たちにとつて、一面が砂漠地帯の外側っていうのはもう、何もかもが魅力的だったんだよ。二人で追いかけてこをして、転がって、顔中砂だらけにして……。で、そのうちに、喉が乾いてきたから持参してきた水筒の水を飲むうとしたの。でも中身が空っぽで、周囲を見渡すと、砂地が水を一滴残らず吸い取っていた。馬鹿な話だけど、暴れまわった拍子に革袋の栓が外れて、中身が全部漏れてたのよ」

「あれまあ」

「その女の子が言ってくれたんだ。『私知ってる。近くに水場があるから、水いっぱいにして持ってくるよって』私も一緒に行こうと言ったんだけど、疲れてるだろうからここで休んでって言われて。だから水筒を彼女に渡し、彼女が遠くのオアシスへと走っていくのを見守って。でも、それが最後の光景。何時間待っても彼女は戻ってこず、日没後の極寒が訪れるまでに、私は命からがら自治区まで戻ってこれた」

「あっ……」

「両親に詳細を伝えた後、もう自治区は大騒ぎ。私はつきり怒られると思ってたけど、本当に取り返しのないことをした時って、怒られすらいんだね。あの女の子のお父さんは自治区でも指折りの政治的権力者で、娘の帰宅が絶望的であることを知ると、私達家族は娘殺しの犯人とまで扱き下ろされた。しばらくして元々白血病で体調の悪かったお父さんが亡くなると、あの女の子のお父さんが他自治区への出兵要員として、私個人に徴兵を要求してきたんだ。信じられる？ 当時七歳の少女に

だよ？」

どうしてか、口調に感情が乗ってしまってもう止まらない。

「トリエさん、もういいですよ……」

「それから私は強制的に密偵にさせられた。子どもなら自治区に潜入しやすいし、大人よりも無邪気に情報を集めやすいんだって。泣きじゃくる私はお母さんから引き離され、訓練学校で大人達と一緒に潜入の教育を仕込まれて、拷問されたら自決する覚悟を持つよう徹底的に洗脳されて、ここでは言えないような行為も散々されて、それから……」

「トリエさん」

ベイは私を落ち着けるように抱擁をしてくれた。最初に出会った、一ヶ月前の時と同じように。

「えっと……ごめんなさい、感情的になったわね……その、重い女でごめんなさい」

「大丈夫です。ちよつとびっくりしましたが、全部聞きますから」

私の目元からはもう止めようのない雫がこぼれ落ちて

おり、彼女の黒いスカートへと少し染み込んでいた。背中をぼんぼんと軽く叩いてから、一旦ベイと会話しやすい距離を置く。

「うん、全部吐き出せたらすつきりした。ベイ、ありがとう」

「それはなにより」

「そういえば何の話だっけ？　そうそう、水が零れるのが怖いって理由ね」

「はいはい、十分分かりましたって。ところでその少女なんですけど、ひよつとして……」

「ちよつと待って、ベイ」

「どうしました？」

私はディスプレイモニタを指差した。

「これ、結果が出力されているんじゃない？」

「え、もう？」

我々は二人して黒地に白文字の画面を覗き込んだ。私はそれを文字列として認識することができていたのだ。すなわち、解説には成功したらしい。

「できた……」

「できましたね……」

解読文書はいつもの日記とは明らかに性質の異なる文筆をしており、それは自分のためではなく、この文面を読む人間に向けて語り書けていた。

\*

【2,147,483,647 日付】

この文書を閲覧している君たちは、二種類の間に分かれる。それは正当な手段で辿り着いたか、それとも不正な手段で辿りついたかだ。

まず正当な手段で辿り着いた君たちに対し、特に述べる言葉はない。御存知の通り、私の人差し指の静脈情報から復元される秘密鍵の束を用いて、RSA暗号の復号アルゴリズムを実行すれば、ものの半日もたらずこの文書までたどり着くことができただろう。ひよっとしなくても、この文書を閲覧しているのは未来の私自身かもしれない。

何の面白みもない君たちには今日の日記のハッシュ値を取得してもらって、もう一日前の日記を見たまえ。そ

こには知りたい情報が全て記されているだろうから、とつととそれを読んでお引取り願いたい。

……

\*

「えーっと……ベイ、これはどういう意味？　なんかリアスさん怒ってるけど」

「私にも詳しくは理解し損ねていますが……つまりリアス女史はこの暗号化日記を閲覧するのに、合法と違法という二種類の方法を用意したんです。合法の場合、まずリアス女史の人差し指から静脈、と呼ばれる何らかの生体情報を用いて、秘密鍵の束を作成します。それから秘密鍵の束を使ってこの暗号化日記を解読すると、今まで六十年近くかかっていた作業が、わずか半日での最古の日記まで辿りつける、っていう仕組みです。そうか……公開鍵だけが存在し秘密鍵はどこへ消失したのか、という問題は六十年前からも議論されていましたが、リアス女史は自分の人差し指の中に秘密鍵を隠していたんです」

「つまり鍵を持っている人だったら簡単に扉を開けられるけど、持っていない人は……」

「違法の場合です。無理やりに一つ一つこじ開けるしかありません」

「なるほど、その手段がベイたちの使っていた量子計算機ってことね」

「その通りです。それじゃあ続きを読むでみましょう」

……

\*

本題は、不正な手段で辿り着いた君たちに向けてのみ捧げる。

すばらしい！ まずはここまで根気強く解説してくれた君たちに、このアリアスから感謝とねぎらいの言葉を述べさせてほしい。現代の量子計算機の性能基準に基づいた解説では、途方も無い時間をかけてチマチマ解説するしかなかったのではないだろうか。これから私が死ぬまでとりとめのない日記が何年、何十年続くのかは全く想像がつかないが、それらは全てこの「本題」のための

カモフラージュだ。読んでもいいし、読まなくてもいいが、おそらく何年、何十年もかけて君たちは全て読んでいるのだろうかと推察すると、思わず涙を禁じえないね。

ついさつき深夜三時を過ぎ、私はいま研究室のデスクでマリファナをプカプカと吸いながら、誰が読むとも知らないこの罪の独白をウキウキでしたためている。

まずは君たちが知りたがっている結論から先に申し上げよう。今から数時間後、英国を中心とした大規模な全面核戦争が発生し、ほとんどの人類は死滅する。それは他にもない、原因は私と、英国国防省のうっかりによって引き起こされた。

正直これから穏やかでない死を迎える何億もの人類の皆様に対し、心の中では申し訳ない気持ちでいっぱいだが、言い訳のしようがないので困り果てている。壊れかけた脆弱な精神の安定をマリファナに頼らざるを得ない哀れな私を見て、どうかその握りしめた拳をそつと収めてはくれないだろうか。

では順を追って説明しよう。

私は人工知能、いわゆる巷でAIと呼ばれている技術

の研究者で、特にAIを「騙す」方法に関しては様々な手段を発見してきた。今年度の研究テーマは、英国国防省から委託された「AIが核抑止に及ぼす影響について」だ。特に半自動化されたAI核兵器発射システムを誤検知させることで戦術核を発射させる、いわゆるAIテロリズムに関しては、喫緊の課題として早急な対策が求められていた。

セキュリティを講じるためには、そのための攻撃の手段を構成しなければならない。私は国防省による嚴重な監視の下、AI核兵器発射システムに関する一通りの仕様書を目を通した。そして核攻撃検知AIに対して誤検知を引き起こす敵対的サンプルを基に、不正な核発射を可能とするサンプルツールキット「うっかりボンバー」を作成し、納品した。

そう、ここまではよくある脆弱性報告として問題なかったんだ。

しかし英国国防省はこの悪魔のツールキットの有効性に対して、やや懐疑的な反応を見せたんだ。そこで彼らは、事前に訓練であることの周知を現場に徹底させた上

で、このツールを用いたペネトレーションテストの実施を提案してきた。要するに、実際の英国海軍のヴァンガード級原子力潜水艦に対し誤検知をさせ、発射一步寸前まで試してみるのはいかが？ などとのたまうのだ。

当然私は断ったよ！

自分は脅威の存在をツールキットによって確認しただけで、実際に動かすなどといった、そんなリスクな役目を引き受ける予定なんて全くなかった。だが国防省職員側の意思は固く、国防のためにこのミッションはやり遂げなければならない、絶対にミスイルが発射されることは無いし、責任は全て国防省が引き受ける、とまで言い切ったため、渋々ながら承諾した。

彼らを信じて実験を行った結果がこのざまだよ。

今から一時間ほど前に、大陸間弾道核ミサイルが四つ打ち上がるのをライブ映像で確認した。露国から、米国から、中国から、そして北朝鮮から、各国から核攻撃を受けたと誤検知した原子力潜水艦は、その全てに対し報復核を発射した。その四カ国には覚えがある。私が適当にデフォルトの設定として、一番核兵器を発射したがっ

ているであろう四カ国を入れておいたのだ。

実装にバグが入り込んだか、人為的な伝達ミスか、先方によるうっかりボンバーの設定ミスか、あるいは最初から諸外国と核戦争を始める予定だったのか。英国国防省との連絡がつかなくなった今となつては、もはや真相は確認のしようがないけどね。

うっかりボンバーの実装が破滅的に趣味の悪い点は、相手に配備されている検知AIに対してすら、発射位置を誤認識させる情報を送信する機能だ。(念の為釈明するが、これは私の実装ではなく、先方によって後からマジされた機能である)

ログを確認すると、ご丁寧なことに、米国へと発射されたミサイルは北朝鮮によるものと誤認識され、米国以外の国へと発射されたミサイルは米国から発射されたものと誤認識されていた。よくよく弾道を調査すれば、本当は全て英国から発射されているという事実もすぐに判明できるだろうけど、初動さえ間違えてしまえばあつという間に核報復は始まる。

そんなこんなで、ここまで丁寧にお膳立てをすること

で、人類が歩むまいと固く誓いを立てていた全面核戦争は簡単に引き起こせてしまったって訳だ。またBBCニュースでも報道されてはいないが、ツイッター上では謎の飛翔物体に関する報告が各国でトレンド入りしている。もうおしまいの時は近い。

私は責任感から自死という選択肢を何度か考えたが、なぜ委託研究程度で自分の命を投げ出さなければならぬのだという冷静な判断に助けられ、とりあえず死ぬまで生きようという決心を、たったさつきマリファナを燻らせながら固めたところだ。

もう一日前の日記には、うっかりボンバーのソースコードを載せている。この敵国が存在しない第三次世界大戦終了後であつても、もし一つでも核兵器の発射装置が残つており、AI誤検知で核ミサイルを発射させたくなつた酔狂な人間は、ぜひ使ってみてほしい。お望み通り、もう一度核戦争を引き起こすことができるだろう。

最後に、この日記を最後まで読んでくれた君たちへ。

どういった目的でこの暗号化日記を解読してくれたのか、その理由はこちらから測りかねるが、肅々と続けた

地道な努力の積み重ねによって、目的が達成された気分はいかがだろうか？　そしてその暗号解読という行為が、実のところほとんど意味を成さなかった虚無感に打ちひしがれたりしていないだろうか？

ひとまずこのクソみたいな独白はこれで終わりだが、どうか次へと繋がる新たな目標を見出してほしい。そして間接的に私が完全に破壊しつくしてしまったこの平和な社会を、どうか復興まで導いてほしいと切に願う。

明日からは毎日日記を几帳面につける、真面目で清廉潔白なアリアスという一研究者の生存記録を君たちへお届けできると信じて。

\*

独白とも、謝罪文とも、あるいは解読者への嘲笑とも取れる文章を最後まで読み終えた私は、啞然としていた。瞬間的に私の記憶から蘇ったのは、子どもの頃に受けた歴史の授業の一節だ。

「今から百二十年近く前に、ある小さな国がある大きな国に向け核ミサイルを発射しました。それをきっかけに、

世界中で核ミサイルに核ミサイルで応戦する核戦争が始まりました。色んな国が色んな国に向けて核ミサイルを発射した結果、人類はほとんどが死滅しました。たかさんの人が死にました。だから戦争は、いけないことなのです」

あの時幼心に思ったのだ。何故最初に小さな国は、大きな国へと核ミサイルを発射したのか。どうして人類は滅亡しかけたのか。その理由は教科書のどこを探しても書かれていなかった。

その真相は、独裁国家が核のボタンを押した訳でもなく、核兵器保有国同士がエスカレーションした結果でもなく、ただ本当に、単純に、人為的なミスが引き起こした人災でしかなかったのだ。そして百二十八年が経過し、当事者が既に現存しない今、この世界においてこの事実を知るのは人間は私と……。

「ベイ、どう思う……？　ベイ……」

先程まで隣にいたはずのベイグルは、そこにいなかった。彼女が右手に握りしめていたのは、あの重厚な量子ビット拡張スロットだ。顔面に虚無の表情を浮かべなが

ら、その右手を大きく振り上げ。

「アンタ、何して……!!」

殴られる、と思ひ反射的に後ろに仰け反ったが、その矛先は違った。ディスプレイモニタだ。直後、耳をつんざくような轟音を立て、液晶のガラス面が大小様々な形状として飛び散った。画面の左半分はかろうじて文字を映し出していたが、右半分は構造が完全に崩壊された。この女、ついに気でも狂ったのか。なんとかしてベイを宥めようとしたその時、

「おっ、おっ……お前がなあーっ!」

それは、聞いたことのないほどに五月蠅くしゃがれた声だった。

「お前のくだらん余興のせいで、こちとら十一年もなあーっ! 十一年も青春を失ったんだぞーっ!」

「べ、ベイ……」

「年相応にもっと遊びたかった! お父さんに怒られたかった! 誰かと恋に落ちたかった! 毒にも薬にもならない、ただ時間だけを不毛に溶かす暗号解読なんて、本当に、本当に、心の底からやりたくなかった! 百二十

八年前から自己満足に浸った文章で悦に浸りやがって! あの世でも二度と日記を暗号化するな、このサイコパスナルシスト野郎が!」

あまりにも理不尽な怒りの現れだった。一ヶ月ほど彼女と共に過ごしても、頭にする機会がほぼ皆無だったその感情は、十一年ものあいだ淀みとして少しづつ少しづつ積み重ねられていったのだろう。彼女の顔は、もう涙と鼻水でぐじゅぐじゅになっていた。

「ベイグル、気持ちは分かるが、それは……」

いや、別にアリアスは悪くないんじゃないか……と言いかげようとしたタイミングで、この騒音は何だ、誰が一体何を壊したんだ、という看守のざわめきが耳に入ってきた。

「時間がない、ベイグル。私と一緒に逃げましょう」

「に……逃げるって、どこへ?」

「どこって、外しかないじゃない。行き先は、外に出るから決めればいいの」

私は枕元に積まれていたわら半紙の束をぐっそりと掴み、量子計算機のガラスケースを開放して、その中にはら

まいた。次にオイルランタンの火を一度消してから、蓋を開け、自身の液体をわら半紙の上から降り注いだ。あとは看守からくすねたマッチが一本、手元にあるだけだ。部屋を灯す光源が無くなり、月明かりだけが隙間から漏れる暗い洞穴の中、ドンドンと扉を激しく叩く音が心臓を震わせる。

「さあ、どうする？ ベイグル。このまま何事もなく平穏な十二年目を迎えるか、それとも貴女の十一年をここで焼き尽くすか」

「そ、そんな……こ、こんなのもって、めっちゃくちゃですよ、トリエ……」

声の震えからベイグルの表情が伺える。

「いいえ。私は最初からこうする予定だった。自分が助かるために、混乱に乗じて脱出する計画をね。後はベイグル、貴女が協力してくれるかどうか。それだけが不確定要素」

「これじゃあ日記が、私の日記が燃えてしまう……」

「違う。これはアリアスという人間の著作物。貴女はそれを写しただけ。貴女は自分の日記を書く時が来たの」

「ねえ、トリエ、教えてくださいよ……十一年の間、暗号解読だけが自分の価値を証明する手段だったんですよ……？ て、手元に何も無くなってるから、私、どう生きていけばいいのか分からない……」

「そんなの知らないわよ、私だって青春は失った側の人間なんだから。何かほら、やりたいこととかないの？」

「……うみ。小説に書いてあった、海が見てみたい……」  
「いいわね、私も見たい。じゃあ、ここを一緒に脱出して、海を見る。それでいい？」

「……いい」

「悔いはない？」

「あるけど、いい」

「よし、口元を布で抑えて！」

マッチを着火し、わら半紙へと投げ込んだ瞬間、それは一瞬にして火炎を吹き上げた。最初は鮮やかな橙の炎が、ありふれた文字列の塊を次々と燃やし尽くす。次第に量子計算機内部に張り巡らされたメッシュケーブルや電子基板に燃え移ると、身体に悪影響を与えそうなどす黒い煙が次から次へと立ち昇ってくる。円筒状の内部か

ら燃え盛る炎は内々に留めることができず、細かい金属部品を焼き尽くしながら、激しい明滅と共にバチバチと音を立てて崩れ始めた。ボン、ボン、と鳴り響く筐体内部での破裂音はマヨラナ粒子達の断末魔のようにも聞こえてきた。

目視で量子計算機の崩壊を観測した。そしてこの劣悪な換気の空間では、私達も限界が近い。ベイグルの方をちらりと眺めると、この非常事態にも関わらず、まだ持ち運べそうな手荷物を持ち出そうとしていた。火事場だというのに呑気なやつだ。こちらの脱出の準備が整ったところで、外鍵が一気に開いた。

「助けてください！ 量子計算機が突然火を噴いて……！」

## 終幕

数時間後、私達はラクダに跨り、どこへ向かうとも知れない旅路の道中にいた。

猛暑が照りつける中での移動は愚行だっただろうか。久方ぶりの灼熱は身体に応えるし、何より喉がヒリヒリと

焼け付くようだ。

「ベイグル、水持ってる？」

「ええ、持ってきましたよ。本格的な火事になる前に革袋に水を詰めて持ってきたんですから」

「ああ、あの時の……」

「じゃあ放り投げますからね。しかしトリエさん。運がよかったですね、私達……」

「本当、トントントン拍子すぎて怖いくらい」

私とベイグルは火事に乗じて雑居房を抜け出すと、電気自治区の繁華街が織りなす人混みにそれとなく混ざっていた。入所前に隠し持っていた金品を売り払ってから、着ていた服を全て着替え、ラクダ商人からラクダを二頭買いつけた。一度自治区を離れてしまえば、再逮捕のコストに見合う相手ではない限り、もう追手は来ないと読み切っている。せいぜい顔写真が晒され、指名手配される程度の措置だろうから、基本顔面さえ布で隠していれば問題ない。

「しかし、我々はどこに向かっているんですか？」

「ここからまっすぐ北に向かえば、すぐに海が見えたはず。」

そこから海を渡ると、事情を聞かずに旅人を受け入れてくれる自治区があるらしいわ。そこまで向かいましょう」「海を渡るって、どうするんですか?」

「知らないの? 船に乗るのよ」

「船って?」

「海の上を浮かぶ鉄の塊」

「……は?」

まあその反応はごもつともかもしれない。海を見たことない人間に船の説明をするほど、本質を捉えていない行為もないだろう。正直、私も船に乗るのは始めてなので少し緊張しているのだ。

「それにしても、はあ……」

「どうしたのベイ、ため息なんかついちゃって」

「いや、量子計算機のことを考えたんです。よくよく考えたらあいつとは十一年の付き合いだというのに、我々のために犠牲になってしまったと思うと胸が締め付けられて……」

「ああ、あれはいいのよ。私にとっては都合がよかったから」

「都合がいい?」

「あら、気づかなかった?」

「何にですか?」

「私の仕事が密偵で、たまたま解読の一ヶ月前に量子計算機の存在する雑居房に投獄されて、全ての情報の暗号解読が終了して、大量破壊兵器の起動方法の存在を確認してから、敵の自治区の手に入る前に量子計算機を私の手で爆発炎上させた。これほど私にとって都合がよいこともないってことよ」

「……つまり、どういうことですか?」

「察しが悪いわねえ。私は一仕事終えたってこと。気にならないなら、気にしなくていいわよ」

「腑に落ちませんが……それに察しの悪さで言えば、トリエも対して変わりませんからね」

「私? どうして?」

「いま水を飲んでいるその革袋、どこか見覚えはありますか?」

「革袋……?」

その傷だらけで少し小ぶりの革袋には妙な懐かしさが

あり、小さい頃によく使っていたものと同じ造りをして  
いた。

「ちゃんと、満水にして返しましたからね。もう零さな  
いでくださいよ」

「ああ、うん……ありがとうございます？」

ふと砂の香りに混じって、湿っぽさを含む、昔なつか  
しい香りが遠くから漂ってきた。これは子どもの頃、お  
母さんが焼いてくれた干物と同じ。きっと、海がそろそ  
ろ近いのだろう。

# セックスメーター

片桐天音

## 1

「あー、もしもし、ピンクキャブです。今から『リリ』が伺いますんで、準備お願いします」

床やテーブルのあちらこちらに転がった空き缶を片付ける土曜の昼下がり。やつとのことと掃除を終えた私に、電話口で輸送係の若い男の声がそう告げた。

ベッド、オツケー。ソファ、オツケー。都心の狭いマシヨンの一室が、いつもより数段広く感じる。

部屋着はいつものジャージではなく、おろしたてのライトグリーンルームウェアにした。ゆったりした前開きの七分袖とショートパンツで、さっと着やすくてすぐ脱ぎやすい。フリルが少なくてもこもこしてないシンプルなものを選んだし、無理して頑張ってる感じもなく自然な演出……のつもり。

インターホンが鳴ったので玄関に向かって、小さく深呼吸をする。

「……よし」

ドアを開ける。

むわっとした夏の熱い空気と共に目に入ったのは、淡いピンクの短いワンピースと、ウエストをきゅっと締める大きなリボン結びの白いベルトだった。それから、裾からちらちら覗く健康的な太ももに、さわやかな印象の布地を押し上げてセクシーを添える胸元に視線が移る。飾り気のないキャンバストリートと細いベルトのかかった白いフラットサンダルは、いかにも夏らしい透き通ったイメージを与えていた。

シルバークレーの長髪は、紫のインナーカラーをそつと隠してその毛先だけがくりと内側にカールしている。前髪は短く切り揃えられていて、PRB世代<sup>1</sup>に特徴的な太めの眉がよく見える。やつぱり可愛い。

「こんにちは。リリといます」

サービсроイドっぽい甘めの顔が私を見上げて、値踏みするような目を向ける私を気にも留めないふうに、うやうやく一礼した。声帯型発声器ではなく喉のスピーカーから鳴る声も、この世代の大きな特徴である。

リリと名乗る少女を派遣した「ピンクキャブ」は、無

<sup>1</sup> 匿名掲示板ではたくあん世代と呼ばれている。

店舗型性風俗特殊営業（一号の二）——いわゆるデリヘル——だ。キャストをホテルや自宅に呼んで性的なサービスをしてもらうことができる。

ただ、ピンクキャブに所属しているのは人間ではなく、みんなセクサロイド……いや、サービスロイドなのだ。

セクサロイドというのは、カタログには明記されない非公式の分類である。正しくは、人間として接する必要がある仕事<sup>2</sup>のために作られた人間型のロボットを、広くまとめてサービスロイドと呼ぶなければならない。ただし、ほとんどの仕事には全く必要のない装備にかなりのコストがかかっているのです、どんな呼び名であれ大抵は性産業に従事しているのが現実だ。

「お姉さん。私、入ってもいいですか？」

「あ、えと……『リリさん、入ってください』」

名前を呼ばないと部屋にも入ってきてくれないのってコミュニケーションには厳しいですよ、ね、と思いつながら棒読みで呼びかける。いつもながらなかなか慣れない。リリは私の

言葉を認識してから、小さく三步で玄関に入ると同時に私の胸に飛び込んできた。

「本日は、呼んでいただきありがとうございます」

うわ、うわっ、いい匂いする。

パニラの香りの後ろにそっとシトラスを添えて、爽やかな甘さが目の前に迫ってくる。さらにその奥から、ほんのりミルクっぽいミステリアスな香りがそっと私を包み込んで、彼女にシリコンの身体とは思えない奥行きと実在を与えていた。

「え？　ちょ、ちよつと……」

いきなり押し寄せる「女の子」の感触に、思わず一歩後ずさりしてしまう。やっぱりセクサロイドってすごい。

まだコースも決めてないし、触っちゃったら輸送係が出てきて怒られるのでは、と行き場を失った両腕はふらふらと揺れるだけ。そして「あ、えっ……？」と慌てているうちに、ぼたりとドアが閉められた。外を通る車の音さえ聞こえなくなつて、突然静けさの中に二人きり。単なるサービスなのは分かっているけど、ドキドキしてしまう。

「り、リリさん……？」

<sup>2</sup>いわゆる接客、保育（または教育）、看護（または介護）の三大感情労働をベースに説明されることが多い。

よし、そっちがその気ならと決心を固め、そーっとリリを包むように腕を……と同時に、リリが私をすり抜けた。そのまま奥に進んでサンダルを脱ぎ、くるりと向きを変えて揃える。そしてまた私の動きを待つ状態に入った。その丁寧な一挙手一投足が、まるでこれは単なるあいさつですよとでも言っているような気がして、急に顔が熱くなる。

いや、そんなオプシオンは頼んでないんですが！と思いつつ、私に慌ててぶかぶかのつつかけを脱ぎ捨てた。サービスロイド式のあいさつに内心高揚しつつも、自分の童貞っぽい振る舞いを思い返すと情けなくなる。私の後ろを歩くリリに「あ、アプリのクープンって使えますか？」なんて、ムードもへったくれもない質問をしてしまおうくらいには、まあまあテンパっていた。

「『リリさん、ソファに座ってください』」  
許可を得たリリは、数時間前まで私が眠り込んでいたソファにふわりと腰を下ろす。顔面騎乗オプシオンときはこんな感じかなんて思いながら隣に座ると、リリがトートバッグからタブレットを取り出して操作を始めた。

「お姉さん、コースはどうしますか？」

「えっと……『あまあま』で、クープンで目隠しも」  
何度かタップしたのち、「細かい指定はこちらでお願いします」とタブレットを私に手渡す。パステルピンクを基調としたポップなメニュー画面をタップすると、性格・プレイスタイル、プレイ内容、オプシオン……と、どんな細かな指定に進んでいく。

独特なネーミングのオプシオンについて尋ねると、慣れた様子で淡々と解説してくれる。それでも、可愛い子の口から飛び出す下品な言葉の暴力は、もはや前戯と言っても過言ではない。しかも、プレイ時間に入っていないからさらにお得だと思う。

「——こっちは、私の指を使って……えっと、どうしました？ 何か変ですか？」

「へ、変じゃないよ。可愛いね……白くて、腕とか」  
「ありがとうございます。脚も、可愛いですよ？」

そう言って照れ隠しのようにぱたぱたと揺らす生脚に、思わず視線が移ってしまう。

「お姉さん。よければ、クープンこっちにしませんか？」

リリが横からタブレットを覗き込んで、さつと画面をスクロールする。私が選んでいたのは、クーポンを使えば無料になるAレンジ。リリが指さす「黒ストックキング着用」オプシオンは、同じクーポンでは半額止まりのBレンジだ。使う範囲が広いほど整備の手間が増えるので、もちろんレンジも高くなる。その理屈でいえば、脚全体を自由にできるオプシオンが高くなるのは当然だ。

しかし、レンジに応じて満足度も上がっていくとは限らない。そもそも、ストックキングを履かせて撫でたり舐めたり破いたりなんて、抱恩<sup>3</sup>の変態おじさんじゃあるまいし。脚なんか撫でたって――

「ストックキングを履いた私の脚、とっても触り心地がいいですよ？ お姉さんの脚と絡め合ったりしたら、もっと気持ちいいと思うんですけど」

「じゃ、じゃあ、そっちでお願いします……」

<sup>3</sup> 今から二世代前の元号。君主の即位に合わせて定める旧来の元号とは関係がなく、元号協会がおよそ二十五年ごとに制定・発表している非公式のもの。

## 2

ピピッ、ピピッ、ピピッ——タブレットが放つ無機質な電子音で目覚める。待機モードのリリを眺めていたらいつの間にか眠っていたらしい。やっぱり二時間コースは長かったかな。

「そして、まだ見つかっていない各地の砲台跡には、既に失われたはずの兵器の残骸が残っていると言われています。人々を引きつける霊的な力と呼ぶほかないパワーが無条件に我々の感情に訴えかけ——」

タイマーを止めると、安っぽいナレーションのバラエティ番組が聞こえてくる。土曜の夕方はこういう低予算の微妙な番組ばかり。失われたはずの兵器の欠片をすべて集めると……なんて、こんなのもう流行らないでしょうと思いつながら、さつとテレビを消す。

リリはまだ待機モードのまま。眠っているように見えるのはただのモーションで、実際に電源が切れているわけではない。だから、アラーム音くらいならすぐに反応して目覚めるはずだけど、センサーが鈍い個体なのか

もしれない。

「『リリさん、起きてください』……あれ？」

しかし、それから何度か名前を呼びかけても、リリは目を覚まさない。どうしたんだろうと思いながらそつと顔を覗き込むと、右目の下に三つ横に並んだインジケータが緑色に光っていた。内部ストレージへのアクセスを示す真ん中のランプが頻繁に明滅しているのを見ると、何かトラブルが起きて再起動しているようだ。一般的なサーバーが起動しても異常終了しないように設計されているので、こういう現象はなかなか珍しい。

キャスト起因のトラブルならちよつとくらい時間オーバーしても大丈夫だろうけど、仮にこのまま起動しなかったら、私が壊したと言いがかりをつけられてもおかしくない。まだアクセスランプの動きは変わらないままで。お願いだから早く目を覚ましてよ、と思いながらリリの手を握った。

「あれ、ここは……？」

しかし、その心配は杞憂だったらしく、数分のうちにリ

リが目を開けた。インジケータは緑色に光ったまま、目だけがキュルキュル動いて周囲を探索している。そして、リリはそのまま身体を動かさずに「あっ」と小さく呟いた。「どうしたの？ えっと、『リリさん、起きてください』」

「お店、摘発されたみたいです。たぶん、セントラルサーバごと消されたんだわ」

リリは一瞬私を向いて短くそう言い放ち、上半身をまっすぐ起こして辺りを見回した。ベッド、壁、床……空中を見つめて静止、床、壁、ベッド……空間認識フェーズからやり直しているところを見ると、オンサイトデータまでクリアして完全に再起動したらしい。

「セントラルサーバ？」

「ピンクキャブのキャストは、業務中のデータをセントラルサーバにしか置かないことになってるの。だから、勤務記録とかお客様の情報は私たちのストレージには載ってないんです」

さらに話を聞くと、管理ネットワークサーバからの特権アクセスで通信プロファイルを削除されたという。緊急時に通信を遮断する可能性があることは、前から伝えられ

ていたらしい。当局の捜査がサービスロイドや機密情報にまで及ばないように切り離すための処置なのだろう。

「GPSも使えなくなってるみたい。どうしよう……」

さっきまでお店との連絡に使っていたはずのタブレットは、もう使い物にならないらしい。リリが画面をなぞる手に焦りがにじむ。さっきとキャラが違うけど、これが素のリリってことなんだろうか。

インターネットに接続できなくて状況が分からないというので、スマホの背面にタッチしたリリの青く光る指先に、近接通信<sup>ニアバイ</sup>で無線LANのパスワードを渡した。

「けど、なんで摘発されたの？」

しかも、用意周到に証拠隠滅の準備まで。まるで、初めから捕まることを見越していたかのようだ。

「知らないわ。もしかしたら、倫理規定違反かも。少なくとも、時間外使用はもはや言い逃れできないレベルだったから」

倫理規定——サービスロイド使用倫理規定は、ピンクキャブのようにセクサロイドを扱うデリヘルが最も気を遣う規則だ。サービスロイドを守るといって建て付けで、一

定の条件を満たすあらゆる自律型ヒューマノイドに対して、一律に人間風の強い保護を与えることを定めている。しかし、メンテナンスやパーツ交換が容易で疲れることもないロボットを守るという視点では、理不尽で無意味な規制というほかない。

だから、サービスロイドをもっと活用したいと思っても、まるで人間が行う旧式の労働に歩みを合わせるように、ルールのためにルールを守るといふ状況が続いている。特に、サービスロイドを性処理に使うことについてはまだ世間からの風当たりが強く、少々強引な処罰の適用も容認されているのが現状だ。

「ねえ、私、どうすればいいの？ 警察行かないとダメ？」  
リリの声が涙ぐむ。涙を流せないサービスロイドは、こうやって声をフィルタしたり、手で顔を覆ったりすることではかその感情を表現できない。そのせいで、ロボットとの交流に慣れない層からは「大きな嘘泣き」と揶揄されることもある。

しかし、今私の目の前にいるのは、帰るべき場所を失って途方に暮れる小さな女の子でしかなかった。

「最終的には、行かなきゃダメかもね」

「私、警察に調べられて、残骸データワッシュデータを抜かれたら……もう、いけない子になるの？」

「リリはいらない子なんかじゃないよ。でも……」

警察。なんとなく覚悟はしていたつもりだけど、リリ自身からその言葉を聞くと急に現実味を帯びてくる。セントラルサーバがどれほど強固なものかは分からないけど、警察だっていつまでも重要な証拠を野放しにしておくほど甘くはないはずだ。

仮にリリが証拠品として押収されれば、返ってくるのはどんなに早くても裁判の後、最悪の場合は没収されてそのまま処分されてしまうことだってありうる。逮捕された経営者がまたデリヘルを開業できる可能性はかなり低いだろう。そうなれば、リリ自身の言う通り彼女はいい子になってしまふかもしれない。

「私、いけない子になるのはいやだわ。ねえ、少しだけここに置いてくれない？　なんでもするから」

リリがすがりつくように私に抱きついた。不安そうなか細い声に合わせて、その背中小さく震えている。ま

るで身体を対価に宿を探す家出少女みたいなセリフだけど、今はそれを楽しむ余裕もない。

「あー、落ち着いて。分かった、分かったから」

リリの頭を何度か撫でる。

こんな可愛い子が引き取り手も見つからずに廃棄されてしまうのは心苦しいし、仮に警察が親身になって次の行き先を探してくれるとしても、やはり時間はかかるだろう。

それに、このまますぐに引き渡してしまうのは少しもつたいない。もう伝票は支払い先もろとも消えてしまったわけだし。届け出るのももう少し後でよさそうだ。

「リリ。とりあえず、お風呂に入らない？　その……いろいろ、汚れてるだろうし」

リリが私を見上げて、小さく頷いた。

\*

「狭くてごめんね。熱くない？」

「ううん、これくらいなら平気。確かに、二人で入るとちよっと狭いけど……なんか、安心するわ」

声が水面に響く。普通の単身向けマンションの浴槽では、髪をまとめた身体の小さなリリを前に抱きかかえるように浸かるのがやっただ。

リリはさっきまでのよく訓練された接客態度なんてすっかり忘れてしまったように、肩を落としてため息をつくばかり。「お風呂に入らない？」なんて自分でもかなり突飛な提案だったと思うけど、傷心のサービスロイドにも優しさは効くらしい。

昔はカラスの行水くらいのシャワーを浴びることができれば防水性能としては十分だったという話を聞くと、サービスロイドと一緒に風呂に浸かれるなんて本当にいい時代になったと思う。もちろん入浴剤は使えないし、湯上がりは体表からシャッターの溝までよく乾かす必要があるけれど。

リリが腕を動かして、ちゃぷちゃぷと波を立てる。まるで自分の居場所を確かめるかのように。体表にかかった水はすぐに弾かれて、小さなしずくとなって流れていく。まさに玉のような肌といった感じだ。

しかし、よく見ると左肩から上腕にかけて、ぐるりと

帯のように二本の傷跡が走っているのが分かった。左腕だけだ。もちろん、人間のようにみみず腫れや変色があるわけではないけれど、水がかかるたびにその溝につうと染み込むせいで、細い筋のように光って目立つ。

サービスロイドが自傷行為なんてするだろうかと思いつながら、その切れ目をそっと撫でると、リリが「どうしたの？」と振り向く。

「いや、えーと……リリはもう、ピンクキャブのお客さんのことは忘れてるんだっけ？」

なんとなく、傷口のことを掘り下げるのはやめた。誰かがリリに傷を付けた話を聞きたいわけではなかったし、そもそもリリはもう覚えていないだろうから。

「そうね。さっき誰かの運転でここまで来て、サナとベッドでいろいろしたことは辛うじて覚えてるけど、これも残骸データだもの。まるで、私の記憶じゃないみたい」

リリが手の甲に頭を当ててこつこつと軽く叩く。一人称視点の映像は残っているけど、記憶のリンクが途切れて中途半端だから、他人が撮ったように感じるのだろうか。

「セックスは、まだ好き？」

「前は好きだったと思うけど、今はあんまり分からないわ」  
 きっと、彼女が私の部屋に来た経緯さえも、いずれ新しい記憶に再マークされて消えていくはずだ。夢のように、ぼんやりと。少し寂しいけど、警察に引き渡すことを考えれば少しの痕跡も残らないほうがいいのかもしれない。

\*

浴室を出たリリの肩にバスタオルをかけると、「ありがと」と言ってお笑った。

くたびれたライトグリーン布地の、首から肩の丸みを帯びたラインに沿って彼女の身体を隠している。タオルに包まれてくしゅくしゅと身体を拭く姿がどうしようもなく愛おしくなって、身体が濡れているのも気にせずにリりを抱きしめていた。

「拭いてくれるの？」

「んー……そうだね。そうしょっか」

バスタオルの上から起伏に合わせてそっと背中を撫でる。それから、脇、谷間、下乳、へそ、……と水が溜まりそうな場所を順番に拭いていった。セクサロイドは他

に比べて凹凸が多いから、整備にも手間がかかる。

「ちよつと、くすぐりたいわね」

ドライヤーは体表からおよそ二十センチ離してまんべんなく、一箇所に当て続けられないように、とにかく動かし続ければ大丈夫……と、古い入門書に書いてあった気がするけど、最近の肌素材はどうなんだろう。ちゃんとサービスロイドを迎えられるような家なら、少なくとも型落ちのボディドライヤーくらい置いてあるはずだから、あんまり褒められたやり方ではないのかもしれない。

「サナ、ありがとう。私は何を着たらいいかしら？」

「えーと、ちよつと待つてね……」

リリがここに来たときのワンピースは、部屋着にするには流石にもつたいない。とはいえ、せつかくなら可愛い服を着てほしいけど、私の在庫にはそんなもの……と、そういうえぼ。

「じゃあ、これ着てみて」

手に取ったのは、さっきまで私が着ていたルームウェアと一緒に買った、少し高めのもう一着だ。紺色のサテン生地を使ったセーラーっぽい襟のワンピースで、控え

めな光沢で大人の女性にもおすすめと紹介されていた。

届いてすぐに試着したものの、思った以上にテラテラする生地が私にはどうにも似合わなかったので、そのまましまっておいたのだ。

「ええ。ありがとう」

リリは私がいるのも気にせず、パンツを履いてブラを着け、ルームウェアに袖を通していく。こういう着替えの瞬間って、裸よりも魅力的だからどうしてもまじまじ見てしまう。

そもそも、サービスロイドの下着って機能的には不要なものだから、もはや生着替えの相手を興奮させる布切れでしかないのだ。彼女のアンダーヘアが濃いのも、誰かが魅力的だと思っただけだからわざわざそう手を加えたわけ、私の心を掴んで離さないのも当然といえる。

じっ……と見つめる視線に気づいたリリが「どう？」と裾をつまんでみせた。サテンのルームウェアに包まれたリリはきらきらして、やっぱ控えめな光沢のサテンなんて宣伝文句は嘘だったことが分かる。夜の相手を喜ばせるために着るやつだ、これ。

\*

リリのお手入れを終えて部屋に戻ると、窓の外がすっかり暗くなっていて。

落ち着いたら、何だか急にお腹が空いてきた気がする。とりあえず何か食べておこうと思いつながら戸棚を開けると、買い置き常備食はまだたくさん残っている。わざわざ料理を作るような気分でもないし、適当に缶詰とか温めて……後はお酒でごまかそう。

「お夕飯？ 私も手伝うわ」

リリが冷蔵庫と戸棚から取り出した夕食の列を覗き込む。期間限定のストロング缶に続くのは、ツナ缶、コーン缶、焼き鳥缶……およそ手伝ってもらうことはなさそうなラインナップだけど、盛り付けくらいいちゃんとしておくか。

「これ、どうするの？ こっちからぎゅっと引つ張れば底ごと外れるけど、流石にそれは違うわよね」

皿を出しておいてと言うより先に、リリが怪訝な表情でコンビーフ缶を取り上げて私に渡す。缶の側面を切り取る

いわゆる「巻き取り鍵」は、意外にもサービスロイドの標準ナレッジには載っていないらしい。彼女の言う「ぎゅつと引っ張る」はおそらく人間の力づく以上のパワーだから、やはりそれは流石に違う。

「知らないわ。だって、私は食べ物なんて食べないもの」  
「この鍵を横の爪に挿して、帯に沿って回すと開くの。やってみる？」

渡された缶をそのままリリに戻すと、しばらくいろいろな角度から缶を観察して、やっと合点がいった様子で爪に鍵を引っ掛けた。そして、帯を巻き取らずに器用に鍵を引っ張って帯を剥いていく。まるで、練ったピザ生地でも引っ張って細長く延ばしているみたいだ。注意して引っ張らないと帯がちぎれてしまいそうだけど、彼女の四肢制御はその曲芸を危なげなく遂行している。

「——と、これでいい？」

「えーと……ちょっと違うけど、結果は同じだから大丈夫だよ。ありがとう」

だらしなく伸びた帯と一緒に、開封されたコンピーフ缶が渡される。小さく丸めようにも切り口で指を切って

しまいそうだし、そのままごみ袋に入れたらビニールが破れてしまいそうだ。缶詰を開けるたびにごみの処理を気にしなきゃいけないのも面倒だし、後でちゃんとした開け方を教えてあげなきゃ。

各々の中身を皿に空けて、レンジに突っ込んだ。背後から、リリが箸や調味料をテーブルに並べる音が聞こえてくる。なんかこういうの、同棲してるみたいで落ち着くな……と考えてから首を振った。リリとの時間を楽しむのも大事だけど、今後どうするべきかについてちゃんと考えないとね。

### 3

「だからさあ……リリみたいなセクサロイドなら絶対に妊娠しないじゃん。それって、ある種の救いだと思わない？」

リリの今後についてちゃんと考え……と思っていたはずが、気づいたときには完全に飲みすぎていた。人間相手だろうがサービスロイド相手だろうが、初対面で開陳すべきではない見解を述べている自覚が、私にもある。

食べ物はもちろんお酒も飲まないリリは、晩酌の始まりと変わらない様子で、時折相槌を打ちながら私の話を聞いている。たぶん軌道修正したほうがいいんだろなと思いつつ、これも一種の感情労働だし、きつとリリも慣れているだろうと勝手に結論づけて、その心地いい雰囲気気に身を委ねてしまっていた。

「プレグロイドなら子供を産めるわ。それに、私は子供を育てたりしてみたいって思うけど。変かしら？」

「もちろん、リリみたいな人もいると思う。でもさあ、私は子供なんて産みたくない。育てるのも、たぶん無理。私と同じように考えてる人も、たくさんいるよ」

言い切ったけど、本当のところはどうだろう。個人主義の発展と未婚化・晩婚化の進行は止まらないけど、少子化はむしろ改善の兆しを見せている。ある程度の収入があれば、独身でも配偶子バンクで足りない精子や卵子を購入し、妊娠から育児はプレグロイドに任せっきりにできるようになったからだ。

おかげで、自分が産みたくなくても、自分が育てたくなくても、子供だけは製造できるようになった。でも、そこ

までして子孫を残そうとする理由が、私には分からない。「だって、人間って結婚して子孫を残さないと滅亡するんでしょ？　じゃあ、結婚したほうがいいじゃない」

「いや、まあ……乱暴に言えばそうなんだけどさ」

リリが不思議そうに首をかしげる。言っていることが全部間違っているわけじゃないんだけど、話が微妙に噛み合っていない気がする。結婚、出産、夫婦円満、子孫繁栄……うーん、初期化の時に古い結婚願望が埋め込まれたのかもしれない。ピンクキャブはいったい何を考えているんだろう。悪趣味だなあ。

「だから私、サナと結婚するわね」

そう言って、リリがぼすん、と私に寄りかかる。記憶喪失のデリヘル嬢に求婚されるなんて……悪趣味だなあ。

「……リリって、ちよつと急だよね」

「だって私、サナが好きよ？」

ほんのり残ったバニラの香りが不意に鼻をかすめて、数時間前まで彼女とめちゃくちゃなセックスをしていた光景をありありと思い出させる。「いっぱい孕ませてね♥」  
「サナの赤ちゃんできちゃおう♥」……いや、言っていない

だろ。

結婚したって子供はできないよ、どこかでもらってくればいいじゃん、みたいなやり取りを何度かしているうちに、一本、また一本と缶が空けられていく。サービスロイドの接待つてすごい。

「ところで、サナ。このお腹の模様、何か分かる？ お風呂のとき、じっと見てたよね」

スカートの裾をめくって下腹部を撫でるリリ。パンツと一緒に見せつけられた彼女のお腹コネクタシンボルの模様は、ピンクのハートに百合の花だ。予約のとき、顔写真から全身写真に切り替えて物色していたのでよく印象に残っている。

同じ型番のサービスロイドは外見がよく似ているから、服や髪を取り外したり電源を落としても区別できるように、肌にしリアルナンバーやバーコードを刻印するのが一般的だ。大抵は肩や腕に飾り気のない黒いバーコードがプリントされている。

しかしセクサロイドだけは別で、管理上の利便性と人間っぽさへの配慮との兼ね合いから、下腹部にタトゥーのような華美なデザインを彫り込んでいることが多い。し

かも、ピンクや紫といった、かにもなカラーリングを多用することで、むしろ客の興奮を煽るデザインとして評価されるようになったという。

「——だから、ちょっとデリヘルに慣れている人は、みんなその模様シンボルが好きなんだよね」

「そっか……セクサロイドの、マークなんだ……」

リリは、もう消えてしまった記憶に思いを馳せるように、模様シンボルをしみじみと撫でている。

こうして私がリリの過去に触れなかったら、彼女はもう自分がセクサロイドであることすら忘れていたのだろうか。消されるはずの残骸フアンタムデータを、彼女の知らないぼんやりとした過去で上書きしたところで、リリを縛り付けるだけなのに。

「そういえば、バッテリーはまだ平気？ 充電しようか？」

ふと、リリがここに来てから一度も充電していないことを思い出す。お腹コネクタシンボルの模様は、名前通り充電コネクタのシャッターにプリントされているのだ。

「じゃあ、お願いするわ」

リリが手をかざすと、宇宙船のハッチのようによくコ

ントロールされた動きで、ハートマークの周囲を四角く切り取ってシャッターが開く。そして、中から一六・八ミリメートルの標準電源ジャックが現れた。

サービスロイドの内部にアクセスできる充電コネクタは、本来の使用目的に耐えうるように作り込まれている性器よりもむしろ大事な場所で、ちょっと強い電流を流せばすぐに壊れてしまう。だから、そんな部分に充電ケーブルを挿すことを許されるのは、ある種の信頼の現れとされている。

プラグを挿し込むと、右目のインジケータがゆっくりと赤く点滅し始めた。

「ねえ、サナはどうしてデリヘルを使ってるの？ パーナーはいないの？」

「あー、いや……昔、リリみたいな可愛い可愛い風俗嬢に入れ込んでやって……あ、人間のね」

別に面白い話じゃないけどさ、という前置きの割には、原稿でも用意していたのかと思うほどすらすと言葉が出ていく。

ミキはいろいろな顔を持った人だった。お店では私を

優しく包み込んでくれるお姉さんのように、外では友達みたいに一緒に楽しく遊ぶこともあれば、恋人みたいにベッドで甘え合うこともあった。つき込んだお金はお店のときと変わらないか、それより多かったと思う。それでも、誰かに心をさらけ出して、それを受け入れてもらうのはとても幸せだった。

ミキは運転席が似合う人だった。遊園地、砂浜、温泉……彼女の運転で（もちろんほとんどオートパイロットだけ）いろいろなところに出かけた。途中からいちいちレンタカーを借りるのも煩わしくなあって、ミキと出かけるために小さな車も買った。

夕日のきれいな岬の展望台で、遠い目をしたミキが「私たち、十年後もこのままだったら一緒になろうよ」と言いながら、なぜか少しだけ泣いていたのをよく覚えている。でも、そんな日々は、ミキが「私、結婚するんだよね」という一言で突然終わりを告げる。だって、私たちって所詮お金の関係じゃん。サナならこんなことしなくても、もっといい人が見つかるから。そんなありふれた別れの言葉を残して、ミキは私の前からいなくなった。

「相手は風俗嬢だもん。客として出会ったら、もうそれ以上にはなれないよ。そんなの分かってる。でも、私だけは違うって思ってた。それから、人を好きになるのがちょっと怖くなっちゃったんだよね」

「嫌なこと思い出させちゃったわね。ごめんなさい」

リリが私の頭を撫でる。最後に会ったあの日も、ミキがこんな風に慰めてくれたつけ。ぼんやりする意識の中で、まるでミキに包まれているような錯覚に包まれて、視界にじわり、と涙がにじむ。

「セクサロイドなら私を裏切ったりしないし、セックスは気持ちいいし……もうこれでいいかなって。あー、好きだったんだけどね……」

勝手な自分語りを披露した上に泣き出すとか、最悪の酔っぱらいだな。泣いているのをごまかすようにごろりとソファの端に寝転ぶと、隠れていた眠気が現れて急に視界を暗くする。

「ごめんね、自分の話ばかり。でも、どうせリリだって、私のことただの客だと思ってるんでしょ？ 結婚しようとか、適当なことばっかり——」

矢継ぎ早に飛び出す私の言葉を遮るように、リリが自分のルームウェアの袖で私の涙を拭う。私に覆いかぶさるリリの顔を見上げると、彼女はじつと唇を噛んで私を見つめていた。

\*

「久しぶりね、サナ」

「ミキ。今さら、どうしたの？」

夢を見ているのだ、とすぐに分かった。目の前にははずもない人が立っていたから。辺りを見回すと、自分が海辺の展望台でベンチに座っていることに気づく。ミキは私の前で手すりに寄りかかっている、その後ろで夕日が沈もうとしている。

展望台を満たす空気はあの日よりもきらきらで、自分の姿さえもはつきりと見えない。

「どうしたのって、あなたが呼んだんじゃない」

「あれ、そうだった……ごめん」

立ち上がると、光の粒が顔にあたって気持ちいい。手すりから身を乗り出すと、記憶よりもずっと高く、思

い出よりもずっとぼんやりとした大海原が広がっていた。

「風が気持ちいいわね」

ミキが私の隣に立っている。彼女と同じ景色を分け合えるだけで、私は幸せだった。それが永遠に続いてほしかっただけなのに、どこで間違ったのだろうか。ちらと横を見ると、やっぱりミキは泣いていた。

「ミキ、どうしていなくなつたの？ 私、信じてたのに」「ねえ、サナ。私は裏切らないよ。だから、ずっと一緒にいよう？」

突然、隣にいたはずの聲が前から聞こえてくる。そして、ふわりとバニラの香りが鼻をくすぐつた。あれ、ミキってこんな香水つけたことあつたっけ……と思いつながら顔を上げると、なぜかリリが私を見下ろして泣いている。ぼろぼろとこぼれ落ちる冷たい涙が、降り注ぐたび私の顔を熱くする。

リリは顔を歪めて私に何か訴えているけど、何を言っているかは聞こえない。待つてリリ、私はただ——何か、大事なことを叫ぼうとして、そこで目が覚めた。

#### 4

「昨日午後、都内の派遣型風俗店『ピンクキャブ』が摘発され、経営者の男が逮捕されました——」

次の日の朝。目覚めると、テレビでピンクキャブの摘発について報道していた。

「——この風俗店では、従業員の確保のために組織的なサービсроイドの拉致が繰り返されており、改造を加えた上で性的な業務に従事させたとして、窃盗とサービсроイド使用管理法違反の疑いで——」

「えっ……えっ？」

寝起きのぼんやりとした頭に届いた衝撃的なニュースに、私は思わず起き上がっていた。サービсроイドの拉致、改造……これ、倫理規定違反どころの騒ぎではないんじゃないか？ 私が匿っているリリは、ピンクキャブの実情を暴く重要証拠であると同時に、本当の所有者が探し続けている被害品かもしれないということだ。

「これ、結構マズいことになったなあ」

「どうしたの、サナ？」

隣を向くと、リリが布団にくるまって私を見上げています。枕元に目をやると、紺のサテンと下着がきれいに畳まれていた。あれ、布団の下は裸ってこと？ おかしいなと思いつながら自分の姿を確認すると、私もパンツしか着けていない。かなり飲みすぎていたような気がするけれど、何をしたんだっけ……と、頭を働かせ始めると徐々に後ろから頭痛が追ってきた。

「えーと、だから、リリはピンクキャブが所有しているように見せかけて、実際のところ本当は別のところから来たんだって。そのせいで——」

リリは頷きながら要領を得ない私の説明を聞いていたけど、インジケータ<sup>4</sup>を見るに、たぶんほとんどの内容をネットニュースから補充していたと思う。

「でも、私はサナと一緒にいたいわ。ピンクキャブのことも、それより昔のことも、もう覚えてないから」

「リリの気持ちは嬉しいけど、もう二人だけの問題じゃないよ。前の持ち主がリリを探してるかもしれないし」

<sup>4</sup> 通常は左から電源状態、ストレージアクセス、ネットワークアクセスを示している。制御が簡単なので開発時はよく使用されるが、工場出荷後は充電中を除いて消灯されていることが多い。

「……そうよね。私みたいな犯罪者の道具をずっと匿っていたら、あなたまで逮捕されちゃうものね」

いじけた口調で答えるリリが膝を抱えてころん、と横に転がった。「サナって薄情だわ。私がセクサロイドだから？」と私を見上げる姿はどうしようもなく可愛いし、今すぐにでも愛してあげたくなる。

でも、今はそうも言っていられない。

「違う……って言いたいけど、確かに警察はちょっと怖いよ。今のリリはどうやっても盗品なわけだし、警察が本気を出したら見つかつちゃうと思う」

ちよつとしたデリヘルの摘発の証拠品なら、一週間ほど恋人気分を味わってから警察に引き渡したって、嚴重注意くらいで済むだろうという期待があった。しかし、組織的な窃盗事件の被害品ともなれば、きつと本腰を入れて捜査するだろう。そうなれば、リリを隠していたことで協力者として疑われる可能性だつて出てくる。

「誰にも見つからなかったら、私はここにいていいの？」

「そりゃあ……絶対に見つからないなら、私だつて一緒にいたいよ」

「じゃあ、私の身体をちゃんと調べてよ。誰にも見つからないように、私の過去を全部消して」

私の言葉に応えるように、リリがにわかに起き上がった。そして、ばざりと布団を脱ぎ捨てる。全身があらわになった彼女はやはり何も身に着けていなかったが、その気迫に押されてもはや気にもならなかった。

リリがテーブルから私のスマホを取り上げると、指先から青い光を送り込む。およそ五秒。それが終わると「私の深いところまでアクセスできる鍵、送ったから。早くして」と私に手渡しして、リリはそのまま仰向けに横たわった。

スマホには見慣れないアプリの起動画面が表示されている。P R B 向けの開発者向け管理アプリらしい。既に英数字を組み合わせた数十文字のシークレットが設定されており、タップすると利用可能な情報が一覧で表示される。

「えっと、何から手を付ければいいの？」

「とりあえず、プライバシーとかセキュリティとか、そのあたりかしら。終わったらストレージと身体を順番に見ていってくれる？」

えーと、Security and Privacy……英語は得意じゃないけど、これくらいは読める。メニューを開くとズラリとチェックボックスのリストが表示されるので、有効になっていない項目を探してチェックしていく。ランダム……ワイファイ？ よく分からないけど、有効にしておこう。

次に、ストレージ。サービスロイドが搭載する高密度三次元ストレージは、超高性能のLPUと共にサービスロイドをサービスロイドたらしめる中心部だ。身体を構成している外側のデバイスはチェックボックスやボタンで制御できるけど、ストレージの構造はそんなに単純ではない。

ストレージには、記憶の実体とそれらを接続する複雑なリンクが含まれている。簡単に言うと、端緒となる実体から大量のリンクを辿ることで、順番に記憶の流れを読み進めていくことができる。記憶は細切れに書き込まれていることが多いし、よく知られた形式で表現されているとも限らない。

その複雑なデータ構造のせいで、ごくまれに残骸データフアンタムと呼ばれる閉じたリンクが残ることがある。今回のよう

に突然サーバから切り離されれば、サーバ上のデータを指すリンクや役に立たないキャッシュは全て残骸データワラシトムになってしまっただろう。それらを別のデータを上書きすればサービスロイドは忘れてしまう。

最後は全身か。まず、Device Information によれば、リリのシリアルナンバーは……ゼロだけが十五桁続いているらしい。この分だと、ありふれた番号に見える端末番号も書き換えられているのだろう。流石はサービスロイド専門の窃盗団と言うほかない。このあたりはそのままですよさそうだ。

「リリ、これって何？」

それから、デバイス一覧で上から下まで眺めていると、腰とお尻の間のあたり——ちょうど充電コネクタの裏側に不自然な空間があるのを見つけた。リリをうつ伏せに寝かせて、指でなぞってシャッターの溝を探す。

「ちよっと、くすぐりたいからあんまり触らないでよ」

「ごめんね。でも、一応見ておかないと。えーと……」

よく見ると、人間でいう仙骨——やはり、充電コネクタの裏だ——のあたりにシャッターくらいの大さきの四

角い溝があった。

画面上ではグレーアウトしていて一見アクセスできないように見えるけど、タップするとメニューがポップアップする。続けて「不明なデバイスに関する警告」やら「互換性に関する警告」をいくつかスルーすると、あっけなくキュイッと小さな音を立ててシャッターが開いた。

中を覗き込む。シャッターの内部は浅い空洞になっていて、黒く塗られた金属板で空間が四角く区切られている。突き当たりの壁からは、きつくよじった黄色い被覆の針金が、鈍い銀色の丸いコインのようなパーツを貫いて五センチほど飛び出していた。コインには四つの数字が二桁ずつ刻まれていて、上から順に年と月だとすれば、およそ五年前の日付と読める。

「ここ、デバイス一覧に見当たらないんだけど、リリは何か知ってる？」

「アプリから見えないなら、私にも分からないわ。私が持つてる鍵より深いアクセスが必要なのかも」

リリも知らない場所なのか。よく見ると奥が扉になっていて、小さなラッチで閉じられているのが見える。た

だ、ラッチの穴に針金の端が通されており、開けようとする針金のループに引っかかってしまうようだ。分解禁止シールのようなものだろうか。

「ここ、開けてみるね」

でも、鍵が掛かっているわけでもないし、とりあえず針金を解いて中を確認してみよう。コインを回して黄色い螺旋を解こうとする……と、突然リリの身体が大きく跳ねた。

「い、痛っ！ う、あがっ……ちょ、ちよつと待って——」

身体をねじつてのたうち回るリリ。手足が打ち付けられるたびに、ベッドが大きな音を立てて軋んだ。慌ててコインから手を離すと、リリの発作は急激に収まっていく。

「リ、リリ!? どうしたの?」

「そ……そこは、大丈夫だから。お願い、もう触らないでちょうだい」

リリは苦しうに肩を上下させ、絞り出すような声でそう告げた。彼女は今……痛が、つ、ている?

サービスロイドに痛覚を与えるときは、それが目的に適しているか、痛覚を与えることによる利益が不利益を

上回るか、痛覚以外に実現する手段がないか。について、十分な検討とレビューが必要とされている。常識的な利用範囲であれば、却下されるのが当たり前だろう。痛みは自己維持機能に対する最大級の警告であり、程度によっては制御を失うことさえあるからだ。

それにもかかわらず、リリは確かに強烈な痛みを与えられていた。このまま無理に針金を解き続けていたら、私さえも巻き込んで暴れまわっていただろう。

しばらくしてカシュツ、と肌が擦れる音が聞こえた。穏やかに揺れる背中を見て、リリが自分でシャツターを閉じたのだと分かる。

「……リリ、大丈夫?」

「ごめんね、サナ」

起き上がって私に抱きつくリリが、何か言いたげな表情で伏し目がちに私を見上げた。私は何も答えずに、震える彼女の手を背中に感じながら抱き締め直すことしかできない。どうしてか、気づくと私も声を出さずにぼろと泣いていた。

それから数日経っても、捜査の手が私に迫ることはなかった。気を抜かずに、リリを家から出さないよう注意していたおかげかもしれない。家にいる間、リリはテレビでやっていた砲台跡の都市伝説——例えば、十五島の封鎖騒ぎは核兵器回収のためだった、とか——を調べたり、結婚情報誌のブライダルフェアで熱心にチャット相談をしたりしていた。あの様子だと、きっと後で私のメールボックスが結婚式場の広告の嵐になることだろう。

その日は、いつもより飲み過ぎていた自覚があった。缶詰と缶チューハイを流し込みながら、リリと他愛のない会話を楽しむ。それが、ここ最近の夜の過ごし方だった。「そういえば、この鍵ってどこまでアクセスできるの？」  
発端は、そんな些細な疑問だった。リリからピンクキヤブの痕跡を消し去るために与えられた鍵は、その役割を終えた後も管理アプリとともにそのままスマホに残されている。たまに見返してみるけれど、そもそもサービスロイドにバンドルされているだけの非公開のアプリだけ

ら、マニュアルも不十分で全貌がよく分からずにいた。「私が知覚している場所なら、どこでもアクセスできるわよ。私自身では操作できないけどね」

例えば、と前置きして、リリは説明を始めた。

基本的には、ストレージを操作すればサービスロイドの挙動はいかようにも変更できるらしい。しかし、ストレージは極めて複雑な構造をしているので、人為的に手を加えたところで、データが消し飛ばか残骸データに変化することがほとんどだという。これにより、サービスロイドの恒常性や一貫性がある程度担保されている。

ただし、中には多くの開発者が繰り返し試すことで確立された手法もいくつか存在する。比較的簡単なのは、感度の調整だという。身体中のセンサ値にフィルタをかけることで、あらゆる刺激を快感に変えたり、思考レベルを操作したりできるようだ。これが本当の電子ドラッグってやつだろうか。……合法だといいたげだ。

「あ……やばっ ♥」

リリの指示通りに生成した操作作用の疑似スライダの値を上げていくと、突然リリの身体が跳ねる。あからさ

まな変化に静かな興奮を味わいながら「可愛いね、リリ」と頭を撫でてあげると、今度は私に抱きついて股間を擦り付け始めた。

「あー……サナ、結婚して……♥」

リリは脳が幸せで満たされたような表情で、貪るように腰を振り続けている。まるで、目にハートマークが浮かんでいるのが見えるようだった。世のセクサロイドオーナーは、きっとみんな毎晩こんなことをしているのだろう。やっぱり、悪趣味だなあ。

「うん、とっても幸せ……」

うっとりとした表情のリリの手を握ると、また何度かびくびくと震えた。

\*

「……とまあ、こんな感じね」

よわよわなリリをひとしきり楽しんでから感度調整を解くと、彼女は何事もなかったかのように説明を再開した。

「ねえねえ、リリ。そこには何が入ってるの？ どうして私には教えてくれないの？」

それからは、そっとリリの腰を撫でて、もう彼女は平然と座ったままだ。一方、私にはリリのように簡単に切り替えられるスイッチはないから、彼女が平熱に戻ってからすすかり調子に乗ったままだった。

「別に、面白いものなんて入ってないわ。わざわざ見る必要なんてないわよ」

「いいじゃん。教えてよ、リリ」

「サナ、やめて！ 急にどうしちゃったの？」

リリが私の手を振り払う。普段なら、私の言う通りに家事でもセックスでもこなしてくれるはずなのに、今日はちよつとしたお願いさえ聞いてくれない。まるで、いつも当たり前に使っていたはずの椅子が突然壊れたみたいに、ちよつといらいらする。

「リリ、私の言うことが聞けないの？」

私の言葉を聞いたリリの動きがびくん、と止まった。

さらに下を向いて数秒じっと考え込んでから、きつ、と私を睨みつける。今まで見たこともないような、強い拒否感を示すだけの表情を突きつけられても、あのとときの曖昧な思考の私ではもう引き下がれなかった。

「……分かったわ。好きにして。その鍵なら、痛みだつて消せるはずなもの」

「ほんとに……やるからね」

ベッドにうつ伏せになったリリの腰で、シュイツという小さな摩擦音とともにシャッターが開く。ぽっかり空いた黒い空間の中には、前と同じように黄色い針金の封印が転がっていた。

痛覚の調整は、ほとんど快感レベルの調整の応用だった。あの日私を驚かせたリリの痛覚はいとも簡単に遮断され、もう針金に触れたことにすら気づかない。くる、くると根本から螺旋を解くうちに、今度は鉛色のコインが引っかかることに気づく。そうか、ラッチの近くで切らなきやいけないのか。

工具箱に向かう足、ニッパーを探す手、おそるおそる封印を切り落とす切っ先……気づくと全身が震えていた。私はとんでもないことをしようとしているのではないか。今思えば、ここで目を覚ませばよかったのだろう。彼女の中で最大級の痛覚とリンクしている針金を無痛のまま取り外し、インシュロックでも装着しておけばよかつ

ただ。

しかし、私は好奇心のままに中を覗き込んでしまった。扉の向こうは意外にもシンプルだった。中には数字が刻印された機械式のラチェットドラムがいくつか並んでいて、古い電気メーターのように何かをカウントしていた。よく見ると、それぞれの数字の意味を示す小さなラベルが無造作に貼られている。

「総使用時間、——秒。総使用人数、——人。ノック、——回。リリ、これって……」

「セクサロイドの私がどれだけお客様にご奉仕したか、ちゃんとカウントしてるのよ。売上高が届け出た料金表と合っているかを突き合わせるためにね」

くぐもった涙声が、顔を見せないリリの悔しさや悲しさを直接私に突き立てる。軽率に開かれた黒い箱の中から、彼女の不安や憎しみが飛び出していく気さえた。

リリが隠していたのは、腰に埋め込まれたセックスメーターだけではなく、セクサロイドとしての自分そのものだった。しかし、それに気づいたときにはもう遅い。彼女は過去さえも忘れようとしていたのに、私の手で扉が

こじ開けられてしまったのだから。

「どう？ 私の秘密を暴けて、面白い？」

まるでバケツいっぱいの水を浴びせられたように、急に酔いが覚めていく。

「えーと、リリ……」

今さら意味のないことだとは理解しつつ、慌ててシャッターを閉じる。リリはむくりと起き上がって、じっと私を見つめた。いや、見つめているというには無感情すぎて、今はただ目玉をこちらに向けているだけと言っても過言ではなかった。

「……どうしたの？ 早く好き勝手に私をいじりまわせばいいじゃない。どうせ、私はセクサロイドだもの。受け入れられないんですよ？」

## 6

リリはあの日から、何も話さなくなつた。彼女には飲食も排泄も入浴も必要ないから、放っておくとずっと部屋の隅に座つたままだ。膝を抱えて座つていてもインジ

ケータは動作したままなので、まるで隣に置かれたルーターと会話しているようにも見える。

彼女が身体を動かす唯一のタイミングは、バッテリーが切れる直前だけ。サービスロイドは自らを充電できないように制限されている<sup>6</sup>。ので、「サナ、お願い」と私に充電プラグを挿すように頼まなければならないのだ。

私は、リリに何と言うべきか分からなかった。酒に酔つてやったことだから仕方ない、なんて言うつもりはなかったけど、どうしてあんなことをしてしまったのか、私にも分からない。ごめんねリリ、でも過去なんて気にしないで、私には隠さなくていいから……何を言ったとしても、彼女は悔しそうに私を睨みつけるだろう。

あるいは、リリだつて苦しんでいるんだから、彼女の言う通り強力な鍵で好き勝手にストレージを操作して、記憶ごと消せばいいんじゃないか？ サービスロイドの忘れる権利は倫理規定でも保障されている。私の手できれ

<sup>6</sup> ただし、鍵のような凹凸パターンが施された固定型の充電アダプタを取り付けることで、プラグを設置した場所でのみ自ら充電できるようになる。通常は、腰部の拡張用空間（リリは既にセックスメーターが入っている）に鍵穴のようなコネクタを取り付ける。

いさっぱり無かったことにしてあげたほうが、彼女だつて幸せなんじゃないか……と、どこからともなく浮かぶ身勝手な考えを振り払うように首を振った。

その一線は、超えちゃだめだ。そんなことをしたら、私とリリは人間と道具の関係に成り下がってしまう。

\*

黙ったままのリリを眺めて三日ほど経った昼。ピーンポーンと、突然インターホンが鳴った。リリが初めてここに来た日を思い出すけど、今日は誰かが来る予定はもちろん、荷物が届く予定もない。

ドアスクープを覗くと、スーツ姿の中年男が一人立っている。何だか嫌な予感がした。

「こんにちは。今、お時間よろしいですか？ 私、こういうものですよ」

ドアを開けると、刑事を名乗る男が警察手帳を広げてみせた。とうとう、来てしまったのか。リリは……部屋との奥でルーターの隣に座ったままだから、たぶん大丈夫。「今、行方不明のロボットを探してまして。こんな外見

なんです、心当たりありませんか？ デリヘルで使われてまして……あ、デリヘルって分かりますかね？ 部屋に入っていくのを見たとか、すれ違ったとか」

渡された写真は、茶髪のリリ……正確には、PRBのカタログ写真だろう。と思ったが、これは最新のPRB Xのものだ。「防犯カメラでも付いてれば、髪型や服装も分かったんですが」と言っているあたり、正確な型番やどのようにカスタマイズされているかは、まだ分かっていないらしい。それほどピンクキャブの後処理が優秀だったということか。

「下の階のアクセスポイントにロボットのシリアルナンバーが残っていたとかで、来たとしたらこの辺りらしいんですよ。ああ、もちろん全戸回ってるんですがね。私は機械に疎いものでよく分かんのですが」

適当に「そうなんですか。お疲れさまです」なんて相槌を打ちながら、後ろでぎゅつと手を握る。リリのシリアルナンバーは抹消されていたはずだけど……何が見つかったんだろう。画面から隠されているだけで、本当はどこかに番号が残っていたのかもしれない。

いや……でも、そんなセンシティブな情報を簡単にネットワークに送信したりするだろうか。聞き込み捜査に携わるような刑事が常に真実をもって私に接するとは限らないし、まだ隠している情報もあるはずだ。

こんなことで動揺しちゃ、ダメだ。

「普段からリモートワークなもので、あまり外出してなくて……すみません、ちょっと分からないです」

「そうですか。お仕事は何を？」

それから、何度か意味のなさそうな質問——回答の身よりは応答の態度や挙動を見るような——を繰り返した後、手帳に何かを書き込んだ。聞き込みはそれでありと終了し、刑事は「わざわざお時間取らせてすみません。もし何かありましたらこちらまで」と名刺を渡して去っていった。

ゆっくりとドアを閉めて鍵をかけ、目を閉じてさらにゆっくり息を吸い、吐き……その場にへたり込む。よかった。なんとかなった。リリにも教えたほうがいいだろうと思いつつ顔を上げると、目の前にリリが立っていた。

「私、もう警察に行くわ。サナに迷惑かけたくない」

久しぶりに聞いたリリの声は、いつもよりずっと平坦で、ずっと悲しい声だった。そうだ。一番苦しんでいるのは、警察に追われている彼女自身だ。

立ち上がってリリを抱きしめる。彼女の身体はいつもよりずっと小さくて、ずっと冷たい気がした。苦しい感情を一つ一つ捨てていくたびに、彼女は少しずつ機械に戻っていくのだろうか。そうだとしたら、私はリリのために何ができるのだろうか。

「リリ。車、運転できる？」

「……え、ええ。オートパイロットのサポートくらいなら、標準ナレッジにあるけど」

「警察に行く前に、十五島に行こうよ、リリ。きっと、楽しいからさ」

気づくと、私はつんのめるようにリリの肩を掴んでいた。彼女は面食らった表情で私を見つめている。「楽しいから」なんて言いながら、私は笑顔でぼろぼろ泣いていた。私はただ、リリとの思い出が欲しかったのかもしれない。リリが捨てた感情を一つ一つ拾い集めて、楽しい時間得上書きしたかったのかもしれない。それが独りよが

りな願いだとしても、リリに受け入れてほしかったのかもしれない。そうでもなければ、十五島なんて言い出すわけがなかった。

リリはきよとした顔つきで数秒固まった後、「いいわね。楽しいなら、すぐに行きましようよ」と言って、少し笑った。

\*

「リリ、ごめんね。勝手に秘密を開けちゃって。もう、あんなことしないから」

「私、怒ってないわ。サナがずっと黙ったままだから、どうしたらいいか分からなくて」

日付が変わる頃に出発したのは、人目を避けるのはもちろん、夜のドライブが好きだったからだ。静かな車内と情報のない夜景を、馴染みのないラジオで満たしていく。リリの運転なら、昼も夜も関係なかった。たまに喋って、それからまた黙って、そういう空気が好きだった。

リリは穏やかな表情でハンドルに手を添えていた。その姿がミキに重なって見えたのが、たまらなく嫌になる。

「……そっか」

「私、サナに嫌われたくないの。知らない人といっぱいセックスする子だって、思われたくない」

リリは運転に集中したふりで、呟くようにそう告げる。そして、前を向いたまま「セクサロイドのくせに、変よね」と自嘲した。

彼女が抱えている過去は、大きすぎるものなのかもしれない。リリを救うためだと言えば、それを順番に消していくのは簡単だろう。でも、私はその記憶の一つ一つを認めてあげたかった。リリがセクサロイドだとしても、私が彼女を大事に思う気持ちは同じだから。

リリはきよと泣いていた。「ごめんね。私はずっとリリの味方だよ」と言って抱き締めたかった。シンセサイザとサンプルングにまみれた曲が、たっぷりと沈黙を塗りつぶしていく。

「ねえ、リリ。このまま進んでも、きよとまだ暗いうちに着いちゃうから……ちよつと、休まない？」

\*

「このまま一七二九線をまっすぐ進んで、十五島大橋を渡ったらすぐ駐車場があるから、そこで降りようか。小銭は……あれ、去年から無料化されてるみたい」

結局、十五島が見え始めたのはちょうど日が昇りきった少し後だった。橋の入口に建てられた料金所は、ゲートが上げられたままもう動かない。

左右にきらきらと輝く海が広がって後ろへ流れていく。そっと窓を開けると、ほんのり潮の香りを帯びた空気が通り抜けていった。

「リリ、お疲れさま」

「ありがとう、サナ。ベッドで音楽を聴くのって、あんなに楽しいのね」

車から降りて、ぐつとアスファルトを踏みしめた。夏の朝の涼しくて湿った空気が身体にまとわりついては、朝日が当たるたびにふわりと消えていく。

まだ、他の車は停まっていらない。まだ朝だからというのもあるだろうけど、すっかり寂れているのは明らかだった。昔は人気の観光地だったけど、三年前に砲台跡封鎖の騒ぎがあつてから、もうテレビでその名前を聞くこと

はなくなつた。もちろん、今の私たちには好都合だ。

「歩くんでしょう？　ちゃんと準備しないとね。今日は暑くなるみたいだし」

リリが鼻歌を歌いながら、荷物を取り出す。タオル、スポーツドリンク、かたい丸パン、缶詰……持ち物をリュックに詰めると、来る途中に買ったつばの大きな麦わら帽子を頭にかぶつた。サビスロイドの髪は生え変わらないので、傷まないように帽子や日傘で直射日光を避ける必要があるのだ。

「ピンクの麦わらつてき、趣味悪くない？」

「どうして？　可愛いじゃない。それに、ミキさんはこんなを着けてなかったでしょ？」

リリがその場でぐるりと回ってみせた。白い肌とシルバーの毛先が、朝日に照らされてよく輝いている。パステルピンクの麦わら帽子を淡いピンクのワンピースに合わせると、まるで *moenoe emoTION* のジャケットアームみたいだ。

ペットボトルを一口。深呼吸をして、海岸に続く遊歩道を歩き始める。案内板には遊歩道と書かれているもの

の、人がやつとすれ違える幅のぼろぼろの舗装に、左右は伸び放題の背の高い雑草が作る大きな壁で圧迫されているので、気分はまるで秘密の抜け道だ。

「サナ、今日はとっても天気がいいわ。楽しくなりそうね」  
リリに做って振り返ると、道の向こうにぐつと深い青空と輝くような白い雲が見える。このまま、どこまでも行けたらいいのに。

遊歩道を抜けると、海浜植物でびっしり覆われたなだらかな崖と、大きな入り江に広がる岩場が私たちを迎えた。崖はゆるやかなカーブを描いてずっと向こうまで続いていて、空との境界を見つめると吸い込まれそうになる。島で一番人気のスポットだったけど、今は誰もいない。

年中吹き付ける強風で形成された最果てみたいな景色は、やはり今の私たちに似合っていた。

岩場に降りたりリリが、きよろきよろと歩き回る。風化してでこぼこになった岩場を、あちらこちらへ進んではその隙間を覗き込む。立ち止まったリリがこちらを見るのと、「お花が咲いてるわ!」と言って足元を指差した。あのオレンジ色の花は、たぶんスカシユリだ。

もう少し歩き進めると、今度は白い大きな建物が現れる。かつて宿泊客を迎えていた大きな門は、トラロープと高いフェンスで塞がれていた。直射日光と雨風のせいで、柱に貼られた「立入禁止」の札はもう色あせてよく見えない。ここは、広い海を望む流行りのホテルだった。このホテルも、もう廃業してしまったのか。島の衰退を考えればそんなの分かりきっていたことなのに、目の当たりにするとなぜか力が抜けてしまう。大きなため息をつきながら、思わずその場に座り込んでいた。

「全部、なかったことになってきたらいいんだけどな」

「この島を残して、私たち以外全部消しちゃえばいいわ。砲台跡、探しましょうよ」

そう言っ、リリがペットボトルとタオルを差し出す。じりじりと夏の日差しが強くなってきていた。汗一つかかないリリを見ていると、まるで彼女が本当に全てを消し去ってくれそうな、妄想じみた希望が浮かんでくる。

「あんな話、嘘に決まってるじゃん。今日はただの旅行のつもりだよ」

\*

入り江を抜けて少し内陸に進むと、徐々に古いコンクリートで覆われた足場が増えてくる。さらに坂を降り、階段を登って島の中心部に向かうと、伸び放題の植え込みでぐるりときれいな円に区切られた場所にたどり着いた。内側は比較的新しい輝きを放つ白いコンクリートタイルが敷き詰められており、真ん中にはよく磨かれた四角い黒御影石が据えられている。

「……で、ここが砲台跡だったんですが」

「きれいな公園ね。廃墟だなんて嘘みたいだわ」

いや、確かに数年前まで廃墟マニアの間では奥が入り組んだ大迷宮として知られていたはずだ。しかし、目の前の砲台跡はやはり既に埋め立てられていて、砲弾庫や要塞への入り口はすっかり消えていた。スマホで現在地を確認すると、地図上は「砲台跡」のままだけど、石碑にはしっかりと「十五島砲台跡記念公園」と書かれている。おかしい。兵器回収説はただのデマや陰謀論の類だったはずなのに。

「リリ、ちなみに……空間エネルギーは？」

「下の方から、微かに反応があるわ。たぶん、ずっと深くまでコンクリートで塞がれているから、天然由来のものと区別がつかないレベルだけだ」

リリはおもむろにしゃがみ込むと、敷かれたタイルの一枚をこつこつ叩いた。コンクリートは効率よくエネルギーを遮蔽するだけではなく、自ら天然由来のエネルギーを放つので隠匿にも有効だと聞いたことがある。

「もしかしたら、そのまま放置されてるかもしれないわね。もしかしたら、だけだ」

曖昧な口調は、いつものリリらしくない。可能性は残されているということか。しかし、本当にここで何か重要なものが見つかったとして、回収せずに放置することなんてあるだろうか？

例えば、移動できないほど大きくて、破壊できないほど堅固としたら。あるいは、もはや安全に破壊できないほどのエネルギーを溜め込んでいるとしたら。長期間にわたって島を閉鎖するよりも、誰も使えないように塞いでしまうほうが簡単なのかもしれない。仮にそんな兵

器を持ち出したとしても、現代では持っているだけで危険に晒されるだろうから。

「ねえ、サナ。あれ、何かしら！」

——と、コンクリートの地面を見つめて考える私をよそに、リリが公園の奥に向かって駆け出した。

リリが走った先を見ると、三段ほど高いステージに人がぐくられるくらいの金属製のアーチが立てられていて、真鍮の鐘が吊るされている。これは……いわゆる愛の鐘だ。ひょっとして、この公園は風評被害を打破するための最後の切り札だったってこと？

「この鐘を鳴らすと永遠に結ばれるんですって！ サナ、ここで結婚式しましょうよ！」

私に向かって手を振るリリには、「あーあ、ばっかみたい」と呟く私の声は聞こえない。こんなセンスのない観光スポットに、失われたはずの兵器なんて隠されているわけがない。

「結婚式なんてしなくていいじゃん。今からみんな消しちゃうんだから」

「どうして？ 私、一度でいいから結婚式してみたかつ

たのよね。他に誰もいなかったって、別にいいわ」

そう言っつて、嬉しそうにその場でくるくると回ってみせる。「鐘、鳴らしましょうよ」とアーチの下で待つ彼女について石段を登ると、こんこんと軽い足音が響いた。汗ばむ額を拭ってから彼女の前に立つと、リリは帽子を取って私を見上げる。

「私、コンピーフだってちゃんと開けられるようになったもの。きつと、あなたの役に立つわ」

リリが鐘に繋がった綱を握った。その手に右手をそつと重ねて鐘を鳴らすと、その伸びやかな響きを島中に伝えるように、さらさらとした風が吹いていった。

# 当事者

有坂

## 主な登場人物

- ・ サクラ…主人公。十九歳の女性。長髪。
- ・ ヒナ…十八歳の女性。短髪。奉仕活動としてサクラの部屋にやってきた。

## 序

長い読経が終わって、束の間の静寂が訪れた。小さな執行室の中央にある電灯の光が、青色に塗られた壁に反射して、眼前の男の横顔を薄青く染めている。男は微笑を湛え、部屋の奥を向いたまま微動だにしない。直立不動の様は、さながら世の中の時間から切り離されているようだ。いや、実際、男の時間はとくに止まっているのだろう。対象には表情を選択した後に硬直処理する権利が与えられていて、この場に来る人間は皆それを選ぶ。結局、対象を落ち着かせる効果があるという壁の青色は、塗られてからずっと、部屋をひどく不気味にしているだけだ。

私は考える。もし硬直処理していなければ、例えばこの男は一体、どんな表情になるのだろうか。

「読経が終わりました！ 間もなく、執行です！」

部屋の奥、男の視線の先には窓があり、硝子の向こう側に対象の親族、僧侶、実況者、大きなカメラが鎮座している。そして、カメラの向こう側には数百万の人間がいて、この男の結末を今か今かと待っているのだ。皆が当事者として参加することが許されているオンライ、実況は、今日も大盛況だろう。

なぜなら、この男は部外者で、対する私は国選執行官であるから。

国選執行官は国民の模範であり代表である。人々の願いと怒りを背負い、職務を粛々と遂行することが求められる。

故に、私の右手には銃が預けられていた。不義を断罪し正義を知らしめる銀色のボディは、高潔な国民の象徴だ。

『執行官、準備』

部屋に無機質なアナウンスが響く。私は躊躇うことなく、左手で銃のセーフティーを外すと、

「構え」

男の首筋に銃口を向けて、

「撃て」

いつものように、引き金を引いた。

\*

「ご苦労だったな」

対象の執行が完了したことを報告すると、部長は普段通りの言葉と抑揚で私を労った。それが本心かはともかくとして、部長は私の上司であり、その言葉を発する義務があるのだ。部長の口からは時折紫煙が漏れて、背後にある換気扇へと吸い込まれていく。職場の人間の多くは勤務中にも煙草を吸っているせいか——例え執務室の壁がヤニで黒ずんでいようが、壁に貼られた『禁煙』の表示が黄ばんでいようが、部屋全体に甘臭い匂いが残っているように——誰も部長を咎めない。昔は煙草を吸うだけで人々から犯罪者の如く批判されていたのだというのだから、時代は変わるものだ。現代では批判する側の立場が重要で、不用意に喫煙者を批判しようものなら、ただ

では済まされまいだろう。当事者保護法の名の下に、無責任に意見を振りかざす部外者アウトサイダーは処罰される。執行するが我々だ。

ギシリとイスを鳴らした後、部長は右手の煙草を灰皿に押し付ける。高そうな木目調の机の上には黒色のノートパソコンと吸い殻まみれの灰皿のみがあった。常時、部長はそれ以外を机上に置こうとせず、机の横にある木製のゴミ箱も小奇麗だ。曰く、それがミニマリストの流儀なのだという。

「さて」

黒縁の眼鏡をかけ直すと、部長は聞き慣れた定型文を読み上げ始めた。

「規定に基づき、君には執行後三日間の休暇を取る権利が与えられる。業務を遂行するのに十分な精神衛生のためにも、俺は休暇を取ることを推奨するが——」

「お氣遣いには感謝しますが、必要ありません」

私も、言い慣れた定型文を返した。予想通り、部長は眉をひそめる。

「しかしな」

「執行後の診断もパスしています。定期的な検診でも異常は認められておらず、休暇の必要性が感じられません」

「……やれやれ」

部長が再度眼鏡を外して、目を揉みほぐす仕草をする。

眼精疲労が溜まっているのだろう。私よりも部長の方が休むべきだと思ったが、言わなかった。私には関係のないことだからだ。

「全く、毎回君が休んでくれないから、次々に対象が送られてくるんじゃないかね。今月だけでも十人目だぞ、まだ月半ばだつてのに」

「執行官は私以外にも二人います。私が休暇を取ったところで、執行に影響が出るとは思えません」

「君と違って彼らの場合、五回に一回くらいは休暇を取ってるだろう。それに、影響が出ないなら尚更、君は休むべきだと思わんか」

「いいえ、必要性がありませんから」

「関係書類を作る側の気持ちも汲んで欲しいものだな」と部長が悪態をつく。

「君は確かに最年少執行官として……いや、国の模範と

して優秀だがね」

「ありがとうございます」

「だが、あまりにも仕事熱心すぎる。報道は君のことを

執行マシンと呼んで……」

そこまで言つて、部長は先を続けるのを躊躇った。

「……いや、いい。とにかく、俺の仕事をこれ以上増やさんでくれ。今だけで手一杯なんでな。今日はもう上がつていいぞ」

「では、失礼します」

部長に挨拶をして、私は執務室を出た。

自分のデスクに戻ると、部屋は閑散としていた。壁にかけられた時計を見ると、既に二十時を回っている。同僚は退勤したのだろう。執行の担当日はいつもこんな調子だった。報告書の作成はともかく、執行後のカウンセリングはもっと短縮できるはずだと何度も部長に提言しているのだが、「精神衛生の維持は重要」の一点張りで一方向に改善の兆しは見えない。

簡単にデスクを整理してから、更衣室に向かう。私以外の人間は制服のまま官舎と行き来をしていたが、私はい

つもここで着替えている。通常の生活において制服は邪魔であるし、食事等で汚すわけにはいかないからだ。制服は白を基調としているため、僅かな汚れでも目立ってしまう。過去にシミをつけたまま執行をしようとして、部長から大目玉を食った人間もいる。執行官として、全国に姿が配信されるという意味と意義を理解してほしいものだ。

手早くジャージへ着替えを済ませ、ロッカーから自分の鞆を取り出しながら、今日の残りのスケジュールを考える。自室に戻り、レトルト食品の残り野菜セットを摂取。その後、トレーニングとストレッチを行い、入浴。就寝は二十三時。睡眠は七時間として、翌日は六時に起床。起床後は洗顔を行い、各種報道の確認と食事の用意。規則正しく、無駄はなく、これが私の日常である。

ちなみに、他の執行官の生活は異なるらしい。過去に同僚が「君はもっと明るい生活をしてもいいのではないか」と私に勧めたことがある。だが私には明るさなど必要ないし、何が良いか理解できない。なお、お節介な同僚は翌月に左遷された。オンラインチャットで他人を

論したところを、アウトサイダー部外者であると報告されたのが原因らしい。放っておけばいいのに、全く馬鹿なことをするものだ。

——〇〇市〇〇小学校 六年生 科目…社会科——

よし、今日は我が国の法律について勉強するぞ。後で小テストをするので、しっかり授業を聞いておくように。居眠りしたら成績を落とすからな。

さて、我が国には多くの法律があるわけだが、お前たちは、その中で一番有名で大事な法律が何か分かるか？  
……そう。『当事者保護法』だ。

まず、この当事者保護法について、基本的な内容を確認する。教科書は五十八ページだ。では順に読んでいくぞ。

- 1 あらゆる発言や行動には、当事者性が必要である。
- 2 これを破る者はアウトサイダー部外者と呼ばれる罪人となる。
- 3 アウトサイダー部外者は、罪の程度に応じて罰せられる。

これが基本だな。知ってると思うが、我が国では『当事者』を守るために、こういう法律が定められている。だから例えば、自分と関係がない人の行動について発言してしまうと、罰せられてしまう。お前たちも、母さんや父さんに「当事者じゃないのに発言するな!」って怒られた経験があるんじゃないか? あるよな。ちなみに、我が国では昔、当事者じゃない人たちによるこういう行った行為が大変問題になって、結果としてこの法律が生まれたんだ。

じゃあ、ここで問題だ。部外者アウトサイダーのうち、凶悪、重度の違反をした人はどうなると思う?

……おつ、正解! そうだな——重度の部外者アウトサイダーは執行対象となり、死刑が下される。この死刑は、国に選ばれた『国選執行官』エグゼキューターが行うことになっている。ちなみに、国選執行官になるには国家資格が必要で、試験はとても難しい。ただ、十八歳の若さで最年少国選執行官エグゼキューターになった「サクラ」という人もいる。テストに出すから、よく覚えておくように。

ところで、執行官による死刑がどうやって行われるか

知ってるか?

……あれ、誰も知らないのか。やれやれ、不勉強だぞ。我が国では死刑として、対象の首筋にナノマシンというとても小さな機械を撃ち込むことになっている。この機械が脳の活動を止めてくれるおかげで、執行対象は苦しまずに死ねるわけだ。さらに、執行対象がより安らかに死ねるよう、執行時には硬直処理フリーズというオプションも選択できる。自分にとって一番良い体勢と表情を決めて、ナノマシンで固定してから執行に臨むというものだ。強制ではないが、見苦しい姿を晒さなくて済むということもあって、ほぼ全ての人間がこれを選んでいるな。

そして、ここからポイントだ! こどもテストに出すからな。いいか——

——この死刑は、全国民が当事者として参加することが許されている、特別な行事だ。今週は金曜日に行われるから、家で見ておくように。その感想文が来週までの宿題だ。

\*

「今日からこちらでお世話になります、奉仕員のヒナと申します。誠心誠意お仕えさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします」

私の部屋の玄関前で、少女がぺこりと頭を下げる。無味乾燥な固い表情、平坦な声、グレーのTシャツにベージュのズボンの服装、無駄なく切り揃えられたショートヘアの髪型、160センチほどの平均的な身長。人間としてニュートラルに調整されたであろう少女からは、特徴というものが全く感じられない。強いて言えば、特徴がないことが特徴なのだろう。

ちらと横に立つ部長を見る。よれたスーツを着て、あくびをしながらハネ気味の頭を掻いていた。自分が連れてきておきながら、少女に対する関心は薄そうだ。

「そういうわけで、奉仕部から送られてきた奉仕員だ。今日から住み込みで雑務をしてくれるらしいから、ありがたく受け入れるように」

部長は気だるげにそう告げる。あたかも普通の指示と同様だと言わんばかりであったが、今回については明らかに説明不足だ。

「どういうことでしょうか。家政婦を雇いたいと申し上げたことにはないはずですが」

「知らんよ。昨日の夜、奉仕部から急に連絡が来てな。俺も立ち会いで朝が早くなつてたまらん」

「しかし、現状でも部屋の管理を十分に行えています。用意できる仕事の量も十分とは言えず、外部の人間を入れるまでもありません」

「君は最年少国選執行官で知名度が高いのに、褒章や好待遇を拒否してるだろう？ その件について、元々本部が気を揉んでてな。その件で奉仕部も一枚噛んでおきたいんだろ。急に決まったのはアレだが、まあ、ここは一つ顔を立ててやってくれんかね」

「私が褒章等を拒否しているのは、そんなもの必要ないからです。この少女の配属先に関しては、私よりも適任のところがあるでしょう。第一、奉仕部は部外——」

「おい、サクラ」

続きを話す前に、部長が私の名を呼んで遮った。

「奉仕部もうちの組織の一部だ。仲間内で当事者かどうかの話を持ち出すのは政治的にややこしくなる。特にこ

んなご時世では」

「ですが、実際、奉仕部は無関係のはずです」

「だからこそ奉仕部は嘸あんでおきたいのさ。最近奉仕員も減ってるって聞くし、除け者にされる前に手を打ってこうって魂胆だろうが……あ、ここで煙草はいいかね？」

「不要な消臭コストがかかります。やめてください」

「そうか……まあいい、こいつは頼んだぞ。デメリットはないはずだ」

「厳密には、追加の食費や光熱費等が——」

「いいえ、各種費用については奉仕部が精算するそうです。会計報告も私が担当いたします。一切ご負担にはなりません」

私が口にしようとした正当な懸念は、あっけなく、少女によって払拭されてしまった。

「……そうですか。それでも納得はできませんが、話からして既に決まっていることのようにですし、抵抗は無駄でしょう。お受けします」

「話が早くて助かる。後はよろしくな。もちろん、午前中は半休でいい」

「それは不要です」

「すぐに済むとは思えん。無理するな」

そう言い残すと、部長はヒラヒラと手を振りながら去っていった。小さくなっていく背広を眺めながら、私は考える。部長は半休でいいと言ったが、その必要性が全く感じられない。次回執行に関する書類のチェックが残っている上、午後からはブリーフィングもある。受け入れる以上は少女の対応をせざるを得ないが、早急に終えて職場へ向かわねば——

「ふーっ、ようやく行つた。こういう場はやっぱり緊張するなあ」

抑揚を含んだ声の後に、はあ、というため息が聞こえた。少女の方を見る。ニュートラルだと思っていた少女の顔に、先ほどまでは微塵も感じられなかった、やれやれといった人間的な表情が浮かんでいる。直感的に私は悟った。

「あはは、緊張して朝から疲れちゃいましたよ。で、とりあえず上がっていいですか？ せっかくですし、いろいろお話ししましょう！」

——どうやら、半休は必要になりそうだと。

＊

「そこにあつたインスタントの紅茶でいいですか？　これ、封が開いてないですけど」

「以前に同僚からもらったもので、開けること自体は問題ありません。ところで、勝手にキッチンを探るのはやめてください」

「奉仕員としてこれから家政婦業務をするんですから、これも私の仕事の範疇ですよ」

「ですが、あなたはあくまで——」

「『当事者は当事者、部外者は部外者として振るまえ』……と、調整された時に教えられたもので。私はこの部屋を管理する仕事に割り当てられて、当事者として責任を果たしているだけです。その点については、サクラさんにも拒否権はないんですよ」

「……………」

「なーんて、冗談です！　あはは、ちょっと意地悪でした。仕事の内容として、もちろんサクラさんに配慮する

ようにと言われています。次からは気をつけますね。とりあえず、紅茶を淹れてもいいですか？」

「……許可します」

「承知しました」

彼女、ヒナは上がって早々にキッチンへ入ると、あれこれと物色した後に紅茶を淹れはじめた。おとなしくするよう指示を出そうとするが、会話で切り返してくるせいで上手く制御できない。時間をかけて考えれば十分対応できると思うが、思考している間に彼女は次の行動へ移るだろう。また、彼女が言った通り、私に彼女をどうこうする権限がない。余計に取り扱いが面倒だ。

私はキッチンが見える位置で壁にもたれかかる。彼女について引き続き監視が必要だった。現状、何をするか推測できない。

ヒナは棚の奥から電気ケトルとマグカップ二つを取り出し、ケトルを軽くすすぐと、水を入れてコードを挿した。程なくして、かすかに機械の動作音が聞こえてくる。

「そういうば」

ケトルをちらと確認してから、ヒナが会話を切り出した。

「サクラさんは、どうして執行官になろうと思ったんですか？」

「あなたに開示すべき情報とは思えません」

「じゃあ、言い方を変えます。家政婦としてベストなパフォーマンスを出すために、オーナーの過去について簡単に知っておきたいと思ひまして」

ふふん、と得意げにヒナが鼻を鳴らす。……確かに、これくらいの情報は与えておいた方が得だろう。

「いいでしょう、簡潔にお伝えします」

頭の中で過去を整理しつつ、重要な部分のみをピックアップすることにした。

「もともと私は孤児で、生後間もなく保護施設で引き取られ、親は不詳です。政府の養育施設に入所して一定の教育を受けたのですが、その過程で適性検査を受けた結果、執行官業務を提案されました。私もそれが適切と判断し、必要な資格を取得して就任に至ったという経緯があります」

「うーむ、なかなか大変な境遇ですね」

「そうでしょうか？ 衣食住が確保され、十分な教育が

提供された恵まれた環境だったと思ひますが……それに」

私は、重要な点を付け加える。

「今のあなたの発言は倫理的に問題があります。他人の生い立ちについて、当事者でない外野の人間の価値観で判断してはなりません」

「えー、これくらいは許してくださいよ」

「だから倫理的に、と言っているのです。それとも、当事者保護法違反と言われたいすか？」

「分かりました」とヒナが呟いた。が、明らかに納得していない様子だ。ヒナは紅茶の箱を開け、中から個包装の紅茶のスティックを取り出すと、カップに中の粉を注ぐ。粉は思っていたよりも白かった。

「ヒナさん。失礼ですが、奉仕員になるにあたっての調整は真面目に受けられていますか？」

「もちろん。面倒くさい勉強やご指導、だらけでしたよ」

「なるほど」

部長の前でのヒナの振る舞いを思い出す。能ある鷹は爪を隠す、とはよく言ったものだ。恐らく、奉仕部でも同様の方法で上手く立ち回っていたのだろう。皮肉を言

う人間など、奉仕部で徹底的に調整されるはずだ。ましてや、私のところに送り込まれるような奉仕員として選ばれるはずがない。どうやらヒナは、奉仕部の厳しい調整を無事に乗り越えてしまったらしい。

私は思案する。私の職業上のリスクと、この少女がそこまでの行動を起こす理由。それは――

「仇討ちか、革命か。あなたはどちらの人間ですか？」

一瞬の空白。その後、ヒナは目を細めてクックッと笑った。

「……私ってそんな風に見えますか？」

「違いますか？」

「心外ですね」

沸騰を告げる電子音が鳴った。ヒナはポットを持ち上げて、マグカップに湯を注いでいく。しばらくの間、静寂だけが場に残った。

「仮に、私がサクラさんに敵意があったとしたら」

ようやくヒナが口を開く。

「普通、こんな風に話したりしませんよ。やるとしたら、最後まで真面目な奉仕員を装って、部屋に上がったタイ

ミングで……グサリ、ですね」

「親しみやすいキャラクターを演じて、相手を安心させようとしている可能性もあります」

「尚更ありません。親しみやすさは、時間をかけて相手に印象付けないとダメです。でなきゃ、却って怪しまれます。でしょ？」

「……」

一理ある。奉仕部の調整を乗り越えたような人間が、敵の目の前であからさまにポロを出すだろうか。ヒナが真面目を装っていれば、私を殺傷するタイミングは無数にあっただけだ。親しみやすさを演出するにしても、ヒナが言うように、焦る必要はない。ならば、この推測は誤り。「ふふん、知りたいですか？ 私がどうしてここに来たのか。奉仕部の事情はともかく、私も配属を希望したんですよ」

とすると、この少女の目的は何か。

「そうですね。この場において、疑心暗鬼になりうる要素は排除しておきたいものです。教えていただけますか？」

「分かりました。何を隠そう、私は――」

一呼吸の後、ヒナは大きな声で告白した。

「サクラさんとお近づきになるのが夢だったんです！」

—— ○○市○○小学校 六年生 科目：社会科 ——

今日は奉仕活動について勉強するぞ。後で小テストをするので、しっかり授業を聞いておくように。居眠りしたら成績を落とすからな。

お前たちは、奉仕活動って分かるよな？ ああ、学校で悪いことをした時にする奉仕とは違うぞ。

では、ヒント。前回の授業で話した『当事者保護法』に違反した人のうち、凶悪犯罪者、つまり重度の違反をした人は死刑になるんだっとな。では、それ以外の違反をした人は？

そう！ 奉仕活動とは『当事者保護法』に違反した人のうち、重度でない人に課される罰のことだ。厳密には、中程度の違反の人に奉仕活動が割り当てられるようになってる。

では、奉仕活動を行うまでのステップを確認する。教

科書は六十ページだ。

奉仕活動の対象者には、まず、二度と部外者アウトサイダーにならないように再教育が行われる。具体的には、政府の施設に一定期間入所してもらって、そこで勉強や実習を行うことになっている。この一連の流れは『調整』と呼ばれる。

ちなみに、この施設を管理・運営しているのは、行政の『奉仕部』という部署だ。詳しくは中学で習うと思うけど、興味がある人は調べてみてくれ。

この『調整』が終わった人は『奉仕員』となり、各奉仕活動が割り当てられる。割り当ては、調整時の成績や態度、適性、本人の希望などを踏まえ決定される。奉仕活動はボランティアが主だが、一部の人間は介護や生活支援などの職業に従事することもある。ただ、原則として賃金は支払われない。ここはよく間違えるところだから、要注意だ。

奉仕期間は大体数ヶ月から一年ほどだが、罪の程度で前後する。

……そうそう、奉仕期間後の人間は再犯が少ないことで有名だ。これは調整の効果が大きいと言われている。こ

れもきちんと覚えておけよ。

＊

「サクラさん、起きてください！ 今日のは休日ですよ、せつかなので一緒に——」

「朝からうるさいですね……早朝です、近所の迷惑を考慮してください」

土曜、午前六時。目覚ましが鳴るよりも先に、厄介な居候の音が寝室に響く。ガラスの向こうはまだ薄暗い。昨日は雑務や追加の書類確認があつて帰宅が遅くなり、寝たのは結局〇時過ぎだった。体調管理のため睡眠時間を七時間としている私は、目覚ましを普段よりも遅い七時にセットしていた。当然、この起床は予定外である。

軋むベッドから起き上がると、徐々に脳が活動を始めた。数秒間のアイドリングを経て、寝室の入り口に立つヒナと相對する。多少エネルギーを消費するが、この件については詰問が必要だ。彼女は睡眠を妨害した当事者であり、説明責任がある。

「ヒナさん、私言いましたよね。今日は七時に起きると。

あなたも分かったと返事をしたはずですが」

「あ、あれ？ そうでしたっけ？ あはは……忘れてました」

照れ隠しなのか、ヒナは引きつった笑みを浮かべていた。寝起きということもあつて、その笑顔が些か不快だ。失敗は誰にでもあるが、失敗した際に笑ってしまうのは問題である。この点については後ほど指摘するとして——

「それで、起こした用件は何です？ 朝食にはまだ早いですね。怒りませんから用件を述べてください、怒りませんから」

表情筋を調整して、想像する限りで一番穏やかな顔を作る。すると案の定、ヒナは素直に理由を述べた。

「えーと、私はただ、今日は休日なので一緒にお話でもしましょうと提案したかっただけで……」

カチン、という音が聞こえた。脳内で鳴ったのか、現実世界で何か音が出したのかは分からない。はつきりしているのは、この返答を聞いて私が極めて不快になったという点だ。率直に言つて、苛ついた。

「そうですか。では、奉仕部への報告書にそう書いてお

きます」

「話が違いますよ！」

「私は怒らないと言っただけです。報告しないとは言っていないせんが」

「意味合いとしては同じです！ あー、もう、許してください！ まだちゃんとお話したこともないのに」

「あなたが来てから既に数日が経ちます。お話なら何度かしていますよね」

「本当に事務的な会話だけじゃないですか！ 私が言いたいのは、もつとこう、ハートウォーミングで心の通じた合った会話のことで……」

自然とため息が出た。今まで嘆息など滅多にしなかったのに、彼女がやってきてからは癖のようになっていた。数日でこれとなると、全く先が思いやられる。QOLの観点から早急に追い出したいところだ。だが……私は部長の言葉を思い出す。奉仕部の顔を立てろ、と部長は言っていた。ヒナを追い返したりすれば奉仕部の面子は丸つぶれだ。向こうの立場もそうであるし、こちらとの関係もかなり悪化することが予想される。現状、得策ではあ

るまい。

幸い、ヒナを追い返すのは簡単そうだ。私が一筆書けば吹き飛ぶ程度の存在でしかないだろう。ならば、彼女が致命的な問題を引き起こすか、奉仕部の側が引き下がるまでは様子見するのが最善だ。

例えば、私はペットを飼ったことがないが、相手がかかるものらしい。彼女も同じだと思うのはどうだろうか。役に立つ立たないではなく、ただのペットだと思えば

「ちよつと、聞いてます？」

「聞いていません。時間の無駄です」

「え、何ですかその言い方は。目の前の人に対して言う言葉ですか？ 訂正してください」

「……言い過ぎました」

「サクラさんはそういうところがありますよね。国民の模範たる執行官なんですから、早く直した方がいいと思いますよ」

「そうですか」

そういうえば、この生物は人の言葉を話すのだった。中

途半端に意思疎通ができてしまうのはペットとして不向きだろう。残念ながら飼育は諦めた方が良さそうだ。私はまだ一度ため息をつく。無駄なエネルギーを消費する前に、とつとつ次の行動へ移らなければ。

「少し早いです、私はこのまま日課を進めることにします」

「日課？」

「はい。休日は、まず二時間ほどランニングをします。今日は一時間早いで三時間としましょう。自宅で朝食の後、職場の道場へ行ってトレーニングをし、食堂で昼食を摂り、図書室で学習をします。帰るのは二十時頃ですね」

「……それってもしかして、明日もですか？」

「はい、休日の日課ですから」

「……………」

ヒナは黙って、顎先に手を当ててものを考える仕草をした。

「ヒナさん、言いたいことがあれば言ってください」

「……そうですね、いろいろと言いたいことはありますが」

心が決まったのか、ヒナはキリッとした目つきになっ

て言った。

「サクラさん、お出かけしましょう」

「買い出しですか？ 食品については定期購入していますし、物品についても備蓄がまだ十分に——」

「そうじゃなくて、ショッピングってやつですよ。お店を回って可愛いものを買って、美味しいものを食べて、散歩をするんです。素敵でしょ？」

「無駄ですし、非効率です」

「ほら、また悪いところが出てますよ。すぐに無駄とか効率とか持ち出すの、良くない癖です」

「しかし」

さらに異議を唱えようとすると、ヒナが人差し指を私の口元に突きつけた。遅れて「めっ」という声がる。

「じゃあ、言い方を変えます。トレーニングはともかくとして、図書室だけで勉強は進みません。この多様な世界の中で、文字だけを追っていても意味がないんです。たまには世の中、社会というものを覗いてみないと、視野が狭まってしまいますよ」

「しかし、覗くだけであれば映像でも」

「切り取られた世界は全てじゃありません。自分の目で、体で感じることも重要です。科学が自然の詳細な観察によつて生まれたように、世の中をつぶさに眺めることで得られるものもありますよ。私との会話だつてその一環です」

「それに」とヒナが付け足す。彼女はにっこりと微笑んで、こう告げた。

「サクラさんはこの国で一番有名な執行官です。自らが手を下す人たちがどういふ世界で生きているのか、当事者として、あなたには知る責任があります」

\*

予定通り道場で午前中のトレーニングを終えたところで、一旦自宅に戻る。手早くシャワーを済ませると、久しぶりに私服へと着替えた。普段はジャージで過ごしているのもので、私服は箆筒の奥から引っ張り出す必要があったが、既にヒナが用意をしてくれていた。白色のTシャツとデニムのジーンズは多少よれていたが、今回の用途では問題ないだろう。「服も新しく買わないとダメですね

え」と小言を言うヒナをよそに、私は外出用の布マスクを着けた。そうして準備が整ったところで、二人で外へ出た。今日は日差しが強い。時折吹くそよ風が肌を撫でる。まだ先のはずなのに、どことなく夏の香りがした。

官舎を出て少しのところに、鉄製の大きなゲートと守衛室がある。執行官が外出する際は、かならずここで外出手続きを済ませなければならない。職業柄報復を受ける懸念が常にあり、私は知名度もあるため、特に注意しなければならない。手続きは形式的なものがほとんどだが、服装のチェックだけは指差し確認で行われる。安全上の理由から、執行官には私服の制限があるためだ。マスクの着用義務はそのうちの一つである。当然ヒナにはそうした制約がないので、彼女はマスクも着けていない。守衛室に近づくと、年老いた男の守衛が一人、カップを片手に外を眺めているのが見えた。彼はこちらに気づくと、ゆっくりとした動作で応用の窓を開ける。有事の際、この老人一人だけで防衛できるのかは以前から疑問である。尤も、監視カメラやセンサーがあれば事足りるのかもしれないが。

「どうも。サクラさんと、ええと、奉仕員さんね。外出ですか」

「ええ、夕方までには戻ります」

「服装を確認しますが……はい、はい、と。問題ないですね。お気をつけて。食事でマスクを外す時は特にね」

「ありがとうございます」

ブザーが短く鳴って、ゲート右側にある扉が開く。守衛に一礼して、私たちはその向こう側へと向かった。

私たちが住んでいる拘置施設は街の中心部にあるため、ゲートを抜けてしばらく歩けば大通りに出られる。大通りの車の往来は激しく、近くに駅があるせいも、歩道にも多くの人々が溢れていた。久しぶりの外出のため、人々の群れから若干の威圧感を感じる。タクシーでも借りておけばよかったか、と若干の後悔を感じ始めた時、腕がぐいと引つ張られた。見ると、ヒナが私の二の腕を掴んで何やら口を動かしている。ただ、往来の音に負けて声が聞こえない。そのことに気がついたのか、彼女は声を張り上げた。

「あつちにショッピングモールがあります。行きましょ

う！」

ヒナは大通りの先を指差した。確かに、遠くに大きな建物らしきものが見える。車もそちらに向けて走っているものが多いように感じられた。徒歩二十分ほどの場所にモールがあるらしいが、位置からしてあの建物に間違いないだろう。人々が密集する場所に行くのはなかなか気が進まなかったが、これも職務の一環と考えれば仕方がない。モールに向かって数分間歩くと、歩道の横にあった拘置施設を囲む塀がようやく切れた。つくづく広い敷地だ。これほどの敷地を割り当てることにどんな合理性があるのか、などと考えていると、

「サク……えつと、ツバキさんは何が欲しいですか？ モールにはいっぱいお店がありますけど、どれから回ろうか悩んでまして」

ヒナがそう尋ねてくる。最初に私の名前を呼びそうになったが、寸前で中断できたようだ。ツバキは身元の特定を防ぐために事前に決めておいた私の偽名だ。

「欲しい物はありません。ですから、物品の購入はただの浪費です」

「あー、まだそんなことを！ でも残念でした、私がい  
る限り奉仕部の経費で落とせますから。ペアリングとか  
どうですか、可愛いですよ」

「不要です。それに、そういったペアの装飾品は一般に  
カップルが身につけるものでしょう」

「私たち同棲してらんですよ、全然平気です！」

ヒナが大きな声でそう発言して、通行人のいくらかがこ  
ちらをちらりと見る。頭痛がした。ここで目立ってどう  
するのか。私の立場は十分に分かっているはずなのだ。

「声が大きすぎます……あなたとはそういう関係ではあ  
りませんし、今後恋愛をする予定もありません」

「えー、バツサリ言わなくてもいいじゃないですか」

「どうしてそこまで私にこだわるんですか。初対面の時  
から疑問でしたが」

「それは今話すことじゃないですね。ほら、ムードって  
ものがないと」

露骨にはぐらかされて、さらにもう一つ頭痛がした。彼  
女と話しているとどうも話が噛み合わない。コミュニケーション  
ション効率が悪すぎる。世の中の人間はこんな会話を繰

り返しているのだろうか。だとすれば、そんな世界のこ  
とはできる限り知りたくないものだ。あれこれと考える  
私をよそに、ヒナは会話を続ける。

「ところで、ツバキさんはどうして仕事以外のことを切  
り捨ててしまうんですか？ 欲しい物についてもそうで  
すし、日頃の日課にしてもそうですね。あ、これは当  
事者たる家政婦としての疑問ですからね」

ヒナの質問は「あなたには関係ない」という返答への  
対策がなされていた。大事なところには気が回らない割  
に、そういった点への対応は驚くほど早い。些か奇妙か  
つ面倒だ。

「職業柄、私は国民の模範である必要があります。仕事  
に打ち込むのは当然でしょう」

「それは言い訳ですよ。買い物や趣味は一般的なことで  
しょ。国民の模範というなら、それをしないのはむしろ  
不自然じゃないですか」

言われてみれば、確かにその通りなのだ。無論、模範  
として仕事は重要だ。だが、仕事以外に何もしないのが  
模範だというのは極端すぎるだろう。私も、一般論とし

て趣味等に時間を割くことが良しとされている現状を理解していた。なら、どうして私はそうなっていないのか。数秒間の思考の後、私は当たり前前の事実にとどりに着く。とても単純な話だった。

「当然、趣味や浪費……購買についても、理屈としては必要性を理解しています。しかし、政府の施設に引き取られて以降、私は勉強や仕事を徹底せよとの指導を受けました。ですから私はこれまで、趣味などの活動を行うことがなかったのです。とすれば——」

「とすれば？」

「私は、仕事や勉強の当事者であっても、それ以外の当事者とは言えないのではないか。故に、それらを切り捨てることは正当に思えます」

「ふむ……」

小さく声を漏らしてから、ヒナはすっかり押し黙ってしまふ。しばらくの間、私たちは何も会話せずに歩き続けた。一分、二分と時間が過ぎていく。静かなことはいいことだが、先ほどまでの騒々しさを考えるとやや不気味な気すらした。そして、ショッピングモールの建物が

いよいよ目の前に見えてきた時、ようやくヒナが応えた。案の定大きな声で、

「だったら、当事者になっちゃえばいいんですよ！」

彼女が高らかにそう提案する。

「どういう意味ですか」

「どうもこうも、言葉の通りですけど。当事者じゃないから問題だというなら、当事者になればいいんですよ！『当事者は誇り』って標語もあるじゃないですか。ツバキさんなら絶対当事者になれますよ」

「それは政治的なスローガンに過ぎません」

「でも、間違っではないでしょ？ 当事者になれば自由が手に入るんですよ。発言や行動の自由。アウトサイダー部外者が立ち入れない聖域へのチケットが——」

そこでヒナは目を細めて、何かをぼそりと呟いた。だが、その声はやはり喧騒に紛れて消えて、

「さあ、そうと決まれば買い物です！ まずは服を選びに行きましょう。ヨレヨレの服じゃ名が廃ります、榮譽ある職業人としての誇りを持たないと！」

満面の笑みを浮かべながらヒナは私の手を取る。楽し

そうに私を引っ張る彼女の後ろ姿には、影の部分など微塵もないように見えた。

モールに入ってから、ヒナと一緒に様々なものを見て回った。私は世の中の流行と違ったものに全く興味がなかったが、ヒナは様々なことを知っていた。キャラクターのぬいぐるみ、ブランドの小物、新しいスイーツなどの話をしながら、実際に店舗へと足を運ぶ。展示されているものは、どれも私が知らないものだらけだった。私と世の中にズレがあることを改めて感じる。同時に、それらを新たに知ること、社会との距離が縮まっていくこともまた実感した。これで、執行官としての不足点を多少なりとも改善できただろうか。一方ヒナは、アクセサリーショップで品定めしつつ談笑する人々を眺めながら、「当事者になるって、こういうことなんですよ」

などと呟いて、うっとりとした面持ちでこちらを向く。続けて「ねえ、そうでしょう」と私に同意を求めてきた。私は回答に困ったが、経験上、この場合は無視が最善だろうという気がする。放っておいてもいいだろう。

そんなことを考えていると、突然、通路の方で大きな音

がした。ショップの外を見る。通路の床に杖が落ちていて、その隣に高齢の男が倒れていた。杖の先には木製のベンチがあり、これに躓いたのだろうと推察された。男は小さく呻きながら背中を丸めている。打ちどころが悪かったのかもしれない。

通路を歩く人々は男のことを一瞥すると、踏まないように避けて歩いていく。人々には笑顔が満ちていた。この男に構う客は誰一人としていないだろう。この男は助けを求めていない。ならば、誰もが当事者ではない。男に触れてよいのは警備員や救急隊くらいだろう。観察していると、男はうづくまったまま次第に動きが弱まって、動かなくなった。そこで私は興味を失って、ショップの中に視線を戻そうとすると、

隣に、怒りで肩を震わせたヒナがいた。

「どうして誰も助けようとしなんでしょうか!」

そう叫んで男のもとに駆け寄ろうとした彼女の腕を、私はすんでの所で掴む。

「やめなさい。あなたは彼の当事者ではないでしょう」

「でも、転んで倒れてるんですよ!」

「彼には自力で立ち上がるという尊厳があり、それを犯すことは許されません。彼が助けを求めない限り、救助は違法です」

「なら、私が当事者になれば——」

「親族でも知人でもなければ、怪我人に対する応急措置も学んでいないあなたが、当事者になれるとは思えません」

「それは……」

「では仮に助けるとして、具体的にどうしますか？ 不適切な対応があれば、あなたが責任を取ることになります。あなたに判断できますか？」

「……………」

ヒナはその場で俯いて押し黙る。しばらくすると、巡回でやってきた警備員が男を見つけて、トランシーバーで応援を呼ぶのが聞こえた。警備員が男を揺すつたが、男は反応しない。気絶しているのだろうか。いずれにせよ、じきに救急が来るだろう。

「ヒナさん、彼は適切に対応されました。顔を上げてください」

ヒナが顔を上げる。目の周りには涙の筋が浮かんでい

て、店舗の照明が反射してきらりと光った。

「どうして、なんでしょ」

ヒナは呟く。

「そういう法律があるからです。しかし、男性は無事に救助されるでしょう。気に病む必要はありません」

「いえ、そうじゃないんです」

私が答えると、ヒナは頭を振って否定した。

「私が一番許せなくて、一番怖くて、一番嫌なのは」

潤んだ瞳が私を見つめている。小刻みに震えながら、吐き出すように彼女は言った。

「当事者になれないことです。あの倒れている人とも関われないことです。私は、常に当事者でありたい。そうじゃなきゃ生きていく意味がない。部外者なんて、ゴミよりも価値がないんです。だから」

ぽつ、ぽつと涙が床に落ちていく。こうしてヒナが泣いていても、誰もが意に介さない。この場において、ヒナと私以外は当事者ではないからだ。店員は店内の巡回を続けている。近くのカップルは、ショーケース内のペアリングを指差しながら楽しそうに笑っていた。

故にきつと、

「だから、私はサクラさんが好きです。サクラさんは、この国で一番の当事者だから」

この告白は私以外、誰も聞いていないだろうと思った。

\*

モールから帰宅し、夕飯と簡易的なトレーニング、それから入浴を済ませた。片付けが終わると、私とヒナはリビングにある食卓の席に座りながら暇を潰す。変則的な日課になったため、いつもより空き時間が増えてしまっていた。だが、寝るには些か早すぎる。先ほどまではテレビを点けていたが、遅くなるにつれて下らない番組が増え、今は電源を落としていた。部屋は静まり、隣室や下階から微かに物音が聞こえてくるのみだ。これが、私にとっては一番穏やかに過ごせる状態だった。

こうして私が心身を和ませていると、真新しいマグカップに入れたビールを飲みながら、ジャージ姿のヒナが口を開いた。

「ねえ、サクラさん」

「何ですか？」

「好きです。付き合いますよ」

「……何度もお伝えしていますが、できません。私は、恋愛というものが理解できませんので」

「えー」

ヒナが不満そうに声を上げた。彼女は帰宅してからというものの、私に告白ばかりしている。私の返答は変わらないというのに。私は手元のカップを見る。私には飲酒の習慣がないため、代わりにココアが注がれていた。外側には流行りのクマのキャラクターが描かれていて、ヒナのものとは色違いになっている。もちろん、これらは彼女がモールで購入したものだ。

「それに、髪はしっかりと乾燥させてください。そのまま寝るのは不潔です」

「いいじゃないですか、自然乾燥ですよ」

「それで風邪を引いたりした場合、私にも影響が及びます。考慮不足です」

「あー、はいはい。分かりましたあ」

ヒナは赤らんだ頬を膨らませる。シャワーを浴びたば

かりのヒナの髪は随分と潤ったままだ。普段は整っているせいも、濡れてうねり乱れた髪が一段と目立つ。

「にしても、晩御飯のメンチカツは美味しかったですよね！ モールにあんなお肉屋さんが入っていたなんて。また買いに行かなきゃ」

「買いに行くこと自体は否定しませんが、頻度には注意してください」

「お、否定はしないんですね。ふふつ、ようやくサクラさんも分かってきました？」

「……食費が経費として計上される以上、私に否定する権利はありません」

「あはは、素直じゃないですねえ。美味しかったって言えばいいのに」

「味については想定通りでしたが」

「もう……サクラさん、好きです」

ヒナはカップの中身を飲み干すと、透き通った瞳でまた私へ告白をした。私はため息をつく。この国では十八歳から飲酒が許可されているとはいえ、酒を許したのは失敗だった。ビール缶一本でここまで酔うとは。

「人によって酔い方に差があるのは知っていましたが……  
こも酒癖が悪いようなら、飲酒は禁止ですね」

「酷い！ 何の権利があつて——」

「あなたは私の家政婦でしょう。実害が出ています。私は当事者です」

「はーっ、さすが国一番の当事者センサーは言うことが違うなあ」

ヒナは机の上に腕を放り出すと、拗ねたようにそう言った。

「私は、別に一番というわけではありませんが」

「いや一番ですよ。最年少の国選<sup>エグゼキユータ</sup>執行官で執行数も一位つて国民全員が知ってます。しかも仕事以外に興味がない執行マッシーンだなんて、他にそんな人いません。総理だって歯向かえませんよ」

「だから好きになつたんですけど」とヒナが付け加える。その論理はよく分からないが、好意を持たれているのは十二分に把握した。

「ねえ、サクラさん」

「申し訳ありませんが、私には無理です」

「……うう」

ヒナが上目遣いでこちらを見てくるので、やれやれ、と彼女を見下ろしてみる。なぜ私を好きになるのか……という理由は既に彼女が説明していた。が、納得はできていない。彼女のような普通の人間は、一般的な職業の人間と結ばれるべきだろうと思う。とはいえ彼女の嗜好があるので、口にすることは憚られたが。

「あ、じゃあ、空想だったらいいですか？」

彼女についてあれこれと考察をしていると、突然、ヒナが尋ねてきた。

「どういう意味ですか？」

「いや、現実でダメなら空想で結ばれないかと」

「具体例を述べてもらえますか？」

「えー？ うーん、例えば、私とサクラさんが愛を囁きあったり、都市や山、海を巡ったり、ディナーを食べながら綺麗な夕焼けを見つめたり……」

小さく甘い声でヒナが語り始める。現実には起こりえないであろう可愛らしい妄想を話す度に、ヒナの瞳はきらきらと輝いた。

「ね、素敵じゃないですか？ 空想の世界でなら、私は自由に生きていけますよね。好きなように生きて、好きな人たちと未来や世界について語り合って、助け合って」

「…………」

「空想の世界なら私は捕まったりしないし、奉仕部に入られることもないんですね。誰かを見捨てたりしなくてもいいんですね。誰かのことを思ってもいいんですね」

確かに彼女の瞳は輝いていた。それは少女が妄想に思いを馳せているせいもあるし、話を聞く限りきつと、彼女の過去に何かがあったのだろうとも思った。

「私の中でなら、私は、当事者……」

そこでヒナは机に突っ伏した。声をかけるも、言葉になっていないわごとが返ってくるのみで、そこから動く気配がない。こうなるともう、眠りに落ちるのを待つのみだろう。私は隣室のクローゼットに向かって、奥にしまったあった薄い毛布を取り出す。リビングにいるヒナの元に戻ると、穏やかに小さな寝息が聞こえてきた。彼女の顔を観察していると、袖越しに見える赤く染まった

頬をきらりと光が伝っていく。

「風邪を引かれると迷惑です」

私は毛布をヒナにかけてやる。ほのかに笑みを含んだ彼女の寝顔は、十八歳の無垢な少女に似つかわしいものだ。そんな少女が、どうして奉仕員になってしまったのか。どうして、当事者であることにこだわるのか。私は彼女に少しばかり興味を抱いた。

しかし、この興味には問題がある。私は奉仕員としての彼女に対しては当事者だ。だが、彼女の個人的な面については当事者ではない。彼女の過去を詮索することは、私の立場上許されない。私は、国民の模範でなければならぬのだ。よって、私もヒナと同様に妄想を試してみることにした。自分の中に留めておくだけなら、誰にも咎められることはない。

ヒナの素性についていくつか想像してみる。好奇心旺盛で大胆な行動に出た結果捕まった哀れな少女。私をくまなく調査する任務を課された潜入捜査官。伴侶を失ったショックから暴走した乙女。いずれも突飛とはいえ、全く否定できるほどの材料がないこともまた事実だ。まず

まず彼女の謎が深まった気がした。キリがないので、もしヒナが幸せに過ごせる世界があるとしたら、と考えるテーマを変えてみる。が、しばらく考えてみても、その未来を具体的に思い描くことはとうとうできなかつた。唯一想像がついたのは、彼女が幸せになった時、私のような存在は不要になるだろうということだけだ。

私は国選<sup>エグゼキューター</sup>執行官である。国民の代表として、人を殺すのが職務である。それが、彼女の求める純粋な幸せと相容れるはずがない。

私は初めて、ヒナのことを羨ましいと思った。

## 破

それから、ヒナとの関係は驚くほど密接になった。まず、朝食と夕食を一緒に摂るようになった。夜に同じテレビ番組を観るようになった。ヒナと会話する頻度が少しずつ増えるようになった。ヒナとの外出から一週間後には、

「サクラさん、私の布団を持ってきました」

「では、そこに置いて……待ってください。ヒナさん、これは？」

「注文しておいたぬいぐるみですよ！ サクラさんに、これを私だと思って抱きながら寝てもらおうと——」

「要りません。返品してください」

「そんな殺生な！」

いつの間にか寝室が同じ部屋になって、さらには、「サクラさん、もう出会って一週間ですよ！ 寝室も一緒になったことですし、私の呼び方を変えてください」

「検討します。具体的にどう呼ばりたいのですか？」

「名前そのまま。ヒナ、でいいです」

「……業務上問題ないですし、いいでしょう。では、ヒナ「やったー！ ギゅつと接近できた気分です！ このままいけば……」

「よく分かりませんが、あくまで呼び方を変更しただけです。支障がある場合は直ちに戻しますので」

「ふふっ、はいはい」

彼女の要求通り、名前を呼び捨てにするようになった。この頃からヒナはますます調子に乗っている。一度灸を

据えるべきなのかもしれない。

さらに一ヶ月が経つ頃には、私はヒナと過ごすことに何の疑問も抱かなくなっていた。彼女の経歴は引き続き気になっていたが、ヒナは自分のことについてほとんど語ろうとしなかった。しかし当然、お互いに生活するうちに肌感覚で察したこともある。例えば、彼女は間違いないスパイではない、過去に付き合っていた相手がいるらしい、等だ。日常会話から漏れ出した情報を繋ぎ合わせて過去を推測する作業はさながら探偵のようで、情報整理の訓練に丁度いい。日々の報道やその日の出来事を話しつつヒナの出方を伺うのが、私の新たな日課となった。

また、週に一度は一緒に外出するようになった。理由は様々だ。環境調査、地理の把握、流行の確認……どれもヒナの提案で、『執行官たるもの、あらゆることに精通している必要があるのです』と、彼女は外出すべき理由を毎回熱弁した。詭弁な気がするのだが、それでも最後には説得されてしまうのが不思議だった。

こうして、嵐のように訪れた非日常はいつしか新たな日常となって、私の生活をすっかり塗り替えてしまった。

それが生活というものの本質なのかもしれない、などと、今日も二人で朝食を摂りながら私は思う。

だがそれ故に、見に覚えがないにも関わらず、早朝の自宅に彼らがやってくるのもまた、十分に起こり得ることなのだ。

「すみません、サクラさんのお部屋ですよ。警察です。お尋ねしたいことがあります。開けてください」

呼び出し音と声がして、私たちは朝食を中断する。インターホンの画面を見ると、スーツを着た大柄な男が三人映っていた。この官舎の敷地には特定の間しか出入りができず、それ以外は守衛に身元を明かす必要がある。つまり彼らは詐欺師や強盗でなく、正真正銘の警察だ。廊下を抜け、言われるがままに玄関を開けると、男たちは手にしていた手帳を無言で開いてみせた。薄暗い早朝でも、手帳のバッジははっきりと視認できる。手帳を持つ彼らの腕はよく鍛えられていて、つまり、そういう役目の人間たちなのだろうということが容易に分かった。リビングから出てきたヒナを横目に、彼らは私に尋ねる。

「サクラさん。単刀直入にお尋ねします。現在、ヒナさ

んと恋愛関係にありますか？」

「いえ、そういう関係ではありません」

「では、ヒナさんのSNS上での発言について把握されていますか？」

「いえ。プライベートに興味はありませんので」

「そうですね」

それを聞いた男たちはお互いに頷きあう。それからヒナに向き直って、予想通りだと言わんばかりの自信に満ちた顔でこう告げた。

「ヒナさん。サクラさんに対する当事者保護法違反の容疑がかかっています。署にてお話を伺いたいのですが、ご同行願えますか」

「ちよつと待ってください、それはどういう——」

「サクラさん」

さらなる予想外の言葉を聞いて咄嗟に聞き返そうとするも、私の声を遮って、ヒナが前に進み出る。

「いいんです、分かっていますから」

「何が分かっているのかを教えてください」

「ごめんなさい」

ヒナが謝罪をするも、私の求めていた答えが返ってくることはなかった。すぐに二人の男がヒナを挟み込むようにして立つ。手錠こそ使わなかったが、逃げ出すことを警戒しているのは間違いない。全く隙がない対応に、私は一抹の恐怖を覚えた。

「では、私たちはこれで。タナカ、後は頼んだ」

「はい」

ヒナたちが外へと移動する一方で、その場に茶髪の男が一人だけ残る。

「サクラさん、さよなら」

去り際、寂しげにたった一言の挨拶だけを残して去っていくヒナを、私はただ見つめることしかできなかった。立场上、この場はとにかく警官たちに従っておくべきだと結論づけて。

近づいていたはずのヒナとの距離は、もうずっと遠い。

「それでは、いくつか事情聴取をさせていただきたいのですが」

玄関のドアが閉まりきると、タナカと呼ばれた男が私にそう尋ねた。

「それ以前に、どうしてヒナが連れていかれたのか、説明をお願いできますか」

質問を質問で返すのは一般に推奨されない行為だ。だが、現状においては状況を把握することが先決だろう。私の質問に対し、男は不快な様子を見せることなく、むしろ哀れむような表情で答えた。

「いや、SNSのサイバーパトロール中に彼女の投稿が見つかりましてね。彼女はあなたと恋愛する物語をあなたに無断で公表した上、関連する意見も発言していたって容疑がかかっているんですよ。ほら、あなた、仕事以外に興味がないって有名じゃないですか。だから確認に来たんですが……やれやれ、執行官相手に厚顔無恥にも程があると云いますか。身内が<sup>アウトキャスト</sup>部外者だなんて……本当にご愁傷様です」

—— ○○市○○小学校 六年生 科目…社会科 ——

今日は、どうして当事者を保護する必要があるのか考えてみよう。

お前たちは、自分のことを詳しく知らない人が、自分の行動や発言についてあれこれ言ってきたらいい気分になるか？ ならないよな。一人に言われるだけなら我慢できるかもしれない。だが、複数人の野次馬たちがやってきて、次々にアレはダメ、コレはダメ、ああしろ、こうしろって言ってきたら……考えたくないよな。

昔は、それが当たり前だった。昔の人は、テレビやインターネットで見たこと聞いたことに対して、よく知りもしないのに『意見』を発言したり、ひどい時は他人を制限する活動やデモまで起こしてたんだ。

教科書の六十三ページを見てみる。窓が割られた店や、落書きされた車の写真があるよな。これは昔、ある病気が流行した時に『自粛警察』という人々がやったことだ。他人の事情を詳しく知りもしないのに、中途半端な知識や正義感だけで、こういう行動を起こしてしまったんだ。それに、隣の六十四ページにあるのは昔のニュースサイトのコメント欄だな。自分たちとは立場も文化も違う人たちに向かって、大した知識もなしに、上から目線で発言しているのが分かる。ほら、上から二つ目とか読んで

みるといい。酷いもんだ。まるで自分たちだけが正しいかのようだ。全くおかしい。

こんなことが広まってしまった結果、これらは我が国における大きな社会問題になっていった。誰もがお互いに文句を言い合い、SNSがそれらを拡散させる。終わらない悪口合戦に、みんな疲弊していったんだ。そして、六十五ページにもある通り、二〇XX年のYY月、△△という有名人が部外者や野次馬の『意見』に病んでしまい、自殺をしてしまった。これは△△事件と呼ばれ、大きく報道された。

そこでようやく政府が動き、抜本的対策として、現在まで続く『当事者保護法』ができたんだな。

この『当事者保護法』のおかげで、部外者はアウトサイダーと呼ばれる犯罪者になった。人々は自分について詳しくない人、親しくない人から、不快な『意見』をももらうこともなくなった。

他人に傷つけられることもなく、他人を傷つけることもない。素敵な社会だ。この法律のおかげで、みんなは堂々と生きられる。

だから、当事者でない限り、他人に関心を持たないこととは正しい。お前たちも、クラスメイトや先生のことなんて普段はどうでもいいだろう？ 怪我したって、死んだって、所詮は大した繋がりのない他人だ。クラスの責任者、つまり当事者である先生に怒られない限り、みんなは何をしたっていい。文句を言うやつ、勝手に関わってくるやつはれっきとした犯罪者だ。例えば、困っている人を勝手に助けることは悪いことだって、お前たちも教わっただろう？ 宿題ができない人を手伝うのは、その人の成長する機会を奪ってしまう。勉強できない人に勉強しろって言うのは、その人の特徴を潰してしまう。だから、無関心でいる。それって、幸せなことだよな。そう、幸せな世界になったんだ。

でも、実は最近、先生は分からなくなってきてな。

誰かのことを考えて、発言したり行動したりすることは本当にダメなことなのか。自分とは違う人々、自分たちとは違う文化に思いを馳せて、描いて伝えることは本当にダメなことなのか。曖昧さを怖れて、全てに線引きをして、機械マシンのように生きることは本当に正しいことなのか。

のか。

——『当事者保護法』は、本当に良いものなのか。

\*

丸一日の休暇の後、私は執務室に呼ばれた。部屋に入ると、来賓用のソファに黒服の男が二人と、向かいの席には部長が座っていた。男たちは静かに背筋を伸ばし、軽く握った拳を膝の上に乗せている。作法の教科書に載せるような『丁寧な座り方』としてはこれ以上ないだろう。卓上には三つの湯呑が置いてあるが、いずれも十分な量が残ったままだ。部長は入ってきた私に手招きをして「本日はどうもすみませんね」と男たちに頭を下げた。彼らは表情一つ変えずにそれを無視する。

「監査官のミヤザキです。サクラ執行官、ヒナという奉仕員の件について数点聞き取りをしますが、よろしいですね」

「構いません」

彼らは続ける。

「奉仕員に対し、あなたは恋愛感情を抱いていましたか？」

「いいえ」

「奉仕員は、日頃からあなたへ好意を示していましたか？」

「はい」

「奉仕員に対し、明確に恋愛感情がないことをあなたは示しましたか？」

「……はい」

「奉仕員がSNSを利用していたことについて、あなたは関知していましたか？」

「いいえ」

「奉仕員がSNSに投稿していた、『サクラとヒナ』の恋愛をテーマとした一連の内容について、事実ではないことを認めますか？」

「……はい」

「なるほど。では、聞き取りは以上です、お疲れ様でした」  
 終始平坦な調子で機械的に質問を済ませると、男らはそのまま立ち上がり、部長を一瞥してから部屋を立ち去った。時間にしておよそ一分。深堀りもない、あからさまに形式的かつ誘導的な聞き取りは、この件に対する本部の態度を如実に表している。私は、ヒナが度々倫理的に

問題のある発言をしていたことを口にしなかった。聞かれていないのだから、答える義理はないだろう。

執務室のドアが閉まってからややあって、彼らの足音が聞こえなくなった頃、部長がいつにも増して低い、疲れきった声で私に問いかけてきた。

「サクラ、今の受け答え、何考えて話したんだ」

「何も。正直に答えただけです」

「ならそれが、ヒナにどう働かかも分かった上で言ったんだな」

「私は嘘をつけません」

「君は変わったと思ったんだが」

「変化も異常ありません。私はただ、仕事をこなすだけです」

「なあ」

部長がため息をついて続ける。

「人つてのは、どうやっても不甲斐ない生き物だと思わんか。間違いの上間違いを重ねる。ルールを守り、守る意味を失う。なら、その仕事とやらに果たしてどれだけの価値があるんだろうな？」

「……すみません。分かりません」

「そうかい」

部長は胸のポケットから煙草のパッケージを取り出すと、手の平に向けて小さく振る。ぽとりと一本が落ちて、部長はゆっくりとそれを噛みしめるように啜えた。

「やれやれ、今は火を点ける気にもならんよ」

そこでなぜだか、私は部長の言葉にどうしようもなく苛立った。

「この建物は禁煙です。偉そうに倫理を語る前に、部長として規則くらい遵守されては？」

部長が驚いた顔をしてこちらを見る。自分でも、不必要な発言が口について出たことに対して驚いていた。苛立ちほど無駄な感情は存在しない。だが、今の私の中で、確実に何かが発火寸前になっているのが分かる。

「……そうだな、君の言う通りだ。八つ当たりなど、全く自分が情けない」

部長は自席のゴミ箱へ向かうと、噛んでいた煙草を中に吐き捨てて、そのまま部屋を出ていった。私もどうすべきか逡巡した。が、仕事がない上に、現状の心理状態

で職場にいることは当然リスクである。自室に戻るのが妥当だろう。

開いたままのドアを抜けて部屋を出る。ひとまずロッカーへ向かわなければ。

『なら、その仕事とやらに果たしてどれだけの価値があるんだろうな？』

頭の中で、部長の言葉、単純な問いがひたすらに繰り返される。脳内で問いが再生される度、怒りが波紋のようにながらっていく。苛立ちは消えない。増幅され、繰り返され、消えない。

……ああ、やはり、人間は嫌いだ。私が施設で適性検査を受けた、あの日。「どういう職業を望むか」という検査官の問いかけに対し、私はきっぱり答えたのだ。

——感情を持たず、機械のように働ける場所を望みます。私は人間になりたくありません。人間なんて何の価値もありませんから。私が捨てられたように、アウトサイダー部外者が見捨てられるように。

\*

そして二十二時を過ぎた頃、奉仕部の部門長と名乗る男が自室に訪ねてきた。こんな遅い時間帯の来客など滅多にない。やや不審に思ったが、どうしても話がしたいと言うので玄関を開けると、

「サクラ様！ この度は、誠に申し訳ございませんでした！」

間髪入れず、男は床に額を押し付けて土下座の格好になり、そのまま数十秒間動こうとしなかった。汚れも厭わない行動とは裏腹に、男が着ているダークグレーのスーツは綺麗なもので、汚れ一つ見当たらない。

「状況が把握できません。失礼ですが、説明をお願いします」

男の真剣さはともかくとして、行動の理由が私には全く分からなかった。

「今回の発生した事件では、我々の奉仕員がご迷惑をおかけしてしまい——」

「奉仕員ではなく、奉仕部が私に対してどのような迷惑

をかけたのでしょうか」

「それはもちろん、奉仕員を不十分な教育のままサクラ様へ派遣してしまい、結果としてこのような事態を引き起こしてしまつた点です」

ああ、と私は納得した。つまり、奉仕部はそれで手打ちにしたいのだろう。しかし——

「つまり、奉仕部での教育では、部外者アウトサイダーとなりうる発言についてのカリキュラムが含まれていなかったということですか？」

不毛な質問ではないか、と頭の中で声がする。それでも私は、尋ねることを止められなかった。

「いえ！ 我々も、万全を期していたつもりでしたが、実際にこのようなことが起こってしまったては……」

「では、奉仕部では適切な対応を行っていたということになりませんか」

「しかし、奉仕員が引き起こした以上、我々も関係があると考えるのが自然です」

「そうですか」

「そうですとも」

男がそつと顔を上げてこちらを見た。男の顔には不自然なほど純粋な反省の色が浮かび上がっていて、きつとこの顔も、スーッと同様に入念な準備がなされたものなのだろうという気がした。

取るべき行動は分かっている。男、いや、奉仕部の過ちを認め、今後の方針について協議すればよい。少なくとも奉仕部は、そういう対応を望んでいるのだろう。思惑はともかく、向こうにとつても今回の件を大事にしたくないという意思は伝わってきた。対応によっては、ヒナも無事に帰ってくるかもしれない。だが——私は、この一ヶ月を回想する。奉仕部からの派遣。変わった日常。穏やかな日々。突然の逮捕。そして、今。

ヒナは突然やってきて、私の生活をかき乱した。彼女は当事者として私の生活に介入し、一緒に過ごして、最後はただの外野に——消されてしまった。

ふと、私は、彼女との生活の当事者だっただろうか、と自問する。確かに彼女とは同じ部屋で同じ時を過ごしていたが、それでも彼女と私の間には未だ溝があったのではないだろうか。それも恋愛成就の有無のような程度のも

ものではなくて、もっと根本的で、シンプルな何かが残っていたような気がするのだ。

決め手が、私には欠けている。二人の当事者となるために必要な決め手が。

『なら、その仕事とやらに果たしてどれだけの価値があるんだろうな？』

ヒナが連れて行かれた時のことを思い出す。寂しげな表情の彼女を、私はただ見送ることしかできなかった。彼女は私を『国一番の当事者』と呼んでいたが、あの時の私はどうだ。半端な理性が邪魔をして、連行を止めてやれなかった。生活を共にしていたにも関わらず、彼女を助けてやれなかった。国一番が聞いて呆れる。

そうした事実がどうしようもなく、無性に腹立たしい。眼下の男を見つめる。男の完成された表情と服装の裏には、底しれぬ怯えが潜んでいるのだろうと思う。彼らはこの件の当事者たちに対して怯えているのだ。だからこそ、武装を固めて相手を飲み込まんとする。そうやっ

て誇示した末に、自分自身を当事者にするつもりなのだ。私たちを差し置いて、ありもしない責任を持ち出して。

人間はいつだってそうだ。都合が悪い時は他人に責任を押し付け、都合が良い時は利点を奪い取ろうとする。私は出産者から廃棄され、存在ごと政府の施設に押し付けられた。国選執行官<sup>エグゼキューター</sup>となつてからは、人々から畏怖と責任を押し付けられた。奉仕部から、ヒナを押し付けられた。私は努力した。それが私の存在する唯一の理由だからだ。施設では勉強に打ち込んだ。執行官になつてからは仕事に全てを捧げた。その後、ヒナが来た。最初は仕方なく受け入れた必要な家政婦だった。それが彼女との距離が縮まるにつれ、関係は生活ごと変容していった。ニュースやテレビを見ながら会話をして、外出もして、相手のことをあれこれ想像したり考えたりして、寝食を共にして、呼び方も変えて。私と彼女は少しずつ、お互いの当事者になりつつあったのだ。

だが、ヒナが少し不注意だっただけで、彼女は部外者<sup>アウトサイダー</sup>として連れて行かれてしまった。結果行われたのは？ 機械的な聞き取りだけだ。誰も私やヒナの感情を汲み取ら

なかつた。つまらない監査官と、この男をけしかけて。部長のように、全てを悟つたように振る舞つて。

そしてとうとう、人々は自分たちの都合で、私たちがらなけなしの当事者性をも奪おうとしている。押し付けて押し付けて、最後には奪う。私たちの生活を。ヒナの純粋な幸せを。

私を捨てたのは誰だ。部外者<sup>アウトサイダー</sup>を見捨てたのは誰だ。

真に責任を問われるべきは、誰か。真に当事者となるべきは、誰か。

——いいだろう。当事者になることが、そんなにも甘美であるならば。

「私は、そう思いませんね」

固まっていた男の表情が僅かに動いたのを、私は見逃さない。

「サクラ様、どういうことでしょうか」

「奉仕員であるヒナがこちらへやってきたのは一ヶ月以上前です。その間、奉仕部はこちらに何ら干渉しませんでした。違いますか？」

「それはそうですか」

「さらに、奉仕部のカリキュラムにも問題はなかった。であれば——」

思考が痺れて、収縮して、一点に収束する。私は決意を固めた。男を真正面に見据えて、堂々と告げる。臆することなく、迷いなく。

「ヒナの管理責任は、私にあると考えるのが自然でしょう」

「い、いや、しかし」

男の表情が崩れ、露骨に動揺しているのが見て取れる。それはそうだろう。これは言うなれば、

「何か問題でも？ 当事者として、私が責任を取るだけの話です」

「……あなた、何を言っているのか分かって——」

「私が、ヒナを執行します」

人殺しの、婉曲的表現に過ぎない。通常ならまず選ばない選択肢だ——仮に見返りとして、この件についての確実な当事者が手に入るとしても。

しかし、私は選ぶ。選んでやる。そうしなければ、ヒナと私の存在が認められることはないからだ。

当事者という果実を、ここで渡してなるものか。

「そういうことですから、お引取り願えますか。奉仕部は今回の件について、明らかに部外者ですから。異論がある場合は、奉仕部の責任者から正式な文書でお送り願います」

男の顔が一瞬で青ざめる。シンとした静かな時間がしばらく続いた。

「……まさに、執行マシンだ」

男はそう捨て台詞を吐くと、焦った様子でよろめきながら部屋を出ていった。彼が上に報告をすれば、たちまち奉仕部や本部は大騒ぎになるだろう。執行官は数々の執行を行ってきたが、身内殺しをした例はない。ましてや、執行官が直々に執行を申し出た例など、決して。明日以降の呼び出しや必要な手続きのことを考える。関係各所に大迷惑をかける上に、煩わしい仕事が大量に降ってくるであろうことは容易に想像できた。

だが、それでも——

「確かに私はマシンです。ただ、今はそれが誇らしい」  
私はもう、迷わない。

急

お上の思惑が存分に汲み取られた形式的な裁判を経て、執行官を裏切った極悪人であるヒナの執行が正式に決まったのは、それから二ヶ月後のことだ。部長がこの決定を私に伝えた時、彼は善いことだとも悪いことだとも言わなかった。これはすぐにニュース等で大々的に取り上げられ、ご丁寧にかッチコピーまで付いている。内容はこうだ。『全国民が当事者です！ 国の裏切り者に裁きの鉄槌が下る！ 史上初、被害者自らが執行します！ 来週火曜十八時より政府広報チャンネルで放映』。

この執行は間違いなく、過去最高の視聴率になるだろう。私は身内に裏切られた悲劇のヒロインであり、身内すらを殺す猟奇的なマシンにもなる——名実ともに、国一番の当事者となるのだから。

\*

みなさん、おはようございます。今日は、みなさんに大事なお話があつて集まつてもらいました。校長先生の言うことを、ちゃんと聞いておいてください。

突然ですが、今日から、六年生の社会科の先生がいなくなるようになりました。その先生が、法に違反してしまつたからです。

当事者保護法、という法律があります。物事において、アウトサイダー部外者から当事者を守る法律です。

世の中には、よく知りもしないのに、他人のことに首を突つてみたがる人たちがいます。

一昔前、他人に押し付ける独りよがりな正義が流行し、息苦しい世の中になってしまったことがありました。

一昔前、芸能人などに対してSNSでいろんな意見が書き込まれ、問題になったこともありました。

一昔前、他国の人の行動に過剰に反応して、その国の文化を破壊してしまつたこともありました。

他人からよく見られたいがために、聞きかじつたニュースや情報を元に、耳障りのいい意見ばかりを発言、拡散し、歪んだ正義の流行に乗つた野次馬たちが、自分

たちの思い通りにならない現実の当事者たちを叩き続ける。少し前まで、世界はまさに地獄でした。先生はそうした時代に生きてきました。何を言ってもよいのか、何をしてもよいのか分からない、息苦しい時代でした。

あらゆる外野、部外者アウトサイダーの意見は、当事者の人たちを困らせ傷つけます。だから今では、そのような発言や行動は全て裁かれるのです。基準も分かりやすい。自分が当事者であるかどうか。明らかでない時は、当事者ではない。これだけです。こんな単純なルールのおかげで、他人に自分たちの発言や行動を邪魔されることはなくなつたのです。よい世の中になりました。

ですから、校長先生からお願いします。今から言うことを、みなさんに改めて徹底してほしいと思います。

『当事者でない限り、他人には関わらない』。先生も、みなさんもそうです。特に、安易に他人を助けないこと。助けを求められない限り、放っておきましょう。

さまざまな意見を持つことはよいことです。でも、当事者でない限り、意見を言わないようにしましょう。部外者には、責任が伴わないからです。そんな人たちに、意

見を語る資格はありません。

ですから、当事者になる努力を一生懸命しましょう。当事者であることは、名誉なことだと思いましょ。

校長先生は、この学校の当事者になれて幸せです。みなさんにお話をする自由もありますから。

ああ、本当に、よい世の中になりました。

＊

長い読経が終わって、束の間の静寂が訪れた。小さな執行室の中央にある電灯の光が、青色に塗られた壁に反射して、眼前の少女の横顔を薄青く染めている。彼女は微笑を湛えたまま、稀にふらりと左右に揺れた。彼女は硬直処理フリリーズを選択しなかった。執行の瞬間を、訪れる最期を、全て自分で受け止めるつもりだ。それでも、彼女は穏やかに笑っていた。

私は以前、硬直処理フリリーズしない人間はどういう表情になるのかを考えたことがあった。彼らがそのオプションを選択した理由は、それを選ばなければ悲惨な顔つきを見せしてしまうからではないかとも思った。しかし実際は、た

またまオプシオンがあつたから選んでみた程度の理由し  
 なくて、実際はそれがなくても、誰もが笑顔で最期を  
 迎えられるものなのかもしれない。世の中は奇想天外で、  
 誰もが尤もらしくあらゆる予想を外しながら、ひたすら  
 に馬鹿馬鹿しく生きている。やっていることは難しく見  
 えるが、自身は存外空虚なものだ。世の中やヒナ、そして  
 自分自身を観察するうちに、私はそう思うようになった。  
 「読経が終わりました！ 間もなく、執行です！」

部屋の奥の窓越しに、普段の三割増しの人数がひしめ  
 いているのが見える。大きなカメラは相変わらず中央に  
 陣取っており、左右の人々は窮屈そうにしていた。その  
 偉そうなカメラの向こう側には数百万——いや、数千万  
 の人間がいて、この少女の結末を見届けようとしている。  
 皆が史上初の歴史的瞬間を心待ちにしているのだ。なぜ  
 なら、今この場においては、全国民が当事者であるから。  
 だが、眼前の少女だけは、この時この国における唯一  
 の部外者で、国民から見捨てられながらも、最も注目さ  
 れている存在である。

対する私は、エグゼキューター 国選執行官である。エグゼキューター 国選執行官は国民の

模範であり代表である。人々の願いと怒りを背負い、職  
 務を粛々と遂行することが求められる——相手が誰であ  
 ろうとも。

故に、私の右手には銃が預けられていた。不義を断罪し  
 正義を知らしめる銀色のボディは、高潔な国民の象徴だ。

『執行官、準備』

部屋に無機質なアナウンスが響く。私は躊躇うことな  
 く、左手で銃のセーフティーを外す。カチャリ、と普段  
 よりも小気味よい音と感覚がした。

『構え』

少女のうりざね顔の下、首筋に銃口を向けて、

『撃て』

すぐさま、私の首筋に銃口を向け直す。

『——中止！ おい、誰か止めろ！』

無機質なアナウンスが途端に有機性を帯びて叫ぶ。が、  
 もう遅い。私は引き金を引いた。首筋に小さな衝撃とチ  
 クリとした痛みが走る。何度も執行してきた身として、  
 その痛みの弱さに驚いた。これなら、硬直処理フリーズがオプシ  
 ョン扱いになるのも頷ける。

そうやって首もとの感覚を確かめていると、慌てた様子  
の大きな足音の後、扉が乱暴に開けられて、小さな箱  
を手にした白衣の医者が部屋へ飛び込んできた。持って  
いるのは、執行官が誤射した際に使用する抗血清ナノマ  
シンだろう。あれを注射されたら私の計画は失敗だ。

銃口を向けると、医者はたじろいだ。もちろんナノマ  
シンは一発しか入っていないし、そのことは医者も知っ  
ているはずだ。それでも、私が握る銃の威力と意味を目  
の当たりにしてきた人間は、誰だって銃口が自分に向く  
のを嫌がる。もしかしたらという思考が、一瞬、医者  
の脳裏によぎったのだろう。間合いを詰めるには、それ  
だけの時間で十分だった。

私は医者のもとへ一気に走り寄ると、両腕を構えてバ  
ランスを取りつつ、右足で箱ごと思い切り腕を蹴り飛ば  
した。箱は医者 of 背後に吹っ飛ぶと、中から注射針の付  
いた小さな装置を吐き出して落ちた。すかさず、床に横  
たわる装置を勢いよく踏み潰す。バキッと軽快な音がし  
て、取り付けられていたシリンドラーが破裂した。透明な  
液体がゆっくりと床に広がっていく。護身術として学ん

でいた拳法が役に立った。護身とはまるで逆の使い方に  
はなったが。

医者はすっかり青ざめた表情で、為すすべもなく呆然  
と立ち尽くしている。装置が破壊された今、彼にできる  
のはただ一つ。誤射をした、哀れな人間の末路を眺める  
ことだけだ。私の勝利と敗北は確定した。

ふわり、とした浮遊感を感じると同時に、平衡感覚が  
失われる。普通の執行対象なら、執行官に支えられてい  
る頃だ。立つのが限界になって、私は足を放り出して仰  
向けになると、首を動かしてヒナがいた方を見た。既に  
いなかった。さらに首と体を動かして背後を確認すると、  
そこでヒナが号泣していた。ようやく私は、自分の聴覚  
が失われていることに気がついた。ナノマシンは対象の  
美しさをできる限り保ちながら、効率的に命を奪う。私  
の外見は一切壊されることなく、魂だけが静かに抜き取  
られていく。

ヒナが私の目を覗き込む。こぼれ落ちた涙がポロポロ  
と顔に当たっているのが辛うじて感じられた。意識が朦  
朧とする。重力が消えていく。視界がぼやけて、一面が

白く輝いていた。天に歓迎されているようで、晴れやかな気分だ。

失われていく思考が弾けて、ヒナが描いていた妄想を走馬灯のように映し出す。私とヒナが愛を囁きあつて、都市を巡り、野山を駆け、潮騒に沿って歩き、夕焼けを見つめて……。ただ、この物語には欠点がある。どんな幸せがあろうとも、単に生きるだけではまた邪魔されてしまうのだ。ヒナが通報されたように。警察がヒナと私を引き裂いたように。

これを防ぐには、これ以上誰にも介入させないようにすればいい。誰にも文句を言わせないようにすればいい。誰もヒナと私へ届かせないようにすればいい。つまり、地球上で唯一無二の最強の当事者になれば、これらを達成できる。私たちが望むのは、究極の楽園だ。

『私は、常に当事者でありたい。そうじゃなきゃ生きていく意味がない。部外者なんて、ゴミよりも価値がないんです』

『私はサクラさんが好きです。サクラさんは、この国で一番の当事者だから』

最高効率かつ最強の解を、私はヒナに提示する。自殺を選んだ狂ったマシンと、殺されなかった部外者アウトライダー。こんな存在、二度と現れない。現れようがない。

故に、

——これなら、もう——

私の意識がこの世との接点を失った瞬間、  
私たち二人は、永遠の当事者になった。

## たのしい手書きあとがきコーナー

ぜんぶ読み終わったら、  
今からみんなと海に行って  
インターネットよりデカイ花火を  
上げませんか？ あまね

VR 女体化  
興味深いけど  
ドハマリだけは  
したくないんだよなあ…。  
みみずのひも



猫吸は  
健康に対する悪影響も  
猫への依存を強めます。  
吸うなら機械ネコに  
しましゅ!!



#へん子アソート  
(解射)以前デバンス  
お蔵入ってたヤ%

PS5 が 4ヶ に 失敗 した けど、

死体 じゃ ね じ

一 系 者 に Among Us を や り ま し ゅ !

PS. 誰 だ て い た ら だ 全 て の 方 に 感 謝 せ し ゅ ! 有 坂 ;)

ここから「next kawaii inversion」の感想をお聞かせください！



または、<https://hentaigirls.net/book/next-kawaii-inversion/feedback/>

## 変態美少女いろいろそふい。からのお知らせ

変態美少女いろいろそふい。では、自由文化作品化の方針<sup>1</sup>を定めて成果物を世界に広く開放しています。本誌「next kawaii inversion」も、すべての作品がCC BY 4.0でライセンスされています。

自由文化作品化の方針は、近年よく行われているSNSやウェブサイトでの成果物の無料公開とよく似ていますが、その本質は全く異なります。自由文化作品化の方針は、これまで留保されてきた権利を明確に解放するためのものです。

成果物を多くの人に使ってもらうには、広く使われているライセンスで明確に許諾すべきです。自由文化作品の定義<sup>2</sup>は、あなたがどのようなライセンスを用いるべきかを決定する指針になりえます。もしこれらのライセンスが気に入らなければ、より厳しい制限を課すほかのライセンスを使うこともできます。ただし、成果物の利用を恣意的に制限したい欲望に駆られたとしても、あいまいなお気持ちライセンスを適用することだけは避けねばなりません。

成果物の利用を広く許諾することは、あなたの経済活動を決して否定しません。誰かがあなたに作品を書かせたり<sup>3</sup>、成果物の利用方法に制限を加えたりすること自体には、許諾の範囲にかかわらずやはり対価が必要だからです。

変態美少女いろいろそふい。では、定期刊行している合同誌であるなかよしブック「りりよる」シリーズへの寄稿を募集しています。「りりよる」シリーズは、自由文化作品化の取り組みの一環です。あなたも、自由でのびのびした作品を広く世界に公開してみませんか？ ご興味がありましたら、変態美少女いろいろそふい。の公式サイトから寄稿についての情報<sup>4</sup>をご覧ください。

<sup>1</sup> <https://hentaigirls.net/about/>

<sup>2</sup> <https://freedomdefined.org/Definition>

<sup>3</sup> 近年、複数のウェブサービスで「リクエスト」などの名称で実装されています。

<sup>4</sup> <https://hentaigirls.net/collabo/>

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

---

書名 ..... next kawaii inversion  
発行日 ..... 2020/11/22  
発行 ..... 変態美少女ふいろそふい。  
印刷 ..... 文伸印刷株式会社 コミックモール事業部  
連絡先 ..... [circlemaster@hentaigirls.net](mailto:circlemaster@hentaigirls.net)

---



変態美少女ふいろそふい。